

平成 27 年度

年 次 報 告 書

神 戸 常 盤 大 学
神戸常盤大学短期大学部

刊行の辞

本学では、平成4年に自己点検・評価委員会を設置し、平成18年度からは学内の各組織・委員会と個人の活動およびFD活動等の報告を「年次報告書」として刊行し、平成25年度から本学ホームページに公開しています。

本学は、平成20年に短期大学から4年制大学へと改組を進め、保健科学部医療検査学科、看護学科に続いて平成24年に誕生した教育学部こども教育学科は、平成28年3月に初の卒業生を送り出し、うち11名は小学校教諭として巣立っていきました。短期大学の口腔保健学科も平成20年の3年制化以降、順調な歩みを進めています。

このように順調な改組と歩みの一方で、本学はなお大きな変革を遂げようとしています。本学の教育目標は、さまざまな人の「いのち」を心身両面から支えるスペシャリスト「いのちのサポーター」の育成です。急速に変化する社会にあって自己啓発をつづける質の高い「いのちのサポーター」を育成するためには、狭義の専門知識・技能だけでなく、広く関連領域も主体的に学修し、「自ら課題を見出して解決できる力」を育成する教育が必要です。この目的を達成するため、本学では平成26年度に「教育イノベーション機構」を発足させ、過密なカリキュラムを見直して基礎・教養科目とアクティブラーニングを充実させる「教学マネジメント改革」を進めています。この変革の重要性に鑑み、本書では「教育イノベーション機構」の発足から2年間にわたる活動報告を第2部に分けて掲載しました。

これまでの「年次報告書」には、各人、各組織が一年間の活動成果を取りまとめ、自己評価して、次の改善に役立てる、という意義がありました。一方、「教学マネジメント改革」のように学部・学科横断的に大学全体で進める変革を点検・評価するためには、点検・評価体制の見直しが必要です。変革の結果と過程を評価するしくみ（全学アセスメントポリシー：ASP）についても、検討を進めているところです。今後の「年次報告書」が、ASPに基づく評価結果を加え、より充実した内容に発展していくことを期待します。

平成28年6月

神戸常盤大学
神戸常盤大学短期大学部
学長 上田 國寛

目次

頁

刊行の辞	1
------	---

第1部 各組織年間活動報告書

I. 学科別 年間活動報告書

1. 保健科学部 医療検査学科	4
2. 保健科学部 看護学科	8
3. 教育学部 こども教育学科	12
4. 短期大学部 口腔保健学科	15
5. 短期大学部 看護学科通信制課程	18

*教育イノベーション機構の活動報告は第2部に掲載

II. 学内組織別 年間活動報告書

1. 入試広報委員会	22
2. 教務委員会	25
3. 学生委員会	27
4. 自己点検・評価委員会	29
5. FD委員会	30
6. 図書・紀要委員会	34
7. 広報紙編集委員会	36
8. 研究倫理委員会	38
9. 個人情報保護委員会	41
10. ハラスメント防止対策委員会	42
11. 危機管理（災害）委員会	43
12. ICT推進委員会	44
13. 高大連携委員会	45
14. 就職委員会	46
15. 国家試験対策委員会	54
16. 臨地実習委員会	62
17. 通信教育委員会	69
18. 遺伝子組換え実験安全委員会	71
19. 健康保健センター	72
20. 神戸常盤ボランティアセンター	75
21. 地域交流センター	77
22. 国際交流センター	78

23. 教職支援センター	80
24. K T U 大学研究開発センター	81
25. 口腔保健研究センター	82
26. 神戸常盤大学子育て支援センター「子育て広場えん」	84
27. ライフサイエンス研究センター	87
28. 事務局	89

第2部 自己点検・評価委員会の年間活動方針報告

—教育イノベーション機構発足から2年間の活動報告—

第3部 本年度の「学生による授業評価」学科別のまとめ

第4部 「卒業生・就職先へのアンケート調査結果」報告

第1部 各組織年間活動報告書

I. 学科別 年間活動報告書

1. 保健科学部 医療検査学科 (M科) 年間活動報告書

学科長 坂本 秀生

基礎データ							
	入学者数	在籍者数	退学者数	休学者数	留年者数	転学科者数	卒業者数
1年	94	94	0	0	0	0	
2年	95	95	4	0	0	0	
3年	93	89	3	1	0	0	
4年	100	108	4	2	16	0	88
休退学等の理由： 休学:病気療養、海外留学、進路再検討 退学:進路変更 *在籍者数はH27.5.1現在、他欄は年度中の動向							
学科目標資格取得状況							
臨床検査技師国家試験	受験者数	88人	合格者数	77人	合格率	87.5 %	
細胞検査士認定試験	受験者数	13人	合格者数	11人	合格率	84.6 %	
	受験者数		合格者数		合格率	%	
卒業後の進路							
就職内定者数 (率)	73名 (83.0%)	進学者数 (率)	6名 (6.8%)	その他 (率)	9名 (10.2%)		
本年度の課題							
1. 臨床検査技師国家試験および細胞検査士認定試験合格率を向上させ、いずれも100%を目指す。 2. 教育イノベーション機構と連携の下に基礎教育(教養教育、基幹教育)を充実させる。							
本年度の目標・方針							
1. 現役生だけでなく、卒業生も含めた臨床検査技師国家試験対策として、個々人にあつた指導を行って全員合格を目標とする。 2. 細胞検査士認定試験合格率が向上するよう指導する。 3. 専門知識だけでなく基礎教育を充実すべく、教育イノベーション機構と共に効果的なカリキュラムを見直す。							
主な活動内容							
a. 目標達成に向けた活動内容(根拠資料・記録)：							
1. 臨床検査技師国家試験対策として、現役生、卒業生を対象に前期から学習指導を行い、個別面談を行いながら学修支援を行った。特に成績下位層は理解できない点が解らない、学習意欲が湧かない等が原因でもあり、国試対策委員を中心にガイダンス、課程外で勉強の行い方や補習及び模擬試験を行った。第62回国家試験合格率の内訳は本学新卒者 87.5%であり、全国新卒者の 87.4%と同等であった。合格者の内訳							

を確認すると4年で卒業した学生は92.3%であるのに対し、5年以上で卒業した学生は50%と合格率に大きな差が生じた。また、既卒生に関しては14.3%とこちらも全国平均の15.9%と同等であった。合格者の内訳を確認すると浪人1年目の者だけが合格し、2年以上浪人している者の合格者はいなかった。前期から成績不振者、浪人生への指導を行った成果もあり、いずれも全国平均並みの合格率とすることが出来たが、ここに至るまでは課程外での教員に献身的とも言えるサポートがあった。全国平均合格率とは言え、11名もの不合格者がいた事は事実である。特に留年生には低学年からの支援が必要と思われる。【根拠資料:国試対策委員会議事録】

2. 細胞検査士認定資格に関しては学科内に細胞検査士養成課程を設け、3年時終了時点で、細胞検査士養成課程を専攻できる14名を対象にし、特に4年時に集中的な指導を行った。4年前期途中で1名が臨床検査技師国家試験だけに集中したいと、細胞検査士養成過程を辞した。10月に実施された筆記試験（一次試験）は13名の受験者全員が合格し、細胞検査士養成過程発足後初の快挙であった。12月に実施された実技試験（二次試験）を経て、11名が合格し合格率は84.6%であった。細胞検査士認定資格の全国合格率は公表されないが、一次試験で50%、二次試験では30%前後とされており、本学の合格率は驚異的な良さである。これは細胞検査士養成過程を担当する専任教員、非常勤の指導の成果でもあるが、二次試験で用いる高解像度の顕微鏡を導入するなど、施設をより充実した効果も大きいと思われる。
3. 1年生対象の「臨床検査入門」では教育イノベーション機構のグループ学習手法を取り入れ、初年度から自発的な発言や行動を促す授業を行った。また、大学全体で行う教育改革に対し、教務委員を中心に低学年時から各科目のつながりを再確認しながら、カリキュラムの見直しを精力的に学科内で行った。その過程で入口である入試委員、出口である就職委員や国試対策委員の意見も取り入れ、学生負担を減らしながら、学生に沿った授業形態を組めないか話し合いを繰り返した。【根拠資料:医療検査学科会議、教授懇話会議事録】

目標達成度の評価: 1. できた ②. ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった

b. 学科運営における主な活動内容（根拠資料・記録）:

1. 教科運営

学内にて各教科での連携がなされているか、各教科のつながりを視覚的に分かりやすく出来るよう、カリキュラムマップの作成を行い教員同士で科目のつながりを確認した。非常勤講師には初回授業時に学科長がお願いの挨拶を行い、特に本学科での授業が初めての場合、学科のディポルマポリシーを示しながら、学科の教育方針の説明をした。

臨地実習実習に関しては臨地実習委員会を中心にし、新たな臨地実習病院先の開拓と依頼を行った。医療検査学科専任教員全員で分担し、各病院へのお願いと挨拶と実習巡回及び病院との連絡を密に行った。【根拠資料:医療検査学科会議録】

2. 学生支援

個別支援

1年生には入学後と後期、2年生には後期開始後、3年生は時期を選んで全員に個別面接を行い、適応状態や進路志望等の確認をした。4年には講師以上の卒研担当教員が5～7名程度の学生を受け持ち、面接を適宜行った。担任は上記の面接以外に休みが多い学生に声かけ、個別面談で抱えている問題を教員が対処するように務め、面談結果は学科で共有した。【根拠資料:医療検査学科会議録、面談記録】

学習支援

基礎学力テスト、全学年までの成績結果、出席状況等を学科で共有し、学科会議にて学力その他の実態を報告し合い、問題や課題がある学生への対応法を共有し、支援した。特に成績不振な学習困難者の支援を行うため、担任以外にサポート教員制度を設けている。サポート教員は数名の学生に対し、履修指導を含めた学習指導を行った。【根拠資料:医療検査学科会議録、学習支援対象者ファイル】

キャリア支援

就職委員会、国試対策委員会がそれぞれの学年でガイダンスを行い、特に3年生からはガイダンスの頻度を挙げ、就職指導と国試対策を行った。また、卒業生によるキャリアサポーター制度を利用し、卒後の活躍をイメージし、自身のキャリア・デザインを考える機会を設けた。【根拠資料:就職委員会報告、国試対策委員会報告】

3. FD への取り組み

再履修率の高い教員はいない。

学科内FD研修

学科FDとして「学生による授業調査において評価の高い授業を教員が評価する」ことを行い、評価が高い要因はどこにあるか意見交換を行った。

さらに教育改革に関して科目間のつながりを分野別に話しあい、全教員がディボルマポリシーを達成しつつ過密授業解消に具体策を話し合った。【根拠資料:医療検査学科会議録、学科FD報告】

c. 社会活動、研究活動、など:

1. 社会活動

兵庫県臨床検査技師会（兵臨技）の公益活動に積極的に参加し、「全国検査と健康展」の兵庫会場として本学を提供し、本学教員で臨床検査技師免許を有した7名が協力した。さらに、兵庫県が行う「健康福祉まつり」に兵臨技会員として、本学教員で臨床検査技師免許を有した2名が本校の研究資材を用いて協力した。

また、臨床検査学教育を行う学校が加盟する、臨床検査学教育協議会の副理事長を学科長が務め、同会の運営を行っている。加えて8月19日～21日に信州大学にて開催された、第10回臨床検査学教育学会に副大会長として関わった。

2. 研究活動

科研費申請に多くの教員が申請し、2名が採択された。学内のテーマ別・ジョイント研究は8件が採択された。それらの成果を国内だけでなく国際発表、英文誌への投稿を行うなど成果の公表も実践している。

医療検査学科長が研究責任者となり看護学科およびこども教育学科の教員と共に「私立大学戦略的基盤形成支援事業」で採択された「災害対応を組み込んだ機動的サポートシステム神戸常盤モデルの構築」を平成25年から3年継続で実施し、最終年度として研究をまとめ、外部評価委員の前で成果発表も行った。

その他にも受託研究費を外部から獲得するなど、研究活動も精力的に行っている。

次年度の課題

1. 全学年を通して、社会人としてのマナーの向上
2. 学生個々にあった学習支援の実践
3. 教育改革に向けた教員同士の連携力強化

2. 保健科学部 看護学科 (N科) 年間活動報告

学科長 長尾 厚子

基礎データ							
	入学者数	在籍者数	退学者数	休学者数	留年者数	転学科者数	卒業者数
1年	82	82	0	0	0	0	/
2年	89	86	2	1	0	0	
3年	90	86	4	0	0	0	
4年	85+編入2	93	0	0	6	0	
休退学等の理由： 進路変更等 <div style="text-align: right;">*在籍者数はH27.5.1現在、他欄は年度中の動向</div>							
学科目標資格取得状況							
看護師国家試験受験資格	受験者数	87人	合格者数	82人	合格率	94.3%	
保健師国家試験受験資格	受験者数	26人	合格者数	23人	合格率	88.5%	
養護教諭免許取得	受験者数	/	合格者数	13人	(9月卒含む)	/	
卒業後の進路							
就職内定者数 (率)	84人 (94.4%)	進学者数 (率)	0人	その他 (率)	*未定者：養護教諭非常勤講師登録し、待機中		
本年度の課題							
1. 教育イノベーション機構の教養教育の改正に伴い、本学科のカリキュラム点検を行い卒業時の到達度との関連等を、検証していく。 2. 学科の将来的展望内容を検討し、今年度は看護学科教授会を中心に以下の2つの課題を検討する。 (1) 「大学院設置の構想」を検討し、その妥当性等の情報分析を行う。 (2) 「編入学」に関する学士入学の検討を行う（入試広報委員会との情報連携）。							
本年度の目標・方針							
1. 教育イノベーション機構の教養教育の改正に伴い、本学科のカリキュラム点検とともに教育内容の精選を行い、本学の教育改革の推進に寄与する。 2. 本学科カリキュラム運営による教授・学修過程の成果として、看護師・保健師の国家試験の結果、全員が合格基準に達する。 3. アドミッションポリシーに基づく資質の高い入学生確保の維持（近隣看護系大学の増設の中、本学科は高い受験者数を維持しており、その継続）							
主な活動内容							
a. 目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）： 1. 教育イノベーション機構主導による教養教育の改革に向けて、現行の看護学科カリキュラムの見直しを行った。 全体の教養教育の方向性が「彩り豊かな知の広がりを与える基盤教育」を構築していくことである。また、ときわ教育の全体像に向けての教育目標やポリシー等のもと、シームレスに「ときわ教育」全体を構成すべく、看護学科のカリキュラム全体の見直しを行った。特に専門基礎科目・専門科目においては看護学科独自の教育内容であり、現行の内容の質							

の低下が起こらないよう、慎重に検討し結論を出した。また、保健師課程、養護教員養成課程の内容も追加し検討を加えた。

教養分野の科目については、教育イノベーション機構の「人間教養科目群」検討チームからの検討内容を看護学科の教育目標と照らし合わせながら内容を精選していった。今年度中での方向性はおおむね決定したが、次年度に向けて更なる検討を加え、本学の教育改革の推進に寄与していきたい。【根拠資料：学科会議議事録、看護学科教授会議事録】

2. 看護師国家試験は90名（既卒・9月卒業・過年度生を含む）受験し、84名が合格、合格率93.3%であった。全国平均は89.4%であるため、全国平均は上回っているが、新卒のみの合格率は本学94.3%であり、全国平均94.9%であるため若干低い。受験者の状況を分析すると「必修問題」の全体では得点率91.4%と合格基準81.6%以上を大きく上回っている。しかし、不合格者の中で1問不正解のため不合格になった学生がいた。また、「一般・状況設定問題」は得点率72.1%であり、合格基準61.1%以上を大きく上回っている。不合格者の得点率をみると59.9%～60.4%であり、あと一步の学習不足が原因していた。今年度も早期から模擬試験の実施、その結果に伴う個別指導、冬期休暇・直前までの学習支援等実施してきたが、さらに、次年度に向けての個別指導に重点を置きながら全員合格に向けて国試対策を強化していきたい。

保健師国家試験は30名（既卒・過年度生を含む）が受験し24名が合格、合格率80.0%であった。全国平均は89.8%であり、若干下回っている。保健師課程の選択性を取り入れての初めての受験生であったが、選択制での学生は23名であり合格率100%であった。旧カリキュラムで受験資格のある既卒性が受験するため今後は既卒性への指導も必要である。【根拠資料：国家試験対策委員会議事録、学科会議議事録、看護学科教授会議事録】

3. 全国的な看護系大学の増設傾向の中、兵庫県内では平成28年度に向けて看護系大学がさらに1校開設され、国公立を含めて15大学となる。大阪府を含めると25校の看護系学部・学科を持つ大学があり、志願者の動向には注目が必要である。

平成28年度入試の看護学科の受験者数は401名（留学生1名・編入生2名含む）で前年度（398名）より3名増加した。また、入学者は82名（男子5名、女子77名）であり、合格率2.6倍（昨年2.5倍）である。さらに、入試形態別に志願者の動向をみると、指定校推薦による合格者は前年とほぼ同数で推移し、公募推薦入試の志願者は昨年度168名から144名と24名減少している。一般入試の志願者は昨年157名から169名と12名増加しさらに、センター利用での志願者が昨年度は27名が今年度37名と増加している。また、志願者層にいわゆる偏差値が高い層が増え、それに伴い基礎力テストに対しても高い学力保持層が増していることがうかがえ、歩留まりの状況を見ても昨年と同様「本学科を選択しての入学」という応募スタンスが確立し始めている。一般入試・センター利用入試の志願者の増加は、近隣の看護系大学の増設・18歳人口の減少の続く中、厳しい状況での増加である。志願者数の増加と、資質的的確な選抜に関しては、従来からオープンキャンパス等で、本学科の教育内容を丁寧に伝えていくこと等の継続と、カリキュラムポリシーに基づいた的確な教科運営により、ディプロマポリシーの確実な到達を導くことで、結果に繋がると考える。【根拠資料：看護学科総括会議録、入試広報委員会選抜試験総括資料】

目標達成度の評価：1. できた ②. ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった

b. 学科運営における主な活動内容（根拠資料・記録）：

1. 教科運営（授業運営）

（1）教科運営に関しては、各専門領域（教養・専門基礎領域、基礎看護学、健康支援看護学、母子支援看護学、療養支援看護学）の教授が主宰する領域会議（月 1 回程度）で、教育内容等の検討を行っている。さらに学科会議（月 1 回）において、必要時、検討を行い、年度末には総括学科会議を設け、各専門領域からの教育評価（総括）を行った。また看護学科の総括的な運営においては、看護学科教授会（月 1 回）において審議検討し、全教員が共通認識を持ち学生指導に当たれるよう学科会議で報告を行った。特に今年度は教育改革に向けてのカリキュラムの検討を行い、教養分野・専門基礎分野・専門分野の教育内容について検討し、看護学科としての方向性について審議した。

また、臨地実習科目においては臨地実習検討委員会が中心となり、円滑な学修プログラムの策定・運営・実施・評価を実施している。【根拠資料：学科会議議事録、看護学科教授会議事録、学科総括会議資料】

（2）授業評価に関しては、各教員から提出された授業評価は概ね良好で、平均 3.9～4.0 である。特に看護学科独自の項目の評価が高く 4.5～4.7 の科目もありこれらの授業評価を年度末の学科総括会議で共有し次年度の授業運営に役立たせるよう意見交換している。

【根拠資料：領域会議議事録、学科会議議事録、看護学科教授会議事録】

2. 学生支援

（1）学生の学修支援に関しては、教務委員からの学習の進捗状況の報告を踏まえてチューター・担任が学修支援を行っている。また、大学生活全般においてはチューター、クラス担任、さらに、各専門領域の授業担当者が、可能な限り学生個々のレディネスに応じて対応できるようにしている。チューターの役割が大きく効果もあげており、今年度の退学者は全学年で 3 人と、全国平均に比べて少数にとどまっている。国家試験対策は、早期から模擬試験の実施、その結果に伴う個別指導、冬期休暇・直前までの学習支援等、対策委員会の活発な活動を実施し成果を上げている（前述）。就職支援に関しては、就職委員会の活動により、病院・保健所等への希望者は、ほぼ 100%の内定であった（養護教諭に関しては、5 人中 3 人が未定で待機中）。【根拠資料：学科会議議事録、看護学科教授会議事録・学科総括会議資料】

3. FD活動

学科内FD活動として、FD委員会主導で研修会を実施した。「臨地実習における教育力とは何かを考え、評価の視点をする」を目標とし、「臨地実習における看護実践能力とその評価」の基調講演の後、グループワークを実施した。

今年度の全学FD委員会活動の方針の一つを受けての内容で、全教員が学生指導に当たる臨地実習での教育力を高めるための教育方法と評価にスポットを当てた内容となり、満足度は高かった。また、実習施設の指導者の参加のもと実施される臨地実習指導者研修会でも、「学生の主体的な学びの支援を考える」のテーマで基調講演・グループワークを実施した。ここでも、指導者・教員間のディスカッションを通して、教員の指導力の向上につながる内容となった。【根拠資料：学科会議議事録、看護学科教授会議事録、学科総括会議資料】

<p>c. <u>社会活動、研究活動、など</u>：</p> <p>1. 社会活動：①蓮池婦人会のデイサービス・介護プログラム事業には、述べ12人の教員が健康相談・講義、さらには健口体操等を12回実施し、述べ123人が参加している。さらに看護協会本学拠点「まちの保健室」活動では、述べ28人の教員が計8回実施し、総計186人の参加が見られた。②高大連携事業：県立明石南高校の「基礎看護Ⅰ、Ⅱ」の講師として3人の教員が協力。③三田市民病院との地域連携入試協力：病院側との連絡調整を密に行い、今年度、三田市民病院には、地域看護を担うべく意欲を持った5人の卒業生が就職している。【総括学科会議議事録】④看護系大学との組織的連携においては、日本看護系大学協議会・日本私立看護系大学協会・全国保健師教育機関協議会・日本養護教諭養成大学協議会に加盟しており、それぞれの総会に関係教授を参加させ、連携を深めた。また5年前に設立した県内看護系大学協議会には、2回の会議に学科長と、地域看護学教授が参加している。加えて、学部長が理事をしている私立看護系大学協会の研修会「看護専門職としての看護学教育を実現する教育評価-専門職のコアコンピテンシーと国家試験：梶田叡一氏の基調講演及びディスカッション」を、2月11日に大阪で開催し、全国から200人近くの参加者があり、活発な討議や交流を行った。</p> <p>2. 研究活動：科研費の応募に積極的に取り組み、今年度3件（通信制課程含む）が採択されている（継続中3名）。また学内のテーマ別研究や神戸常盤学術フォーラムに発表、その他、看護系の学会等に多数の研究発表を行っている。</p>
<p>次年度の課題</p> <p>1. 教育イノベーション機構の教養教育の改正に伴い、本学科のカリキュラム点検を行い卒業時の到達度との関連等を、検証していく。</p> <p>2. 学科の将来的展望内容を検討し、今年度は看護学科教授会を中心に以下の2つの課題を検討する。</p> <p>（1）「大学院設置の構想」を検討し、その妥当性等の情報分析を行う。</p> <p>（2）「編入学」に関する学士入学の検討を行う（入試広報委員会との情報連携）。</p>

3. 教育学部 こども教育学科 (E科) 年間活動報告

学科長 後藤 晶子

基礎データ							
	入学者数	在籍者数	退学者数	休学者数	留年者数	転学科者数	卒業者数
1年	84	84	0	0	—	—	
2年	92	88 (復学1名)	4	0	—	—	
3年	89	87	2	0	—	—	
4年	92	87	4	2	—	—	85
休退学等の理由：退学：進路変更、家庭の事情 休学：体調不良 *在籍者数はH27.5.1現在、他欄は年度中の動向							
学科目標資格取得状況							
保育士資格	78名	公立保育士 2名 公立保育教諭 1名					
幼稚園教諭一種	80名	公立社会福祉事業団 1名					
小学校教諭一種	43名	小学校教員採用試験受験者数	24名	合格者数	11名	合格率	46%
卒業後の進路							
就職内定者数 (率)	82名 (96.5%)	進学者数 (率)	1名 (1.1%)	その他 (率)	2名 (2.4%)		
本年度の課題							
① 完成年度を迎え、養成課程を滞りなく展開する。 ② 一期生の卒後の進路支援を効果的に実施し、進路先を確保する。 ③ 養成課程の検証の結果と社会状況の変化に対応して、カリキュラム改訂を整える。 ④ 完成年度以降を見据えた学科内教員組織の整備を図る。							
本年度の目標・方針							
① 学科の完成年度にあたり、最終課程を滞りなく展開する。 ② 一期生の進路支援を効果的に実施し、卒後の進路を確保する。 ③ 開設以来の検証の結果と社会状況の変化に対応して、カリキュラムの改訂を行う。 ④ 学科内昇任人事と教員公募により、次年度以降の学科組織体制を整備する。							
主な活動内容							
a. 目標達成に向けた活動内容 (根拠資料・記録)：							
① 初めての4年次科目が開講となり、中でも教職実践演習、卒業研究、課題別実習等、学科教員が多くかかわり教育課程の仕上げとしての意味のある科目について、進行状況を確認しながら効果的に進めた。(学科会議議事録)							
② 学科就職委員会・教職支援センター委員を中心に、カリキュラム内外で就職支援、採用試験対策を実施した。その結果は上記の通り、ほぼ全員の卒後の進路を確定することができた。(学科会議資料)							
③ 学科将来構想委員会を中心にコース制に基づいたカリキュラム改訂を図った。教授							

会、理事会で認められ、来年度入学の5期生からの新カリキュラムとなる。教養科目については、全学的な動きに合わせるべく、保留としている。(学科会議議事録)

- ④ 今年度末の学科退職者状況を踏まえ、学科内での昇任と、新規採用人事をおこなった。(学科教授会資料)

目標達成度の評価：1. できた ② ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった

b. 学科運営における主な活動内容(根拠資料・記録)：

1) 教科運営(上記aで記述した内容以外)

① 非常勤教員への対応

年度開始前あるいは最初の授業時に学科長から学科の教育運営についてのご希望の挨拶をするとともに、教務委員から、授業運営にかかわる注意依頼事項の説明と書式による報告依頼をしている。その他必要に応じて随時学科長、関連科目担当教員、実習関連科目担当非常勤助手が対応している。(学科会議議事録・教務委員からの依頼状と様式)

② 実習科目の運営

臨地実習委員会を中心に、各実習の効果的運用について協議した。今年度が初めての開講となる課題別実習についても、それぞれ就職先を見据えての配置を行った。保育・施設実習については近畿厚生局の指導に基づいた内容を臨地側と共有し、教育実習についても、年2回神戸市教育委員会と協議会で話あっている。(実習委員会議事録、教員の資質向上神戸市連絡協議会資料、学科会議議事録)

2) 学生支援

① 1年生には入学1ヶ月後と1年後期、2年生には後期終了前、3年生は進路別に時機を選び全員に個別面接で、適応状態や進路志望等の確認をした。4年生については、採用試験対策として、個別にその都度学科教員だけでなく、教職支援センター委員、キャリア支援課委員の力を借りながら何度も面接を重ねた。これは本年度の課題②に連動しているものである。(学科会議議事録、面接周知案内)

② 上記以外に、欠席が目立つ学生については、担任が個別に面談を重ね、学科会議で共有している。また未修得科目の多い学生も、担任が呼び出して指導をしている。(学科会議議事録)

③ 保護者懇談会(1年・3年の保護者対象)を年度末に開催し、今年度初めて卒業生進路先状況を報告することができ、また学生の進路支援についての取り組みを説明し連携を深め、学生のキャリア支援を強化した。(案内状、アンケート、学科会議議事録)

④ その他授業のグループ討論やゼミで個別の学生の状況把握を心がけた。授業料滞納学生については担任がケアし、学科会議で報告している。(学科会議議事録)

3) FDへの取り組み

① 授業評価について、結果と各教員の改善策を学科会議で共有し、それぞれ対策をとった。大学全体平均に比して、こども教育学科全体として各分野で0.1~0.2ポイント低いことが判明し、改善していくことが求められる。

② 再履修率の高い教員はいない。

③ 学科内FDについては、コース制カリキュラムの策定そのものが学科FDであり、それぞれの教員が参画している。(学科会議議事録、学科将来構想委員会資料)

<p>c. <u>社会活動、研究活動、など</u>：</p> <p>① 科研費は3名が研究続行中であり、1名が共同研究者として新規に採択された。テーマ別研究には筆頭研究者3名、連名研究者3名が採択された。（教授会議事録）</p> <p>② 幼稚園との連携 ときわキッズクラブの開催（放課後専任教員の専門性を活かしたプログラムを実施）、研修会、子育てセミナーの講師を務める（学科会議議事録）</p>
<p>次年度の課題</p> <p>① 5期生からの適用となる新カリキュラムを円滑に遂行する。</p> <p>② 新カリキュラムとコース制の導入について、社会の情勢、学生の実態に照らし合わせ、初年度から検証を開始する。</p> <p>③ 旧カリとなる2～4期生の単位取得状況を把握し、卒業に不備のない体制を保持する。</p> <p>④ 教養科目について、全学的な体制と学科のオリジナリティを効果的に接合していくカリキュラムを構築する。</p> <p>⑤ 今年度補充しきれなかった教員体制を整える。</p>

4. 短期大学部 口腔保健学科 (0科) 年間活動報告書
 学科長 野村 慶雄

基礎データ							
	入学者数	在籍者数	退学者数	休学者数	留年者数	転学科者数	卒業者数
1年	76	76	5	0	0	0	
2年	79	77	2	1	0	0	
3年	88	88	3	6	10	0	73
4年							
休退学等の理由：進路変更、経済的理由 <small>*在籍者数はH27.5.1現在、他欄は年度中の動向</small>							
学科目標資格取得状況							
歯科衛生士国家試験：新卒	受験者数	73人	合格者数	73人	合格率	100%	
卒業後の進路							
就職内定者数 (率)	66人 (90.4%)	進学者数 (率)	3人 (4.1%)	その他 (率)	1人 (1.4%)		
本年度の課題							
① 新採用教員4名を迎えての更なる歯科衛生士教育の充実を図る ② 平成28年度のカリキュラム改正を実現する ③ 過年度生増加の要因を分析し、学生の学力向上の方策を考える ④ 教員の資質向上を図る							
本年度の目標・方針							
① 教養ゼミの定着 ② 平成28年度カリキュラム改正を目標にした定期的な検討会議開催 ③ 歯科衛生士リカレント教育の継続 ④ FD活動を通しての教員の資質向上を図る							
主な活動内容							
a. 目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）： ① 1年生前期の教養ゼミ（グループ制）を引き続き実施し、教員と学生間の交流を通して人格形成を促すことができた。また、「学びのしおり」を配布し、当学科の教育理念等や学修する上での指導を行った。当学科の課題であった早期退学者を3名に留めることができた背景として評価できる。 （根拠資料：学科教授会議事録、学科会議議事録） ② 平成28年度カリキュラム改正を目指し、毎月1回のカリキュラム検討小委員会を開催し、専門基礎分野・専門分野の科目名称・開講時期・単位数などについて検討し、教養分野を除くカリキュラムの改正を申請し受理された。また、教育課程の編成の基本となる従来の「ディプロマポリシー」を見直し、新しい「ディプロマポリシー」に基づくカリキュラム編成を検討した。教養分野に関しては、教育イノベーション機構の基幹教育との整合性を図りながら継続的にカリキュラムを検討する。 （根拠資料：カリキュラム検討小委員会議事録、学科教授会議事録、学科教授会議事録）							

- ③ 平成 25 年度「私立大学等教育研究活性化設備整備事業」に基づく、「歯科衛生士リカレント教育 キャリアアッププログラム」を学校教育法の「履修証明制度」に対応したプログラム（歯周疾患管理・口腔機能管理・歯科医療管理コース）として設定した。その結果、7 名が 1 年間受講し、6 名の履修証明書を発行した。

（根拠資料：教授会議事録、学科会議議事録）

- ④ 教員の資質向上のために、学科教員の授業公開や「学生による授業評価」の結果を前年度のものと比較し検証を行った。研究活動の活性化に向け、外部資金の獲得として学科教員が、科学研究費の申請を 4 件行った。その結果、新規 1 件が採択された。また、学内のテーマ別研究費申請では、1 件の申請が有り 1 件が採択された。

（根拠資料：公開授業記録、KTU 外部資金獲得状況記録）

目標達成度の評価：1. できた ② ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった

b. 学科運営における主な活動内容（根拠資料・記録）：

1) 教科運営（授業運営）

上記の a に一部含まれる。（①教養ゼミの定着、②平成28年度カリキュラム改正を目標にした定期的な検討会議開催）

③臨地実習施設への研修会

臨地実習の施設指導者に大学教育の実態を理解してもらうための研修会を臨地実習指導者会議で 2 回行い、歯科衛生士教育の現状を理解していただくことができた。（根拠資料：臨地実習指導者会議議事録）

2) 学生支援

上記の a に一部含まれる。（①教養ゼミの定着）

②未修得単位の多い学生への対応・支援

歯科学基礎分野での定期試験不合格者が多く、希望者に対して集中的に補習を行った。担任は前・後期の単位取得状況を把握し、時には保護者を交えて今後の対策を話し合い前向きな解決策を検討した。

③学生生活に問題のある学生への対応・支援

担任が学生面談を通して指導することに加え、中には学生相談室を紹介するなど積極的に支援した。（根拠資料：面談記録表）

④国家試験対策

専門基礎・専門分野の補講並びに校内模試・業者模試を多岐にわたって実施し、現役卒業生を全員合格させることができた。

（根拠資料：国家試験対策委員会議事録、学科会議議事録）

⑤就職・進学支援

国家試験合格者の内 66 名が病院・診療所・企業などに就職し、3 名は日本歯科大学短期大学、福岡医療短期大学の専攻科に進学した。1 名は大阪大学歯学部附属病院研修生となった。

（根拠資料：学科会議議事録）

c. 社会活動、研究活動、など：

- ① 口腔保健研究センターでは、附属幼稚園・神戸常盤女子高校・TOKIWA健康フェアにて

歯科健診ならびに口腔機能に関する検査を行い、口腔の健康維持に努めている。

(根拠資料：学科会議議事録、口腔保健研究センター運営会議議事録)

- ② 子育て支援センター「えん」にて、出前講座を行うとともに、子供のフッ素塗布を実施している。

(根拠資料：学科会議議事録、口腔保健研究センター運営会議議事録)

- ③ 長田区における地域保健事業（こどものむし歯予防のための検討会、長田区民まちづくり会議のにこやか部会など）に参画している。

(根拠資料：学科会議議事録、口腔保健研究センター運営会議議事録)

- ④ 「こうべ歯と口の健康づくりプラン」推進キャンペーンに参画し、合わせて神戸市危機管理センターにて「災害時の命を守る口腔ケア」について啓発した（11月、2月）

(根拠資料：学科会議議事録)

次年度の課題

- ① 継続して歯科衛生士教育の充実を図る
- ② 教育イノベーション機構の基幹教育に基づく教養分野のカリキュラム検討
- ③ 過年度生増加の要因を分析し、学生の学力向上・支援の方策を考える
- ④ 教員の資質向上を図るため、研究面では月1回の勉強会を実施する

5. 短期大学部 看護学科通信制課程 (CCN) 年間活動報告書
 課程長 高宮 洋子

基礎データ						
	入学者数	在籍者数	退学者数	休学者数	在籍延期者数	卒業者数
1年	145	145	2	0		
2年～	181	326	44	18	165	142
休退学等の理由：本人の健康問題、家族の介護、経済的困難、学習力の不足 <small>*在籍者数はH27.5.1現在、他欄は年度中の動向</small>						
学科目標資格：看護師国家資格取得状況						
受験者数	140人	合格者数	111人	合格率 (%)	79.3%	
既卒者	94人		25人		26.6%	
本年度の課題						
1. 教育方法の充実を図り学生の学習力の向上に取り組む。 2. 在籍延期者への学修支援の強化 3. 学生確保と実習先の確保 4. 国家試験対策の強化						
本年度の目標・方針						
1) 教育方法の充実では、レポート添削の評価基準の在り方の検討を行い、各領域における教育力の充実をはかる。 2) 学修支援強化—入学時学習ガイダンスの充実、学修困難学生への個別指導の強化。 入学予定者のプレカレッジの内容検討。 3) 関東地域における学生確保および安定的な実習施設の確保を図る。 4) 国家試験対策の強化—国家試験対策委員会の提案の確認と実施・既卒者への対策強化						
主な活動内容						
a. <u>目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）：</u>						
1) について						
<p>課程内FDの前年度からの継続として学習目標の到達に向けた評価基準の在り方について在宅援助論を題材にしてレポートの評価基準について妥当性の検討を行った。複数の添削指導員がレポート添削を担う上で評価基準の明確化は必須であることと、評価コメントとして学生への指導に反映されることの再確認ができた。今後各科目において、妥当性の検討を継続していくことが課題である。学生による授業評価については、各教員の自己評価と課題について課程内での確認もし、授業内容の改善が図られている。（自己点検評価委員記録、課程会議記録、FD会議記録）</p>						
2) について						
<p>入学時学習説明会の参加者は新潟や鳥取など遠方からの参加者もふえて、本学と東京会場を合わせて入学者の約80%となっている。内容の充実を図り、学修進捗と教科目全体像をよりイメージ化をしやすいよう改善している。特に学習進捗を自分で作成するということから、「教えられる」のではなく「学ぶ」という主体的な学修姿勢への動機付けとして</p>						

効果的であったと評価する。入学予定者への入学前授業は担当者の交代もあり内容の充実を図った。参加者は本学 77.7%、東京会場では 91%で、受講後のアンケートでは全体として意欲的に受け止められている。

学修支援については、教務委員会の企画で基礎実習に向かう前提条件の履修ができなかった在籍者を対象に「学習計画の見直しと学習のすすめかた」と題する学習会を実施した。挫折ではなく、各自の現時点をふまえ、目標達成に向かっての各自の学習計画の再作成と、レポート作成への具体的援助を行った。その後参加者のレポート提出が見られており一定の効果があったと評価する。在籍延期者への支援では国試合格率において3年目が最も高く、一定の前進があったともいえるが、今後も個々の学生のレポートの進捗状況をみながら適切な時期に学習会を企画することも検討課題となった。学修相談では毎週金曜日を相談日と設定したが、予約での相談は 28 名、予約外の相談が 20 名であった。CCN の Q&A の活用を含めて相談の場があることのさらなる周知が必要である。（課程会議記録、教務委員記録、入試広報委員会記録、学修相談記録）

3) について

広報活動では資料取り寄せは過去3年間で最も多くなっており、中でも関東地域は着実に増加し、今年度関東地域からの受験生は全体の30%となった。反面、関西地域では兵庫県内の受験生は35.4%となっているが、京都は滋賀を含めて11.2%と激減しており、次年度に向けての課題となった。実習施設については関東地域の学生数の増加に伴ってほぼ必要数を確保したが不足も予測され一層の対応が必要である。今後とも広報活動を強化し関東地域のみならず関西及び中国地域における学生数を増加させることと、それに見合う安定的な実習地確保が関東・関西共に課題である。（通信教育委員会記録、臨地実習検討委員会記録、課程会議記録）

4) について

国家試験対策委員会を中心として活動を強化した。前年度に引き続き入学式後の新入生および実習オリエンテーション時の在籍者へ国試対策の学修支援を関連業者の協力も得て実施するとともに、各領域の概論および実習スクーリングにおいて国試対策の学修支援を行った。今年度は既卒生に特化した国試対策学習会を実施した。動機づけになったが参加者が少なかったことで今後の検討課題となった。合格率は新卒者 79.3%、既卒者 26.6%で新卒者は昨年度を 3.8 ポイント上回ることができたが、既卒生は昨年より 17.5 ポイントも下がり、通信制課程校の平均並みとなった。年数を経た既卒生に課題が集中している。今後、在籍者の日常のレポート学習強化を軸としつつ国家試験への対応を意識した取り組みについて学生への浸透が課題である。（国家試験対策委員会記録、課程会議記録）

目標達成度の評価：1. できた ②. ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった

b. 課程運営における主な活動内容（根拠資料・記録）：

1) 教科運営、主にカリキュラムについて

①教科運営に関しては、課程内教授会議（月1回）において通信課程の総括的な運営について審議検討し、課程会議において的確な問題提起及び審議ができるようにしている。

月 1 回の定例課程会議においては、委員会活動や領域別の学生指導上の問題及び課題について審議し問題の共有、解決への方向性の確認をおこなっている。

カリキュラムについて、本年度通信制課程の入学要件の緩和に関連して教育内容の担保に関する厚労省の担当官との検討会議において、本学のカリキュラムが十分対応していることが確認できた。（課程内教授会議録、課程会議記録）

②前述したとおり、援助論レポートの評価基準の妥当性について検討し、領域の特徴をふまえて教員間の認識の向上を図った。（臨地実習委員会記録、FD 会議記録）

③「学生による授業評価」は各教員により、内容の分析による自己の振り返りと改善点が検討されている。課程会議において改善すべき点、今後の取り組みについて確認し教員の教育力向上に活用されている。

④卒業生からのアンケートによる卒後評価を教育改革に生かすための取り組みに関して、自己評価委員より報告を受け協議をし、今後も協議を継続していく事となった。又 25 年度の短期大学認証評価において指摘された点、教育効果における「学位授与の方針と学習成果を峻別しカリキュラム構造図を含めて学習成果をより体系的に設定すること」に関して、認証評価委員より提案がされ課程内で確認し、改めて教員全体で、教育理念からカリキュラム構造図と 3 つのポリシーおよび各科目の全体像が明確にされた。学習成果の概念図、カリキュラムマップはホームページにアップする。

⑤年度初めの看護専門科目における添削指導員との連絡会議において各担当教員との連携は図られているが、会議出席の指導員が依然として限られることが改善されておらず課題を残した。また非常勤講師については、新規採用時点および問題が発生した時の対応となっており、次年度の検討課題である。（添削指導員連絡会議録・通信教育委員会記録・課程内教授会議録）

⑥臨地実習科目の運営に関しては、「臨地実習委員会」が中心となり、臨地実習オリエンテーションの在り方を検討し充実化を図った。また施設の実習指導者会議には積極的に参加し、臨地実習指導者との交流をはかった。さらに学生の学習の進捗状況と関連して、臨地実習地の確保の方向性を出し、臨地実習及び実習スクーリングの配置を行った。（臨地実習委員会記録）

2) 学生支援

①前述のとおり、入学時の学習説明の充実により、通信制課程で具体的にどのように学習を進めるかがイメージできるようにした。入学前学習でのレポートの書き方のレクチャーもよりリアルになり一定の効果を果たしている。学修相談については前述のとおりである。国家試験に対しては、昨年の結果を踏まえ、国家試験対策委員の積極的な活動を中心に各領域において、学習の結果としての国家試験として学生指導を意識的に進めてきた。結果的には通信制課程の全国平均を上回ったが、さらなる学生支援が必要である。

3) FD への学科としての取り組み

課程内 FD 研修は、前述のとおりである。

c. 社会活動、研究活動、など：

社会活動では、他の専門学校への非常勤講師（4 人）、看護協会主催の研修講師（1 人）

である。又全国通信制看護学校協議会の副会長校として、通信制課程入学要件変更についての厚生労働省の情報収集に対して発言をして一定の役割を果たした。

研究活動では、科研費による研究の継続、海外の学会を含め医学・看護系学会で5人が発表をおこなった。

次年度の課題

- ・ 関東地域及び近畿圏、中国圏の学生確保及び実習地確保
- ・ 学修支援と国家試験対策の強化
- ・ 添削指導員、非常勤講師との連携の強化をはかる。
- ・ 全国通信制看護学校協議会会長校としての責務を果たす。

II. 学内組織別 年間活動報告書

1. 入試広報委員会 年間活動報告

委員長 瀬川 和子

<p>本年度の課題</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 全学科の共通の目標は、次の①～③である。 ①志願者の増員 ②定員の充足 ③基礎学力の担保と確固たる目的意識の入学生確保 2. N科通信制課程も含め、全学科の情報を発信して志願者増に向けての広報を強化する。 大学案内やHP等を充実・活用して、教育理念・教育内容、入試方法と出題範囲等を周知する。 3. 入試問題作成の段階から安全・公正性を重視しながら入試を実施する。 4. 平成29年度入試科目・出題範囲を検討し確定する。
<p>本年度の活動方針・目標</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 全学科の特徴・魅力の徹底した広報活動により、アドミッション・ポリシーに適合した志願者を増やすことで、定員を確保する。 2. N科通信制課程では関東方面で指導基盤を確立し、入試方法・受験機会を増やし、あらたな志願者層を開拓する。オープンキャンパスや高校での模擬授業で各学科を紹介する。 3. 平成28年度入試国・英科目・出題範囲について、各科の入試広報委員が中心となり、問題作成者と共に協議・検討し確定。受験生・高校等関係者へ周知する。
<p>主な活動内容</p> <p>a. <u>目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）</u>：（H.28 大学案内・入試要項・受験ガイド、入試広報委員会議事録）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・入試広報委員会：H.27 4月の第1回入試広報委員会で入試業務に関して委員全員で確認し、広報活動と入試運営に関して各委員が遂行した。 <ol style="list-style-type: none"> 1. 広報活動 <ul style="list-style-type: none"> ・平成28年度入学者選抜試験用の大学案内・入試要項・受験ガイドの作成 ・各科指定校の選定と高校訪問者の確定およびその実施 ・オープンキャンパスの内容と担当者の検討ならびに実施後の反省と次年度への課題のまとめ ・CCNに前年度導入した自己推薦入試の周知および、関東地区病院訪問の強化 2. 入試運営 <ul style="list-style-type: none"> ・後期からは予定の入試の実施、および合否判定部会委員として合格判定教授会の各科合格者原案作成。併行して平成28年度入学者選抜入試の結果を参考にしながら平成29年度入学者選抜試験の概要作成。 <p>目標達成度の評価：1. できた 2. ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった</p> <p>b. <u>委員会・組織の主要な活動内容（根拠資料・記録）</u>：（入試広報委員会議事録）</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 広報活動 (1)～(3)の数値は3月末までの実施分を記載 <ol style="list-style-type: none"> (1) 高校訪問：入試広報課員を中心に推薦入試および一般入試の出願依頼に県内・県外併せて約600校訪問に及んだ。各科教員もM科は大阪・奈良地区、O科は岡山を重点的に訪

問した。今年度も以前から力を入れている東播・西播地区は訪問を重ねた。また阪神地区も重点的に訪問したことにより本学とのネットワークも飛躍的に広がり、入学者増加につながっている。

(2) 本学主催進路説明会：本学6月29日（高校教員約30人出席）

(3) 高校での模擬授業・進学ガイダンス：全体で約150会場参加。講義は委員以外の教員にも依頼した。高校から直接依頼の「出張講義」「出前授業」等も増えている。

(4) キャンパス見学会：6, 7, 8, 9月の4回を計画した。今年度は天候にも恵まれ、参加者は全体でH27より大幅に増加した。9月以降も週末ごとに個別相談で対応した。

(5) 入試広報課を中心に学科教員も西日本の過去実績のある高校に出向き、地方での募集活動に努めた。

(6) E科の推薦志願者が予想より低迷したこともあり、一般入試以降に向け、西日本の広報を強化した。

(7) CCNの指導拠点を関東にも設置。課程教員も関東方面の実習先病院や看護協会訪問を繰り返し、説明と過去在籍者他、関係者へのDM・大学案内送付等々で周知を図った。

2. 入試運営

(1) 平成28年度入学者選抜試験での総志願者数は昨年度より減少した。

・M科では近畿圏に養成校が2校開設された影響は大きく、全体では志願者がかなり減少した。しかし、入学者について一般入試の理科では化学選択者が増えたことなどからも、理系のレベルの高い学生が確保できたと考えている。

・N科では本年度も兵庫県下に養成校が新設され益々激化する中で、昨年度並みの志願者となった。科目範囲等を見直したことや、今までの実績の周知により歩留まりは高く、結果的にはM科同様学力の高い学生を確保できたと考えられる。

・E科では今年度、自己推薦、一般2次の入試方法を変更したことと、コース制導入により取得資格が変わったことで、これまでとは異なる志願者層が集まった。また、一期生の順調な就職情報を含めた年度途中の広報強化により一般以降の出願者につながった。

・O科では関西圏に四年制大学が新設されたこともあり例年以上に関心が高まり、また指定校の基準見直しもあり、推薦の志願者が増加したが全体では昨年度より志願者総数は微減となった。

・N科通信制課程では複数回実施の自己推薦入試に志願者があり、また関東圏での地道な広報活動が功を奏し、昨年を上回る志願者総数となった。

(2) 平成28年度通学課程の入学者数は、M科96名、N科82名（他編入学なし）、E科86名、O科80名総数344名である。近年多くの大学が定員を確保できない状況の中で、本学は昨年度に引き続き通学課程の全学科で定員を充足した。看護学科通信制課程の入学者数は161名である。250名の定員を満たすことはできなかったものの、准看護師という対象者が減少する中、関東からの出願も増加し新入試方法での志願者も集まり、昨年より多くの入学者を確保できた。

3. 入試問題

入試科目：ホームページ等でも早期に各科の出題科目・出題範囲について公表し、周知を図った。問題作成者も交えて、各学科のアドミッション・ポリシーをはじめ、出題範

囲を再確認後、作成を実施した。なお、H. 29 年度入試に関しても、公表済みである。

次年度の課題

1. 全学科共通の目標は継続して次の①～③である。

①志願者の増員 ②定員の充足 ③基礎学力の担保と確固たる目的意識の入学生確保

・M科では、医療検査と細胞検査分野の教育内容と実績、および文系入学者へのケア態勢の広報を強化する。また、理系医療系志願者層の継続的な確保を目指す。

・N・E科は関西圏での同系統養成校との差別化を広報し、本学独自の教育理念・教育内容、本学独自の学生支援体制について周知を図る。

・O科は、四大や専門学校との差別化を明確にし、本学独自の教育理念、施設設備の充実度、求人数や求人元と就職先等実績情報の発信を強化したい。

・CCNは、関東地区も含めた志願者開拓と自己推薦入試回数増についての周知を強化する。

2. 平成 29 年度入試について日程・科目・出題範囲の変更点を周知する。

3. 受験生対象の受験ガイダンス、模擬授業等々依頼も増加傾向にある。入試日程の見直しにより、入試実施においては安全・公正性を念頭におきつつ体制を整備する。

4. 地方会場の設定やセンター試験利用入試など他府県から学生確保の体制はとっているが、全国的に志願者が増えているとは言えない。DM, 受験情報誌だけでなく、県外の高校と受験生に直接広報する機会の設定およびホームページの充実を他組織と連携しながら強化したい。

2. 教務委員会 年間活動報告

委員長 大森 雅人

本年度の課題
1. 文部科学省、中央教育審議会の答申による「大学の教育の質向上」を受けて、学生の主体性を引き出す授業方法の導入等、実施における課題を検討する。特に、昨年度導入したmanaba(授業支援システム)の実施・運営に関する事項について検討する。 2. G P A制度の実施に関する課題について検討する。 3. 教育イノベーション機構の答申から各学科の教養科目の運用上の課題を検討する。 4. 2号館の改築・3号館の改修に伴う教室運用に関する事項について検討する。 5. こども教育学科完成年度に伴うカリキュラムの検討を行う。 6. 医療検査学科 指定規則改正に伴うカリキュラム改正を検討する。
本年度の活動方針・目標
<活動方針> 教育課程の編成および運営を円滑に進めると同時に、学生の学ぶ権利を擁護し、教務の運営に当たる。 <活動目標> 1. manaba(授業支援システム)の実施・運営に関する事項について検討する。 2. G P Aの1年目の結果から、今後の課題について検討する。 3. 教育イノベーション機構の答申に伴う各学科の教養科目の運営上の課題について検討する。 4. 2号館の改築・3号館の改修に伴う教室運用に関する事項について検討する。 5. 各学科のカリキュラムについて検討を実施する。
主な活動内容
a. 目標達成に向けた活動内容(根拠資料・記録)：教務委員会議事録、KTU・夏の研修会レジュメ 1. manaba(授業支援システム)の実施・運営に関する事項について検討する。 1) 6月時点でのmanabaの統計情報を用いて検討を行った。その結果を受けて、manabaの活用頻度が高い教員からの事例検討会等を通じて、効果的なmanabaの使用を提案する方針であることを確認した。 2) KTU・夏の研修会を共催して、効果的なmanabaの実践事例等に関する提案を行った。 3) 学外で実施されたmanaba研修会の報告により、利用活性化のための情報共有を行った。 2. G P Aの1年目の結果から、今後の課題について検討する。 1) 学生と家庭においてG P Aを積極的に活用してもらおう意図で、G P Aの平均値を提供する方針を決定し実施した。 2) GPA制度は実施2年目であり、具体的な評価をどのようにしていくかは今後の課題とすることを確認した。 3. 教育イノベーション機構の答申に伴う各学科の教養科目の運営上の課題について検討する。 1) 教育イノベーション機構によって新たに作成された基盤教育の改善方針を具体化するた

<p>めに、教務委員が学科とのパイプ役になるという方針を確認し、実際に活動を実施した。</p> <p>2) 検討中の基盤教育の中で、特に「人間教養科目群」に設定する科目について、各学科の教務委員 1 名が代表となりイノベーション機構の教員と共同で実施されたワーキングに参加した。その結果、年度末までに一定の成果が得られたが、そのまま翌年度に継続課題として引き継がれた。</p> <p>4. 2 号館の改築・3 号館の改修に伴う教室運用に関する事項について検討する。</p> <p>1) 新 2 館 1 階の中講義室の導入される機器や机いすなどの什器類の検討、及び教室レイアウトについての検討を実施した。</p> <p>2) 新 2 号館の完成予定と、完成後の教室移動に関するスケジュールの確認とその際の課題について検討した。</p> <p>5. 各学科のカリキュラムについて検討を実施する。</p> <p>1) M 科に関して、臨床検査技師の業務内容変更に伴うカリキュラム変更を実施した。</p> <p>2) N 科に関して、実習科目の見直しや、看護研究から看護学研究など、指定規則上に準拠して「学」が付くように名称変更を行うなどの見直しを実施した。</p> <p>3) E 科に関して、完成年度を迎え 1 年以上かけて改善点を検討し、大幅な変更を行うこととした。開講時期の変更、実習の枠組みの組換え、卒必・選択必修のかけ方の精査などを行った。コース制を導入して、3 免取得から 2 免取得への切り替えを実施した。</p> <p>4) O 科に関して、教科書に基づいた科目名に変更を行うこととなった。他に、開講時期を考慮して各学年に分散させる等の見直しを実施した。</p> <p>5) 上記のカリキュラム改正に伴う、科目読み替えに関する検討を実施した。</p> <p>目標達成度の評価：①. できた 2. ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった</p> <p>b. 委員会・組織の主要な活動内容（根拠資料・記録）：教務委員会議事録</p> <p>1. 年間 15 回の委員会を開催し、以下の内容について検討し、必要に応じて「運営委員会」「教授会」への審議事項・報告事項とした。</p> <p>1) 各学科のカリキュラムに関する事項の検討 2) 年間行事予定の確定に向けての検討</p> <p>3) 時間割（試験時間割・追再試時間割含む）の確定に向けての調整</p> <p>4) 卒業および除籍に関する事項 5) 既修得単位の認定についての検討</p> <p>6) 科目等履修生に関する事項の検討 7) 歯科衛生士リカレント教育（キャリアアッププログラム）に関する事項</p> <p>2. KTU・夏の研修会の共催</p> <p>1) 「manaba を使おう～アクティブラーニングと教育研究」</p>
<p>次年度の課題</p> <p>1. すべての学生の多様な学びと成長を実現するときわ教育の確立を目指して、全学的な検討がなされている「教学マネジメント改革」に関して、各学科における運営上の課題等について検討する。</p> <p>2. manaba(授業支援システム)の実施・運営に関する事項について継続して検討する。</p> <p>3. 6 月に完成予定の 2 号館と、本年度に実施予定の 3 号館の改修に伴う教室運用に関する事項について検討する。</p> <p>4. GPA 制度の実施に関する事項について継続して検討する。</p>

3. 学生委員会 年間活動報告

委員長 岩越 美恵

本年度の課題
<ul style="list-style-type: none">・次年度の学外オリエンテーションの場所とあり方・喫煙者の保健指導の実施に向けての準備・H26年度実施「学生満足度調査」のまとめと課題の整理・大学コンソーシアム兵庫神戸交流部会へのより積極的参画
本年度の活動方針・目標
<ul style="list-style-type: none">・次年度の学外オリエンテーションの場所を調査し、前年度予算規模で、目的に値する内容を検討する。・喫煙者に対する保健指導の仕方、指導担当者、指導場所などを具体的に決める。・主として学生満足度調査小委員会を中心に、結果を分析し、まとめ、課題を明らかにする。・定期交流部会に出席し、事業への学生参加をうながす。
主な活動内容
<p>a. <u>目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）：</u></p> <ul style="list-style-type: none">・約 400 名が全員、研修と宿泊が可能な施設を近隣の地域で探した結果、①南あわじ国立青少年交流の家、②県立淡路国際会議場を併設するウエスティンホテル、③大学内の 3 案の中から、第 2 回学生委員会で協議し、②案に決定。予算とホテルの部屋数から、第 3 回委員会で、宿泊は学生と学生委員・担任のみとする案とし、6 月の運営委員会で承認を得た。4 月 6 日の 1 日目に、濃縮して全教員と学生が親睦を図れるような内容に第 10 回委員会までに練り上げた。3 月 16 日に現地視察。・小委員会禁煙すすめ隊で、健康診断問診票から今年度学生喫煙率を調査した結果 1.87% で喫煙者 25 人の内 6 名が保健指導を希望していることがわかった。指導法を検討し、3 月の小委員会で、次年度から 10 月採用された養護教諭（キャリア支援課）により、保健室で次年度から指導を開始することとした。・H26 年度学生満足度調査報告書を発行。その中に課題も明らかにした。・大学コンソーシアムひょうご神戸の中の事業①学生プロジェクト事業「キッズフェスティバル 2015」に学園祭にてサテライト参加、②学生ボランティア事業「東日本大震災復興支援・夏休み登録ボランティア」に本学より 3 名の学生が登録し、リーダーとしての養成を受けた。 <p>目標達成度の評価：①できた 2. ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった</p> <p>b. <u>委員会・組織の主要な活動内容（根拠資料・記録）：</u></p> <ol style="list-style-type: none">1. 定例委員会開催（第 1～10 回）2. 学生自治会活動の支援（学園祭 11/22-23、新入生歓迎会 5/16、クラブ活動、運営、リーダーズ研修、謝恩会）3. 新入生オリエンテーション（学内、学外 4/4-5：グリーンピア三木）4. 日本学生支援機構奨学金の推薦と適格認定5. 奨学金選考（中内財団、公益信託片山和夫社会福祉奨学基金、学内修学支援金）

- 6. 第 57 回全神戸短期大学総合体育大会 (7/5) 主催
- 7. 第 50 回全国私立短期大学体育大会卓球部 1 名参加承認(8/3-6)
- 8. 禁煙すすめ隊の健康フェアへのブース出展
- 9. 学内環境の改善：エクササイズルーム、フィットネスルーム使用のみえる化
- 10. 各小委員会活動（マナー、SNS, 学生満足度調査、奨学金、禁煙すすめ隊、大学コンソーシアム兵庫神戸）
- 11. 苦情対応

次年度の課題

- ・学外オリエンテーションのふりかえりを次年度計画に反映
- ・喫煙指導の実施と健康保健センターと共同で季刊保健だよりの発行
- ・自治会との共同環境衛生活動の方向に向けて、自治会へのアプローチ（敷地内環境改善のため、自治会に保健衛生部の設置を啓発）
- ・H26 年度学生満足度調査から見えた大きな三つの課題解決
 - ① 課外活動や放課後自主学習する学生のための軽食の敷地内販売
 - ② 学生ロッカー室の利用環境改善
 - ③ 食堂メニュー改善にむけてのアンケート調査の自治会への働きかけ

活動内容の補足

* 学生生活の安全を守り、地域社会とのトラブルの解消の活動の内、通学路における学生のマナーと安全について、2014 年度までは、学生委員会の教員とキャリア支援課職員とで 4/12～5/16 の 1 か月間通学路見回りを行ったが、3014 年度内に、不審者の侵入と合わせて日中の警備員配置の起案を行った結果、2014 年度内に敷地内防犯カメラの増設がなされ、2015 年度からは、通学路見回りをキャリア支援課職員が、要所である三叉路の交通整理を管理人の方が交代で担当されるようになった。

4. 自己点検・評価委員会 年間活動報告

委員長 井本 しおん

本年度の課題
<ul style="list-style-type: none">年次報告書による評価活動だけでなく、大学全体の目標に対する自己点検・評価を数年に1度実施する体制を構築すること
本年度の活動方針・目標
年間活動方針：「年次報告書による評価活動だけでなく、大学全体の目標に対する自己点検・評価を数年に1度実施する体制の構築」 目標： 1) 教育改革の進行状況を、年次報告書に記録していく 2) 年次報告書の情報公開をさらに進める 3) 卒業生・就職先アンケート結果の活用を促進する
主な活動内容
a. <u>目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）</u> ： 1) 教育改革の進行状況を、年次報告書に記録していく 年間活動方針における「大学全体の目標」として、教育イノベーション機構（以下イノベと略）が担っている教育改革を採り上げた。自己点検・評価委員会としては、イノベ機構長と協力し、イノベの活動状況を年次報告書にわかりやすく掲載することに取り組んだ。詳しくは第2部参照。 2) 年次報告書の情報公開をさらに進める 学科会議での協議で全学科の了承が得られたため、昨年度まで学内サイトでのみ掲載していた教員個人の活動報告を、平成27年度年次報告書から大学HPで公開することになった。2015年9月28日教授会で報告済み。 3) 卒業生・就職先アンケート結果の活用を促進する 本年度は卒業生だけでなく就職先へのアンケートも実施した。他学科と比較検討しやすくするため、アンケート結果まとめの様式統一を図った。詳細は第2部参照。 目標達成度の評価：1.できた 2.ほぼできた 3.あまりできなかった 4.できなかった
b. <u>委員会・組織の主要な活動内容（根拠資料・記録）</u> ： <ul style="list-style-type: none">学生による授業評価：学期毎に各教員の授業評価報告書に記載された改善策を全学科で共有できるものとしてまとめ、授業評価結果を授業改善へとフィードバックできるよう取り組んだ。年次報告書の編集と大学HPへの掲載、PDCAサイクルを進めるため「H27年度年次報告書に基づく評価報告」の作成・配布を行った。
次年度の課題
組織の枠を超えて有効な点検・評価を遂行するため、本委員会の組織改革が必要である。

5. FD 委員会 年間活動報告

委員長 畑 吉節未

本年度の課題																				
各学科の教育構造が明らかになってきた。そして、アクティブラーニング手法を中心とする教育手法が当大学の中でも取り上げられるようになった。今後も教育手法については文科省のアクティブラーニングの推奨の関係からも拍車がかかる事が予測される。このような教育環境の中で、教育理念のもとに各学科の教育目的・目標が明らかになった今、次に着手すべきは教育評価の理解と研修であろう。教育評価を学ぶことは教育目標・内容を点検することに繋がる。つまり、教育方法論が取りざたされる中、FD活動は教育の原点回帰の位置づけで活動したい。さらに教育評価を学ぶに当たって、教育力とは何かを問いかける機会を持ちたい。																				
本年度の活動方針・目標																				
<ol style="list-style-type: none"> 1. 学生の学びと成長を育む『教育力』とは何か を考えるための研修会を持つ。 2. 教育評価のあり方と手法を学び、教育の目標に沿った効果的な評価を教員が理解できるように、また評価から目標が再考できるように「教育評価」について講師を招致し、研修会を行う。 3. 学科内FD活動を促進する。 4. 新人教職員の教育を効果的に行う。 5. 公開授業を促進する。 6. FD活動の長期ビジョンを明確にする。 																				
主な活動内容																				
<p>a. <u>目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）</u>：</p> <p>〈目標1・2・4〉について以下の表1のとおり活動を実施した結果、大学開設以降（8年間）の中で参加率が一番高い年度となった。さらにアンケート結果を今年度から学内ホームページのFD活動欄に継続的に掲示し、参加者の意見を公開する工夫を行った。各研修会のアンケートから参加者の理解度・満足感・教育への活動可能性が高く評価され、意味のあるコメントが多く寄せられ目標は達成できた。</p> <p style="text-align: center;">表1. FD研修会の実施状況一覧</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>開催日</th> <th>テーマ</th> <th>講師</th> <th>概要</th> <th>参加者</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>4月3日</td> <td>新教職員の研修会</td> <td>学長・法人本部長 関係課課長 FD委員長</td> <td>①FD委員会より大学の特徴を映像と音楽で紹介 ②学長による教育の本質について講義 ③各講師から資料を用い効果的な説明</td> <td>参加者17名, 参加率100%</td> </tr> <tr> <td>7月27日</td> <td>学生の学び成長を育む「教育力」とは何か</td> <td>京都大学高等教育研究開発促進センター准教授 山田 剛史</td> <td>基調講演の後、グループワークを経て以下についてパネルで発表した。①学生に身につけて欲しい力②その力を育成するための教育③私たちのグループが考える「教育力」とは</td> <td>参加者111名, 参加率78.7% ・教員84名 (84%) (大学84.2%、短大83.2%) ・職員27名 (67.5%)</td> </tr> <tr> <td>12月21日</td> <td>基礎から学ぶ教育評価</td> <td>奈良学園大学 学長 梶田叡一</td> <td>以下の内容について講演内容であった。 ①日本における教育評価の変遷 ②現在における教育評価のとらえ方 ③教育評価の意義と種類 ④教育評価の方法 ⑤教育評価の課題</td> <td>参加者85人, 参加率60.7% ・教員73人 (73.0%) (大学73.4%、短57.7%) ・職員12人 (30.0%)</td> </tr> </tbody> </table>	開催日	テーマ	講師	概要	参加者	4月3日	新教職員の研修会	学長・法人本部長 関係課課長 FD委員長	①FD委員会より大学の特徴を映像と音楽で紹介 ②学長による教育の本質について講義 ③各講師から資料を用い効果的な説明	参加者17名, 参加率100%	7月27日	学生の学び成長を育む「教育力」とは何か	京都大学高等教育研究開発促進センター准教授 山田 剛史	基調講演の後、グループワークを経て以下についてパネルで発表した。①学生に身につけて欲しい力②その力を育成するための教育③私たちのグループが考える「教育力」とは	参加者111名, 参加率78.7% ・教員84名 (84%) (大学84.2%、短大83.2%) ・職員27名 (67.5%)	12月21日	基礎から学ぶ教育評価	奈良学園大学 学長 梶田叡一	以下の内容について講演内容であった。 ①日本における教育評価の変遷 ②現在における教育評価のとらえ方 ③教育評価の意義と種類 ④教育評価の方法 ⑤教育評価の課題	参加者85人, 参加率60.7% ・教員73人 (73.0%) (大学73.4%、短57.7%) ・職員12人 (30.0%)
開催日	テーマ	講師	概要	参加者																
4月3日	新教職員の研修会	学長・法人本部長 関係課課長 FD委員長	①FD委員会より大学の特徴を映像と音楽で紹介 ②学長による教育の本質について講義 ③各講師から資料を用い効果的な説明	参加者17名, 参加率100%																
7月27日	学生の学び成長を育む「教育力」とは何か	京都大学高等教育研究開発促進センター准教授 山田 剛史	基調講演の後、グループワークを経て以下についてパネルで発表した。①学生に身につけて欲しい力②その力を育成するための教育③私たちのグループが考える「教育力」とは	参加者111名, 参加率78.7% ・教員84名 (84%) (大学84.2%、短大83.2%) ・職員27名 (67.5%)																
12月21日	基礎から学ぶ教育評価	奈良学園大学 学長 梶田叡一	以下の内容について講演内容であった。 ①日本における教育評価の変遷 ②現在における教育評価のとらえ方 ③教育評価の意義と種類 ④教育評価の方法 ⑤教育評価の課題	参加者85人, 参加率60.7% ・教員73人 (73.0%) (大学73.4%、短57.7%) ・職員12人 (30.0%)																
〈目標3〉学科内FDを促進する																				
この目標は5年前から始まっているが、学科によっては活動が進んでいなかった。今年度は年度当初に委員会で目標・活動内容の共有し、中間評価も設定した。その結果。各学科の特色や状況を生かした																				

活動とともに目標の達成度が明らかになった（表 4. 学科内 FD の取り組みの概要を参照）。

〈目標 5〉 公開授業を促進する。

新人教職員オリエンテーションや各学科での呼びかけの結果、昨年度に比べ 1.7 倍の報告書があった。

表 2. 公開授業の所属別件数

所属	M 科	N 科	E 科	O 科	CCN 科	計
件数	2	10	6	22	3	43
(昨年)	(5)	(16)	(4)	(0)	(0)	(26)

〈目標 6 FD の長期ビジョンを明確にする〉

4 月学長室会議に出席に本年度の目標とともに、当 FD 委員会が大学の教職員の能力開発に向け 5 年計画で「大学教育の動向を知り大学教育を再考する」「教育評価を学び教育内容を吟味する」「効果的な教育技法を学ぶ」を活動の方針にすることを報告した。

標達成度の評価：1. できた 2. ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった

b. 委員会・組織の主要な活動内容（根拠資料・記録）

・以下の表3のとおり、会議は毎月1回定例化し計画的に11回の会議を持ち活動を遂行した。

表3. 委員会開催概要

回	月日	委員会の議題
1	4 月 13 日	1) 今年度の活動方針 ①過去 7 年間の活動経過の共通理解(資料あり) ②当大学の FD 委員会がとらえる FD とは、FD 活動とは何かの確認 ③今年度の方針と目標についての審議 2) 今年度の目標ごとの運営方法案
2	5 月 18 日	1) 今年度の研修会日程と講師の決定と委員の役割分担について(委員長案) 審議 2) 学科内 FD のテーマの報告 3) 関西地区 FD 連絡協議会幹事会参加の報告
3	6 月 15 日	1) 第 1 回研修会(7 月)の準備について審議 2) 各学科内 FD 活動案の報告(第 1 回) 2) 関西 FD 連絡協議会第 8 回総会の報告
4	7 月 13 日	1) 第 1 回研修会の企画、運営方法の最終確認 2) 学科内 FD 活動計画の報告第 2 回)
5	9 月 14 日	1) 第 1 回 FD 研修会のまとめ資料とその活用方法について審議運営 2) 各学科 FD 活動中間評価の報告
6	10 月 19 日	1) 第 1 回研修会のアンケート集計結果と分析(資料あり) 結果の広報方法 2) 第 2 回研修会の企画と運営方法
7	11 月 9 日	1) 第 2 回研修会運営に関する役割の確認
8	12 月 14 日	1) 第 2 回研修会の準備状況の確認 2) 公開授業件数の現状把握
9	1 月 18 日	1) 第 2 回研修会アンケートの整理途中の報告 2) 次年度研修会テーマの方向性
10	2 月 8 日	1) 第 2 回研修会アンケート結果の報告 2) 学科内 FD の活動と評価報告 3) 次年度の研修会のテーマと講師の検討
11	3 月 28 日	1) 今年度の活動報告のまとめ(委員長案 資料あり) 2) 次年度活動方針と事業案・予算(委員長案 資料あり)

次年度の課題(目標)

- 1) 大学の教育が大きく問われ、質的転換が求められている。当大学では2年前に教育イノベーション機構が発足し、次年度においては具体的なカリキュラム改正を実施する予定になっている。教職員の能力開発を目標とする当委員会では、「大学教育を再考する環境」の観点から、前期において文科省の高等教育局の改革官を招致し、「高大接続改革の動向から教育改革を考える」研修（県下高校、大学に公開）を持ち当大学での教育改革を教職員全員が考え、共有する場としたい。
- 2) 大学教育を深化させるために、学生を主体的にかつ深く学習させる教育技法を学ぶ機会を持つ。
- 3) 学科内FD活動や授業公開を促進する。

表 4. 学科内 FD 活動の取り組み概要

	目標	活動の概要	成果
M	評価の高い授業を聴講し、その要因について意見交換を行い、各教員の授業方法の改善、及び科目間の連携を深める。	授業に参加し聴講した教員間で意見交換を行った。その結果、以下4点が参考になった。①図（絵）の板書②具体例を提示③症状が現れる機序を序列に沿って説明④対比・共通項と例外の説明	今回の活動を通し、学習の目的、目標、まとめなどを客観的に考え直しながら評価することができ、各自の授業を振り返る良い機会になった。今後、教員の授業方法の改善、及び科目間連携を深めることを目標にしたい。
N	1) 教育力を高める 2) 教育評価について学ぶ	1) 新任教員を中心に公開授業に積極的に参加を促す 2) 3月に「教育力を高める視点での実習指導とその評価」の研修会を実施した。	1) 10件の授業報告書では高い評価であった 2) 実習指導に着目し、学部長の講演と、グループワークを通し実習指導の際の教育評価の視点を共有する機会となった。
E	社会が求める人材育成にむけた教育環境の構築 1) 新カリキュラムの構築と学生が身につけるべき力の明確化 2) 学生が自らの学びを深化させていく教育システムの構築	1) 完成年度にあたり、教育活動を振り返りカリキュラムの改善点等の意見交換。 2) 大学における学びのあり方に変革が求められる中、専門職業人養成を主たる目的とする本学科においてどのような学びのあり方がふさわしいのかについて議論を行った。	4年間で生じた大学を取りまく社会環境の変化も鑑み、来年度からの新カリキュラムを構築した。 また、生涯にわたる職能成長を支えるカリキュラムとなるよう、学生が大学生活において身につけるべき力について議論を行った。 以上より、目標はおおむね達成された
O	1) 教員の教育活動に要する業務量等を調査し、今後の検討材料とする	歯科衛生士三大業務科目（予防処置・診療補助・保健指導）に要する時間調査を実施した	業務量の調査を経て、学科教員の研究mindの育成を図り、研究成果（業績）を生むための学習会やテーマの方向性が決定し試行中である。
C C N	援助論科目を題材に評価基準について、課題や他領域と共通理解が必要な事項を討議し、学習目的の到達に向けた評価基	今年度は2回（8月・1月）の活動を通し、在宅援助論を題材にその特性をふまえた採点基準の在り方について検討し、教員間での意見交換を行った	各教員が感じる課題に応じて再考する機会となった。評価基準を見直すとともに、学生の特性（社会人であること、学習形態がCCNシステムを利用するか、郵送でレポートを提出する）も考慮してコメントをすることの必要性を確認できた。

	準の在り方を考える		
I	「教学マネジメント改革の推進」と位置づけた。	<p>1) 全学 DP 原案作成：ワーキンググループを設置し、全学 DP 原案作成に着手しのブラッシュアップに努めた。</p> <p>2) 全学 CP 原案作成：ワーキンググループを設置し、全学 CP 原案作成に着手した。その後、学長の特命チームとして学長室のもとに再組織された。</p>	<p>1) ワーキンググループで修正した全学 DP 原案は、10月機構案として決定された。</p> <p>2) 1月に教学マネジメント改革案を作成した。学長室会議にて同案を報告し、学科長、教務委員長、教務委員から確認を得、議論を行った。</p>

6. 図書・紀要委員会 年間活動報告

委員長 尾上 新太郎

本年度の課題
<ul style="list-style-type: none">・ビブリオ KoToLa の継続収集も含め図書館資料収集方法について検討する。・委員会規程の見直しをする。・紀要、緑葉の発行についてさらに検討を重ねる。・Nii の学術雑誌公開支援事業の終了をうけ機関リポジトリの構築について検討する。
本年度の活動方針・目標
<ol style="list-style-type: none">① 利用者の求める資料の提供② 紀要、緑葉の位置づけの明確化③ 機関リポジトリの構築へむけて
主な活動内容
<p>a. <u>目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）</u>：</p> <ol style="list-style-type: none">①<ul style="list-style-type: none">・ビブリオ KoToLa の継続購入を決定し、それに向け全学的に推薦図書の依頼を2期に分け行った。（推薦者1期8名20冊・2期3名4冊）あまり集まらず、次年度以降、学生選書の取り組みについて提案がされた。・購読雑誌タイトルの検討を行い、学科意見の集約をもとにタイトル見直しを実施した。（継続中止雑誌7誌・新規購読雑誌9誌）・教員対象に図書館購入推薦図書の募集を継続、学科内での周知に努めた。②<ul style="list-style-type: none">・委員会規程、紀要投稿規程、紀要執筆要領、緑葉投稿規程と執筆要領の見直しを実施した。（6月運営委員会承認）・緑葉は、学内配布の査読なし研究誌であることを確認し投稿内容の例示をした募集を行った。非常勤教員に対しても投稿呼びかけを行った。（11月発行・投稿数4編）・紀要編集手順についての申合せを作成した。・紀要投稿の呼びかけを非常勤教員にも行った。（投稿数15編）・紀要編集委員会4回。（うち1回はメール審議）・査読依頼方法について検討した。・査読を受けて編集会議を開催した。・「紀要第9号」発行。（3月）③<ul style="list-style-type: none">・機関リポジトリについて、研究調査アンケート結果をもとに検討した。 <p>目標達成度の評価：1. できた ②ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった</p> <p>b. <u>委員会・組織の主要な活動内容（根拠資料・記録）</u></p> <p>紀要・緑葉編集委員会を含め9回の委員会を開催した。検討内容については次の通り。 第1回（平成27年4月14日）</p>

- ・今年度活動方針について
- ・平成 27 年度図書館利用状況報告・平成 27 年度図書館事業計画
- ・読書マラソン表彰について・ジャパンナレッジ利用講習会について
- ・来年度購入雑誌について各学科に持ち帰り意見集約

第 2 回（平成 27 年 5 月 19 日）

- ・紀要・緑葉の投稿呼びかけについて・執筆要領の見直し

第 3 回（平成 27 年 6 月 9 日）

- ・紀要投稿規程、紀要執筆要領、緑葉 投稿規程と執筆要領の変更について
- ・緑葉の位置づけについて、投稿の呼びかけについて
- ・ビブリオ KoToLa の購入図書推薦依頼について・学術フォーラム抄録作成について
- ・図書館利用講習会（Sciencedirect と Mendeley）実施について

第 4 回（平成 27 年 7 月 14 日）

- ・機関リポジトリの構築について・次年度購読雑誌について
- ・紀要投稿募集について・ジャパンナレッジトライアル結果報告

第 5 回（平成 27 年 8 月 4 日）

- ・緑葉 10 号発行について・大学活性化事業における電子書籍の購入について
- ・前期図書館利用状況報告

第 6 回（平成 27 年 10 月 6 日）

- ・紀要第 9 号編集委員会（査読依頼）

第 7 回（平成 27 年 11 月 10 日）

- ・紀要第 9 号編集委員会（第 1 回査読結果）
- ・来年度購読雑誌決定
- ・機関リポジトリの構築について、運営委員会にて審議を提案（未提案）
- ・図書館利用講習会（英語医中誌 Web と ProQuest）実施について

第 8 回（平成 27 年 11 月 30 日）

- ・紀要第 9 号編集委員会（第 2 回査読結果）

第 9 回（平成 28 年 1 月 12 日）

- ・紀要第 9 号編集委員会（最終投稿確認）
- ・来年度開館日程について・来年度学生便覧確認・来年度購入希望図書の学科周知

次年度の課題

- ・ビブリオ KoToLa の継続収集も含め図書館資料収集について、学生選書も視野に入れて検討する。
- ・紀要、緑葉の投稿規程、査読方法について検討を重ねる。
- ・機関リポジトリの構築、運用実施について検討する。

7. 広報紙編集委員会 年間活動報告

委員長 藤本 由佳利

本年度の課題
神戸常盤大学・神戸常盤短期大学 広報紙 WE 51号 平成27年 6月中旬発行 神戸常盤大学・神戸常盤短期大学 広報紙 WE 52号 平成27年 12月中旬発行
本年度の活動方針・目標
神戸常盤大学・神戸常盤短期大学 広報紙 WE 51号 平成27年 6月中旬発行 神戸常盤大学・神戸常盤短期大学 広報紙 WE 52号 平成27年 12月中旬発行
主な活動内容
<p>a. 目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・神戸常盤大学・神戸常盤短期大学 広報紙 WE 51号 平成27年 6月中旬発行に向けた委員会の開催＜内容の企画・構成 掲載写真の厳選、情報収集、原稿依頼と校正＞（広報紙51号・議事録） ・神戸常盤大学・神戸常盤短期大学 広報紙 WE 52号 平成27年 12月中旬発行に向けた委員会の開催＜内容の企画・構成 掲載写真の厳選、情報収集、原稿依頼と校正＞（広報紙52号・議事録） <p>神戸常盤大学・神戸常盤短期大学 広報紙 WE 52号 平成27年 12月中旬発行</p> <ul style="list-style-type: none"> ・神戸常盤大学・神戸常盤短期大学 広報紙 WE 52号 平成27年 12月中旬発行に向けた委員会の開催＜全体内容の構成 掲載写真の厳選、情報収集、原稿依頼と校正＞（広報紙52号・議事録） <ul style="list-style-type: none"> ・広報紙編集委員会の開催（議事録） <p>目標達成度の評価：1. できた 2. ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった</p> <p>b. 委員会・組織の主要な活動内容（根拠資料・記録）：</p> <p>広報紙51号 平成27年7月発行（広報紙51号・議事録）</p> <p>1面：建学の精神 「谷川俊太郎&谷川賢作 詩と音楽のひととき」のご報告 教育学部長 後藤晶子</p> <p>2面：学長室より「学ぶところが開く世界」 学長 上田國寛</p> <p>3面：「新入生を迎えて」 保健科学部長 鎌田美智子、教育学部長 後藤晶子、医療検査学科長 坂本秀生、看護学科長 長尾厚子、短期大学部 口腔保健学科長 野村慶雄</p> <p>4面 短期大学部 看護学科通信制課程長 高宮洋子</p> <p>1年生クラス担任の紹介 「挑戦あるのみ（ホンジュラスへ助産師としての派遣活動報告）」 看護学科 卒業生 坂志保子</p> <p>5面：新任の紹介・16名</p>

6面：1年を振り返って 各学科2回生
7面：「3年次の臨地実習を終えて」M科4年 宮原智里 「キャンパス内に無線LAN導入」「学修支援システム manabaを導入」 歯科衛生士 リカレント教育「キャリアアッププログラム」報告 上原弘美
8面：研究ノート M科 溝越祐志 国際交流ネパール研修 「ネパール派遣2014」柳田潤一郎 「ネパール交換研修を経験して」N3 中野内亮太
9面：「海外研修を終えて - ネパールの子どもたちへ -」牛頭哲弘 学生自治会員の紹介 学生自治会長 岡本啓克
10面：ときわ幼稚園通信 ときわ幼稚園教諭 竹俣真理 同窓会便り M科 21期生 時本和樹 神戸常盤大学 歯科診療所のご案内 平成27年度 オープンキャンパスのお知らせ
11面：国際交流機構 草の根協力事業を終えて プロダクトマネージャー・特任教授 小野和男、サブプロダクトマネージャー 野村秀明、柳田潤一郎、上野理恵
12面：ネパール大震災 - 我々にできること 国際交流センター 野村秀明 「ネパール大震災・学生の支援活動」N科 倉本優芽 「未来に向けての防災宣言」「神戸市内の大学初 福祉避難所に指定」 広報紙52号 平成27年12月発行 (広報紙52号・議事録)
1面～2面：建学の精神 小豆島プロジェクト～新たなステージへの挑戦～ 地域交流センター長 中村忠司
3面：実習体験記 「養護実習を終えて」N4 森本愛 「基礎看護学実習を終えて」 N2 大歳菜津美 「施設実習を終えて」E3 立井あずさ 「臨地実習を終えて」03 松本菜月 「臨地実習で学んだこと」NNC2 穴田祐子
4面：「キラリな学生たち」学生消防団員の活動 N3 清水凜風、竹澤舞 新任の紹介 キャリア支援課 武田奈々子 「全国大学保健管理協会地方部会研究集会開催」
5面：大学コンソーシアム「フィリピン研修を終えて」M3 喜住晴香 N3 岡崎文芽 「シカゴ研修を終えて」03 平岡 映真
6面：「TOKIWA 健康フェア2015を終えて」地域交流センター長 中村忠司 第4回 神戸常盤学術フォーラム 開催
7面：ときわ幼稚園通信 同窓会便り「同窓会に参加して」M25期生 小野寺利枝 クラブ活動結果報告
8面：第49回常盤祭 「Dream Journey ときどきユーモア」常盤祭実行委員長 福澤美里 リレーエッセイ「かなうかな？夢」糟谷泰子
次年度の課題
神戸常盤大学・神戸常盤短期大学 広報紙 WE 53号 平成28年 6月中旬発行 神戸常盤大学・神戸常盤短期大学 広報紙 WE 54号 平成28年 12月中旬発行

8. 研究倫理委員会 年間活動報告

委員長 澤田 浩秀

本年度の課題
1. 「研究活動における不正行為への対応等に関するガイドライン」の公表により、教職員に対する研究倫理教育を施行する。 2. 「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」が文部科学省および厚生労働省から公表され、これによる研究倫理委員会規程、研究倫理申請書等の見直しを行う。
本年度の活動方針・目標
1. 研究活動における不正行為の防止及び対応に関する規程を作成する。 2. 教職員および学生に対する、研究倫理教育を実施する。
主な活動内容
a. 目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）： 1. 平成 27 年度に、KTU 大学教育研究開発センターにおいて研究費の管理・監査規程が見直しされたことと並行し、「神戸常盤大学・神戸常盤大学短期大学部研究活動上の不正行為の防止及び対応に関する規程」を作成し、平成 27 年 4 月 1 日より施行することとした。これに付随し、「神戸常盤大学・神戸常盤大学研究倫理委員会規程」の一部を改訂した。 2. 教職員に対する研究倫理教育として、日本学術振興会「科学の健全な発展のために」、科学技術推進機構「THE LAB」、および「神戸常盤大学・神戸常盤大学短期大学部研究活動上の不正行為の防止及び対応に関する規程」を各自で通読し、閲覧後に誓約書を研究協力課に提出する形式で行うこととした。誓約書の提出期限を、科研費申請に間に合うように、9 月末までとした。 3. 「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」の公表により、該当する研究に当たっては、申請時に指針を読んだかどうか確認する項目を追加し、チェックリストの変更を行った。 目標達成度の評価：1. できた 2. ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった
b. 委員会・組織の主要な活動内容（根拠資料・記録）： 1. 本年度は計 10 回の委員会を開き、22 件の申請書の審査と、上記課題について検討した。 2. 下記に示す 22 件の研究倫理申請書（医療検査科 4 件、看護学科 8 件、こども教育学科 1 件、口腔保健学科 1 件、教育イノベーション機構 3 件、看護学科通信制課程 5 件）と看護学科、医療検査学科の卒業研究について審議し、21 件分を承認した。
次年度の課題
1. 学生に対する、研究倫理教育の実施 2. 研究費の管理・監査規程と研究の不正行為の防止及び対応に関する規程の統合についての検討
活動内容の補足 平成 27 年度研究倫理申請内容

<大学>

- 15-01 坊垣美也子（医療検査学科） 血管内皮細胞と末梢単球の相互作用、分化転換等に関する研究（継続課題） 承認（5月12日）
- 15-02 柳本有二（看護学科） ノルディック・ウォーク、ダーツおよびシナプコーディネーション活動前後の脳機能活動変化について—脳内酸素化ヘモグロビン測定およびウェアラブル脳波の測定—（研究計画変更） 承認（5月12日）
- 15-03 澁谷雪子（医療検査学科） 唾液の臨床検査—唾液成分と疲労度、ストレスとの関係— 承認（6月9日）
- 15-04 山崎麻由美（教育イノベーション） 歯科衛生士の専門英語教育において自律学習習慣を育てる教授法及び教材開発 承認（7月7日）
- 15-05 鶺鴒千鶴（看護学科） 多職種からみた療養通所介護の看護実践行動の成果と課題承認（7月7日）
- 15-06 近藤みづき（教育イノベーション） 幼児期の運動発達における身体知の発生に関する研究 承認（7月7日）
- 15-07 戸川晃子（こども教育学科） ピアノ演奏表現向上に関する研究 承認（8月11日）
- 15-08 坂本秀生（医療検査学科） 在宅医療の現場における「臨床検査」に関する実態調査 承認（11月10日）
- 15-09 児玉明子（看護学科） 看護系大学における卒業時の看護技術到達度に関する実態調査と課題 審査日：1月8日 条件付き承認（1月8日）
- 15-10 庄司靖枝（看護学科） 短時間の小児看護学実習における学生への影響と学び 承認（1月8日）
- 15-11 澤田浩秀（医療検査学科） 認知症検診における近赤外光分析法を用いた脳内酸素化ヘモグロビン変化測定の有用性の検討 承認（1月8日）
- 15-12 伊東美智子（看護学科） 母性看護学実習における学びに関する研究—分娩見学を終えた学生の語りを通して考える— 承認（2月3日）
- 15-13 島内敦子（看護学科） 母性看護学における情意領域の育成を目指した教育内容の分析（公表審査課題） 非該当（2月3日）
- 15-14 柳本有二（看護学科） 認知症患者と視覚障害者との会話交流時における脳機能活動変化について（研究計画変更） 承認（2月3日）
- 15-15 伊東美智子（看護学科） へき地で勤務する看護職者に関する研究—主に都市部から着任してきた人たちの経験と学びのプロセスに着目して— 承認（2月3日）

<短期大学部>

- 15-01 松原渉（看護通信制） バーチャルハルシネーション視聴覚教材の学習効果—受講した2年課程学生の自由記載感想を通して— 承認（5月12日）
- 15-02 高宮洋子（看護通信制） 本学通信制課程卒業生の現状からみた学修成果と課題承認（6月9日）
- 15-03 武ユカリ（看護通信制） 訪問看護師を対象とした対応困難の要因に関する全国質問紙郵送調査 承認（7月7日）
- 15-04 松原渉（看護通信制） 2年課程通信制看護学生の精神障害者に対する意識—精神

看護学概論と精神看護学実習とのスクリーニング受講者の比較— 承認（9月8日）

15-05 山岡紀子（看護通信制） 極および超低出生体重児における幼児期早期の共同注意行動の発達とその評価法の検討 承認（10月6日）

15-06 高藤真理（教育イノベーション） 玉田学園教職員の口腔保健に関する意識調査承認（1月8日）

15-07 畑山千賀子（口腔保健学科） 歯科衛生士の需要予測に関する検討 承認（2月3日）

9. 個人情報保護委員会 年間活動報告

委員長 生島 祥江

本年度の課題
学生への個人情報の取り扱いに関するマニュアルの見直し
本年度の活動方針・目標
教職員個々の個人情報の適正管理を図る。個人の権利及び正当な利益の保護を踏まえ、個人情報の保護に努める。
主な活動内容
a. <u>目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）</u> ： 委員会の開催（不定期） 新入学生には学内ガイダンス期間中に、本学が所有する学生個人情報の種類と取り扱い、第3者への提供等について説明し、文書にて学生と保護者から同意を得た。 個人情報が適正に取り扱われているかどうか確認することに努めたが、インターネットを介してのやり取りが増え、適正管理に向けた活動は十分とは言い難い。 学生個人情報の種類および取り扱いに関するマニュアル等を、新たな個人情報収集の届け出の承認も含め、見直し修正した。 尚、詳細は個人情報保護委員会議事録参照 目標達成度の評価：1. できた 2. ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった
b. <u>委員会・組織の主要な活動内容（根拠資料・記録）</u> ： 本年度の委員会の開催は2回であった。 個人情報が適正に取り扱われていることの確認。 新入生の本学が所有する学生個人情報の種類と取り扱い等についての同意状況を確認し、未提出者に対応。 新たな個人情報収集の届け出に対し審議した。 個人情報の取り扱いについて見直し修正した。 尚、詳細は個人情報保護委員会議事録参照
次年度の課題
継続して、個人情報の適正管理に向け、事例報告を通して教職員の個人情報の取り扱いに関する問題意識を高める。

10. ハラスメント防止対策委員会 年間活動報告

委員長 井上 清美

本年度の課題
ハラスメント防止意識の向上のための取り組みを継続するとともに、ハラスメント相談にかかる担当者の協力体制や力量形成を図る。
本年度の活動方針・目標
1 カウンセリングルーム相談員等との連携を図り、相談担当者としての相談能力の力量形成を図る。 2 ハラスメント相談の基本マニュアルを作成する。
主な活動内容
<u>a. 目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）：</u> 目標 1 1) 掲示板・研究室ドアのプレート・リーフレット配布など学生への『ハラスメント相談員』の周知を図り、相談へのアクセス経路を示した。 2) 委員会メンバーにカウンセリングルーム相談員がいたことで、学内組織との円滑な連携が図れた。 3) 新任の相談員が 4 人と多かったことから、委員を対象とした研修会を開催し、相談員としての力量形成を図った。11 月 9 日「ハラスメント相談・対応の留意点」講師：西片和代（神戸パートナーズ法律事務所弁護士） 目標達成度の評価：1. できた ②. ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった 目標 2 1) 昨年度に取り掛かったハラスメント対応にかかる相談マニュアルを完成させた。 2) 『ハラスメント相談員の研修会』の中で、マニュアルに基づいた相談の流れの確認や、学生相談に関わる基本姿勢を確認した。 目標達成度の評価：①. できた 2. ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった
<u>b. 委員会・組織の主要な活動内容（根拠資料・記録）：</u> 1. 委員会を 7 回開催した。重点目標に対しては、ワーキング会議を開催し、効率的に活動した。（会議録参照） 2. 上記活動内容を通じ、学内におけるハラスメント防止への意識向上への取り組み、及びハラスメント相談の体制の基盤形成を図った。 3. 委員の交代等で、新任の相談員が 4 人あったが、上記の活動を通じ、委員会内での共通理解と協力体制が図れた。 4. ハラスメントを防止する大学の環境づくりについては、今後も継続していく。
次年度の課題
ハラスメント防止意識の向上のための取り組みを継続するとともに、学生に対してハラスメント相談体制の周知策の強化を図る必要がある。

11. 危機管理（災害）委員会 年間活動報告

委員長 岩井 重寿

本年度の課題
<ul style="list-style-type: none">・ 災害発生時に向けた実務的問題の把握・ 教職員を対象とした消防訓練実施に向けた体制整備
本年度の活動方針・目標
(継続) ①避難訓練の実施 ②消火技術会への参加 ③施設確認 ④消火設備の点検実施 (新規) ①防災管理者講習会へ参加 ②災害発生時に対する実務的問題を把握する態勢整備
主な活動内容
a. <u>目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）</u> <ul style="list-style-type: none">・ 新入生と在学生の災害時における説明会及び避難訓練（放送設備点検）を行った。・ 避難経路図を作成し、ホームページに掲載し、学生に周知した。・ 災害対策本部員を対象に、震度6強の地震発生を想定し、緊急連絡網による模擬訓練を行った。・ 消防用設備等の点検を業者に委託し、万全の体制を図った 目標達成度の評価：1. できた ②. ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった
b. <u>委員会・組織の主要な活動内容（根拠資料・記録）</u> <ul style="list-style-type: none">・ 新入生オリエンテーションにおいて、危機管理委員により避難経路及び防災マニュアルの説明会を実施した。・ 大学の食堂から出火したことを想定し、警報ベル及び放送設備の点検、並びに消防署への通報を含め避難訓練を実施した。・ 長田地区自衛消防隊連絡協議会が実施する消火技術会に4名の職員が参加し、消火技術の訓練を受けた。・ 防災管理者新規講習会に1名の職員が受講した。・ 附属ときわ幼稚園の避難訓練を行った。・ 7月17日午前、台風11号接近により近隣住民3名が避難所に指定されている本学に避難してきたため、メインホールに誘導したが午後に帰宅した。・ 1月14日神戸市が主催シェイクアウト訓練を事前に全教職員に周知し、当日、学生も含め参加した。
次年度の課題
<ul style="list-style-type: none">・ 災害時の学生安否確認のためのシステムの検討・ 福祉避難所との連携

12. ICT 推進委員会 年間活動報告

委員長 光成 研一郎

本年度の課題
昨年度の課題を改善し、HP の一層の充実を図る。
本年度の活動方針・目標
上記課題解決のために、各部署と連携をとりながら活動を推進する。
主な活動内容
<p>a. 目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）：ICT 推進委員会議事録</p> <p>【昨年度の課題を解決するために行った活動】</p> <ul style="list-style-type: none">・「学科おしらせページ」を作成し、学科情報の効果的な発信をおこなった。・学生の課程内外の活動を HP 上で発信するために、「学科おしらせページ」を作成し、活動情報の発信を行った。また学科・広報・キャリア支援課等、各種ブログ、各種センターのサイトからも情報発信を行った。・HP に関する学生アンケート調査をマナビシステムを活用し、実施した。その結果を現在分析中であるが、来年度新設される広報委員会の活動にいかせるように申し送りを行う。・「おしらせページ」をツイッターやフェイスブック（わいがやの公式アカウント）と連携できるようにした。・学生の成長を発信できるような仕組みを検討し、0 科の学科ブログから試験的に発信している。他学科でも発信を検討している。・オープンキャンパスの様子を発信するページを作成した。ユーチューブからも発信している。 <p>【学内無線 LAN 環境の整備】</p> <ul style="list-style-type: none">・委員を中心としたユニットを組織し、学内無線 LAN の充実を実現している。 <p>目標達成度の評価：1. できた 2. ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった</p> <p>b. 委員会・組織の主要な活動内容（根拠資料・記録）：ICT 推進委員会議事録；</p> <p>通常の活動内容として、ほぼ毎月年に 10 回の会議を実施した。具体的内容としては、下記に挙げる。</p> <ul style="list-style-type: none">・学内 LAN の整備。・年次報告書の公開。・アクセス回数の把握。（大学内からのアクセス数をカウントしないシステムに改変）・HP 上の見易さ、使い勝手の良さ等への改善。一例として、見たいページにジャンプできるカレンダーの作成等。
次年度の課題
<ul style="list-style-type: none">・HP に関する学生アンケート調査の分析を行い、改善すべき点は改善する。一例として本学は au の携帯電話がつながりにくい。可能であるならばアンテナの設置を検討する、など。・記事を保存、整理できるアーカイブのコンテンツの新設。

13. 高大連携委員会 年間活動報告

委員長 栗岡 誠司

本年度の課題
講師派遣についての要望が増加し、教員負担が過大になるなかで、本学が目指す専門職志向への増加への効果が認めにくい依頼があることも否めない。このような中で、如何にすれば高校、本学両者にとって効果的な「高大連携授業」を実施できるかを課題とする。
本年度の目標・方針
活動方針；将来の職業人の確保のため、各学部学科の主体的な考えと委員会活動を連携させ、高大連携を推進する。 目標；大学教育の一端を体験する機会を通して、高校生に進路意識や職業意識の高揚を計ることに貢献する。
主な活動内容
a. 目標達成に向けた活動内容 昨年度までは、協定を結んでいた明石南高校、東灘高校、三木北高校、社高校の県立高校4校へは各学科で選出された教員の協力を得て、高校生に大学教育の一端を触れさせた。しかしながら、長年続いていく中で、高校の管理職も交代し、スタート時の趣旨が伝わらず、慣例的な依頼があった。このような背景の中で、今年度は課題の多かった県立社高校との連携を解消した。 高大連携で行う授業の内容は、主として各学科が養成する職種の紹介・現状とやりがいなどを伝えることで、高校生の進路意識や職業意識の高揚を図った。提携校以外の依頼はある程度精査すると同時に、効果が望まれる高校を開拓した。 医療検査学科では、臨床検査技師という職種の認知度を図るために教員が担当できる講義内容を積極的に高校へ伝え、出前授業の依頼を受けた。25年度からは、幾つかの高校より依頼を受け出前授業を実施している。受講した多くの生徒は、進路意識と進学意欲が高まったと感想を記している。 目標達成度の評価：1.できた 2.ほぼできた 3.あまりできなかった 4.できなかった
b. 委員会・組織の主要な活動内容
(1)提携による高大連携授業 ①県立明石南高校「高大連携授業」；看護学科教員を中心に看護系希望生徒（2年次生）を対象に「看護基礎」の中で兵庫県教育委員会より特別非常勤講師の委嘱を受け、N科教員を中心としてO科教員と共に担当した。②県立東灘高校；進路選択を目的として、N科教員とE科教員が担当した。③県立三木北高校；「総合学習の時間」の講師としてN科教員とE科教員で担当した。
(2)医療検査学科による単発の出前授業 県立小野高校など兵庫県内の県立高校で実施した。
次年度の課題
・高校の対応や状況を把握・分析し、実施について精査が必要である。 ・実施校の精査だけでなく、新たに連携を始めることについても検討が必要である。 ・過去、授業内容、参加人数などの詳細な情報を教員が共有し、改善を計る必要がある。

14. 就職委員会 年間活動報告

a. 医療検査学科・就職委員会 委員長 井本 しおん

本年度の課題
<ul style="list-style-type: none">・兵庫県職員募集要項の変更に応じて適切に対応する。・ガイダンスの開始時期：M2に対して「マナー」についてのガイダンスを実施する・M4の12月末での内定率目標を80%程度とする。・引き続き地方の就職先開拓を行う。・引き続き公務員、企業など就職先の選択肢を広く広報する。
本年度の活動方針・目標
<ol style="list-style-type: none">1. M2に対して「マナー」についてのガイダンスを実施する。2. M4の12月末進路内定率80%をめざす。3. 学生の出身地を調べ、M1～M3の出身地に出向く。4. 引き続き公務員対策として一般教養対策講座、SPI対策講座を年2回実施する。
主な活動内容
<p>a. <u>目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）</u>：</p> <ol style="list-style-type: none">1. M2に対して就職ガイダンスを4回行い、2回目に就職活動のマナーについてのガイダンスを実施した。2. 4期生の12月末時点の進路内定率は71%であった。昨年（65.5%）よりやや改善したが、目標には及ばなかった。3月末の国試合格者の内定率は97.4%であった。3. M1～M3学生の出身地を調べ、四国出身の学生が増えてきていることから、キャリア支援課職員が主に300床以上の病院を中心に香川県4病院、愛媛県4病院を訪問し、次年度以降の求人情報の提供を依頼する活動を行った。4. 公務員試験対策の一般教養講座、SPI対策講座を年2回実施した。 <p>目標達成度の評価：1. できた 2. ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった</p> <p>b. <u>委員会・組織の主要な活動内容（根拠資料・記録）</u>：</p> <ol style="list-style-type: none">1. 就職委員会を月1回以上開催した。2. ガイダンス M1：入学式当日の教員紹介時に、平成27年度の就職状況を保護者に説明 M2：4回実施。うち2回は春休みの病院見学に対応するもの M3：ほぼ月1回実施した。履歴書、小論文に必要な文章力を中心に就職試験に必要な基礎力養成を図った。小論文作成では外部講師による演習も実施した。 M4：履歴書、文書作成の指導、面接でのマナー等を前期に月2回の頻度で実施した。3. 一般教養対策講座・SPI対策講座 昨年とほぼ同様である。 公務員・一般教養対策講座、SPI対策講座をM2・M3対象に2日実施した。 公務員・一般教養直前講座：M4対象に実施した。4. 病院・企業説明会（企業勉強会）

<p>6/13：病院以外の様々な領域で活躍している卒業生による説明会をM3対象に実施した。</p> <p>9/12：検査センター2社、健診センター1社、兵庫県、一般病院、医薬品医療機器販売会社1社の6施設の主に採用担当者による説明会を実施した。</p> <p>5. 個別就職支援</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 進路希望調査のための個別面談：M3後期に実施。 ・ 就職試験直前の模擬面接：M4の希望者に年間を通じて実施した。一人に1時間近くかけて指導、アドバイスをを行った。
<p>次年度の課題</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 教員と事務とが情報共有できるシステムがないため、手間と時間がかかっている。キャリア支援課と就職委員会が共有できる情報システムが必要不可欠である。 2. 多大な時間を費やしている模擬面接では、面接後に学生に課題とそれに対する改善策についてレポート提出させるなどフィードバックのための工夫が必要である。 3. 教養講座などの企画をよりよいものにするため、学生による授業評価等フィードバックのための工夫が必要である。 4. 就職委員会では、学生の動向確認に多くの時間がかかっている。課題1が解決できるまでは、就職委員毎に受け持ち学生を決めるなどの工夫が必要である。

b. 看護学科・就職委員会 委員長 井上 清美

<p>本年度の課題</p> <p>学生の進路支援については、安定的な活動ができているが、卒業生の離職状況の把握ができていない。</p>
<p>本年度の活動方針・目標</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 学生が自己の将来像を考え、主体的な進路決定や就職試験の受験ができるよう効果的な支援を行う。 2) 保健師、養護教諭担当との連携を図り、学生の志望に応じた効果的な支援を行う。 3) 離職防止についての活動を検討するため、離職者の確認方法を委員会で検討する。
<p>主な活動内容</p> <p>a. <u>目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）：</u></p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 就職支援ガイダンスや担当を決めての就職進路相談など、安定的な活動が実施できた。 2) 選択制である保健師養成課程や養護教諭養成課程の教員と円滑な連携が図れた。 3) 離職者の確認方法については、今後検討していかなければならない課題である。 <p>目標達成度の評価：1. できた ②. ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった</p> <p>b. <u>委員会・組織の主要な活動内容（根拠資料・記録）：</u></p> <ol style="list-style-type: none"> 1 委員会を10回開催した。タイムリーな時期を考えてのガイダンスやOB・OG懇談

会、教育提携病院との連携活動については、主担当を決めて効率的に活動した。特に 4 年生に関しては、個別指導のほか、申し出に基づいて模擬面接を実施した。

2 上記活動内容を通じ、学生への就職進路指導について、学生の主体的な決定を支援する取り組みを図った。学生による就職委員会の支援活動への評価は、良好であった。

3. 離職防止にかかる指導については、今後も継続していく。

次年度の課題

学生の主体的な就職や進路決定への取り組みを継続するとともに、離職防止にかかる相談体制や離職者の把握方法を検討する必要がある。

年間活動内容

回	日時	主な内容
1	4月2日(木)	今年度委員会の活動方針と活動計画 第1回就職ガイダンスについて OB・OG 懇談会の日程について 学生の個別面接担当について
2	4月27日(月)	第1回ガイダンスの評価について 奨学金の受給学生について OB・OG 懇談会の計画について 病院の求人訪問について
3	5月25日(月)	OB・OG 懇談会の評価について N4 学生の個別面接状況の確認
4	6月29日(月)	OB・OG 懇談会の評価(アンケート結果)について 模擬面接の計画について 保健師・養護教諭の就職窓口教員との連携について
5	9月7日(月)	N3 学生への就職ガイダンスの日程について N3 学生への就職ガイダンスの計画について N3 学生の就職相談窓口担当について
6	10月26日(月)	N3 学生への就職ガイダンスの評価 N4 学生の進路状況について
7	11月30日(月)	学生の就職支援状況 保健師・養護教諭の就職窓口教員との連携について 教育提携病院ときわ病院の説明会の計画について
8	1月25日(月)	就職内定状況確認(総括表)について 就職委員会アンケートについて 教育提携病院(ときわ病院)説明会の計画について
9	2月22日(月)	教育提携病院(ときわ病院)説明会の計画について N4 学生の進路状況について 新年度の就職ガイダンスについて
10	3月25日(水)	教育提携病院(ときわ病院)説明会の評価について

	年間活動まとめ 国家試験合格状況の確認、不合格学生と就職内定先との調整
--	--

c. こども教育学科・就職委員会 委員長 上月 素子

本年度の課題
<ul style="list-style-type: none"> ・ 1期生全員が希望の専門職種に就職できるよう万全の指導体制で臨む。 ・ 1年2年3年4年の各就職指導内容を整理し、4年制学部としての就職指導体制を確立する。
本年度の活動方針・目標
<ul style="list-style-type: none"> ・ 1期生のひとりひとりが希望の進路（専門職種）に進めるよう、就職指導体制を整備し、きめ細やかな個人面談及び採用試験対策を行う。 ・ 1期生が一人でも多く公立採用試験に合格できるよう情報を収集し個別指導を徹底する。 ・ 2期生3期生4期生の就職指導プログラムを整備し指導する。 ・ 学科独自の「保育サポーター」制度を活用し、保育所・幼稚園・施設へ就職を希望する学生の就職に向かう意欲を高め、早期の就職先決定を実現させる。 ・ 小学校及び公立幼稚園・保育所希望者の一般教養科目・専門教養科目に関しては、教職支援センターと連携を図り学習会セミナー受講で採用試験合格への学力強化に努める
主な活動内容
<p>a. 目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）：【就職委員会議事録】</p> <p>①こども教育学科就職指導関連活動</p> <p>4月 就職がイグンス「年間指導計画と福祉領域への就職について」（3年 担当:橋本） 就職がイグンス「求人登録から就職へ」（4年 担当:小山・橋本・上月）</p> <p>5月 個別面接（1年・2年 面接担当:学科全教員） 公立採用試験対策 履歴書作成指導・一般専門実技対策指導（空き時間 4年） 進路未決定者個別面談（4年生 キャリア支援課・E科就職委員） 就職に関する公欠「授業に関して1科目3回まで認める」を決定周知（4年）</p> <p>6月 就職フェア参加を指導（2年～4年 担当 橋本・藤本・上月） 公立採用試験対策 履歴書指導・集団面接指導（4年 担当:上月） 民間採用試験対策 履歴書指導・面接指導（4年 担当:キャリア支援課 上月） 一般就職対策 新卒ハローワークガイダンス（4年 担当:キャリア支援課）</p> <p>7月 就職がイグンス「夏休みの過ごし方と保育サポーターについて」（3年） 公立採用試験 小7/11 岡山・川崎、7/12 横浜 7/18 山口 7/25 鳥取 7/26 兵庫 ・神戸・大阪府・大阪市・京都市 幼7/26 神戸 保7/26 赤穂 姫路 加古川 公立採用試験対策 二次対応 面接・専門科目・専門実技（空き時間個別対応） 民間採用試験対策 履歴書添削指導（4年 担当 福祉:橋本 保幼:上月） 民間採用試験対策 面接指導（4年 担当:E科就職委員複数で分担） 就職に関して気がかりな学生への個別指導（4年 担当 上月）</p> <p>9月 取得する資格免許及び進路希望調査（1年・2年・3年） 公立採用試験一次不合格者への指導 進路変更及び今後の就職活動</p>

(担当 小：井上・牛頭、 保：上月)

大学院入学試験対策 兵庫教育大学論文指導 (希望者1名 担当:上月)

民間保育園・幼稚園・施設希望者はほぼ進路が決まる

この時期になっても気がかりな学生への個別指導 (担当:橋本 小山 上月)

10月 就職がイグンス「後期の就職がイグンス予定・保育サポーター登録」(3年)

就職がイグンス「採用試験のための実技強化講座 (3年 担当:戸川・上月)

「保育サポーター制度説明会」(実施11~12月 2年)

就職がイグンス「保育サポーター実施説明会」(3年)

11月 就職がイグンス「採用試験のための小論文・作文指導①②」(3年 担当:牛頭)

進路決定に向けての個別面談 (3年 担当:E科就職委員)

「保育サポーター実施」(~3月 3年)

合格者座談会 11/26 小学校 (参加者 1年~3年)

進路別卒業生座談会 11/14 保・一般 11/26 幼 11/30 小 12/19 施 (4年)

12月 進路確定のための3年生最終進路調査 (3年)

就職がイグンス「履歴書の書き方①②」(3年 担当:小山)

就職がイグンス「一般就職対象講座①②③」(~1月3年生) 担当:キャリア支援課

1月 就職がイグンス「時事問題・保育課題講座」(3年 担当:大森・上月)

「保育サポーター」事後指導 (3年)

神戸市スクールサポーター説明会開催 (1年)

2月 個別面接 (1年 2年 面接担当:学科全教員)

3月 公立採用試験対策講座 (3年)

※ 記名の無い場合はE科就職委員またはキャリア支援課が担当

②就職懇談会参加

6~8月 姫路市保育協会・兵庫県保育協会・兵庫県幼稚園連盟・神戸市私立保育連盟
(参加者:大森・橋本・藤本)

③就職フェア引率指導

6~8月 兵庫県私立幼稚園協会 兵庫県社会福祉協議会 兵庫県保育協会 姫路市保育協会 神戸市私立幼稚園協会 (キャリア支援課:小山、橋本・藤本・上月)

④1期生の就職希望先巡回訪問 5月~H28年3月 (担当 施:橋本、保幼:上月)

⑤1期生進路実績 就職・進学希望者 84名

保育領域 43名:公立保育士4名 民間幼稚園教諭5名

幼保連携型認定こども園保育教諭12名 民間保育園保育士22名

福祉領域 14名:事業団児童指導員1名 民間児童福祉施設児童指導員9名

民間障害者施設生活指導員4名

小学校 22名:公立小学校教諭10名 臨時講師12名

その他 5名: 進学 1名(大学院) 一般企業 4名

目標達成度の評価: 1.できた 2.ほぼできた 3.あまりできなかった 4.できなかった

b. 委員会・組織の主要な活動内容(根拠資料・記録): 【就職委員会議事録】

<ul style="list-style-type: none"> ・毎月1回以上の委員会開催 参加者:キャリア支援課 木村課長・小山課員 E科教員(藤本・橋本・井上・多田・牛頭・脇本・戸川・上月) ・キャリア支援課、教職支援センター及び学科と協力し、上記aの企画実施にあたる。 ・保育所・幼稚園・施設の就職懇談会、就職フェアに参加し、交流と情報収集を図る。 ・学科独自の「保育サポーター」制度を活用し、3年生を中心に、就職を視野に入れた保育所・幼稚園・施設で実習を行い就職への意欲を高める。 ・1期生の就職ガイダンスを改善し2期生は前期(基本的な内容)後期(具体的な就職対策)と計画的に実施し、就職への意欲を高め、各自の希望に沿った進路決定を促す。 ・1期生の実態に即して、主として一般企業採用試験対応として、就職に関する公欠「授業に関して1科目3回まで認める」を決定周知する。 ・こども教育学科就職支援プログラム(1年から4年まで)を完成させ図表化する ・1期生の実態に即し、認定こども園化を展望した、進路実績表の集計方法を確立する ・1年生保護者会開催 日時:3月5日(土)13時~参加者:32名(面談5名)全体会方式 3年生保護者会開催 日時:3月5日(土)10時30分~参加者:28名(面談11名)分散 会方式
<p>次年度の課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2期生全員が希望の専門職種に就職できるよう万全の指導体制で臨む。 ・1期生の就職指導を基本に、2期生3期生4期生の就職活動が更に充実できるよう、4年制学部の就職指導体制としての内容を整備する。 ・新カリキュラム対応のコース制導入後の就職指導の在り方を検討する。 ・将来、就職指導に力を貸してくれるよきOGOBになることを願い、社会に出た1期生の職業人としての成長をサポートし、就職現場との良い関係性を保持伸長する。
<p>活動内容の補足</p> <p>1期生の就職が今後大きく影響することを意識し、就職委員会は入学直後から万全を期した就職指導を行い、結果として予想以上の成果をあげることができた。小学校採用10名、公立保育所採用4名も喜ばしい実績の一つである。4年制大学は男子学生が多くなる傾向があり、その大半が小学校と福祉職を進路として選んだ。また短大時代は若干名しか進まなかった福祉職に14名も進路を決めたのは、福祉担当教員の見識と指導により、より専門性の高い児童指導員・生活支援員という処遇も確立した職種に進めることを理解し生涯の仕事として選んだ結果である。更に男子学生が増えたとしても、また女子学生が生涯の職種として選ぶ場合にも、福祉職領域は希望の持てる就職先であり、今後の4年制大学における就職の活路を開きうる可能性を秘めている。保幼小の公立採用者数は減少傾向にあるが、次年度の計画として、2期生は福祉領域の公立(県の事業団)への就職を進める方針である。しかし課題もある。コース制にすることで今後は改善されると考えるが、1期生は3免を取得する学生も多く、保幼施小の4部門の専門職業人となれる可能性がある分、自分の適性や実力を冷静に判断できず大幅に揺れ動き、進路決定に困難をきたした学生も見られた。就職委員会のメンバーが中心となり時間をかけて指導し、学生自身の希望に即した進路を取り、その過程で上手くいかなかった時点で修正や変更などの相談を更に細やかに重ねた。そのため指導に時間と労力を要したが、ひとりひとりが満足のいく進路を得て4月に社会</p>

人として巣立つことになった。1 期生にかける学科教員の熱き思いがあり、84 名の学生が 84 通りのドラマを展開した、振り返れば印象深く充実した 4 年間の就職指導だった。

d. 口腔保健学科・就職委員会 委員長 上原 弘美

本年度の課題
<ol style="list-style-type: none"> 1. 3 年間を通じた就職支援活動（ガイダンス含む）の実施。 2. 就職活動の状況を学科教員が共有して学生支援を強化する。 3. 求人施設開拓を行い、病院・企業への就職支援を継続して強化する。 4. 早期より活動準備の必要な病院、企業、行政、進学に対する情報を提示して将来に結びつける。（継続） 5. 個人にあった細やかな就職支援を行う。（継続） 6. 卒業生の再就職等の就職支援の基盤作り。（継続）
本年度の活動方針・目標
<ul style="list-style-type: none"> ・学生が個別性を持って、就職先を選択できるように支援する。 ・教員とキャリア支援課担当者が、情報を共有し、双方から学生を支援する。 ・就職ガイダンスを適時に開催し、就職への意欲を高める。
主な活動内容
<p>a. <u>目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）：</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・2年次に2回（4月・11月）、3年次に6回の（4月・5月・9月・11月・12月・3月）ガイダンスを開催した。 ・そのうち、2年次11月と3年次4月には、キャリアサポーターを招き、自己の経験から在学生に対しアドバイスをしてもらい、進路選択の支援をおこなった。 ・3年次5月のガイダンスでは、自己分析の時間を設け、自己アピールポイントの整理や、将来のなりたい自分を探り、進路選択への準備とした。 ・希望者には就職委員による個別面談をおこなった。 ・求職の状況は、キャリア支援課が把握したものを、逐次担任・就職委員にメール配信し、情報共有に役立てた。 ・希望者にはキャリア支援課と就職委員で模擬面接を実施した。 <p>目標達成度の評価：1. できた ②ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった</p> <p>b. <u>委員会・組織の主要な活動内容（根拠資料・記録）：</u></p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 就職委員会の開催 8回 2) ガイダンスの開催 2年次：2回 3年次：6回 3) キャリアサポーターの話を聞く会の開催 <ul style="list-style-type: none"> 4月：大学病院・障害者センターに勤務する卒業生 11月：小児歯科・矯正歯科・一般歯科医院に勤務する卒業生 4) 小論文講座の開催 1回 8月 病院・企業・進学希望者 16名
次年度の課題
<ul style="list-style-type: none"> ・就職ガイダンスを適時に開催し、就職への意欲を高めるとともに、一人一人の学生が希

望する進路選択ができるよう支援する。

- ・国家試験への取り組みと並行しての就職活動となるため、国家試験委員会と情報を交換し、学生の学習状況を鑑みながら、支援していく。
- ・本年度の課題であった、「求人施設開拓を行い、病院・企業への就職支援を継続して強化する。」および「卒業生の再就職等の就職支援の基盤作り。」については、ほとんど実施できなかったため、次年度に向けて継続課題とする。

15. 国家試験対策委員会 年間活動報告

a. 医療検査学科・国家試験対策委員会 委員長 坂本 秀生

本年度の課題
臨床検査技師国家試験合格に向けた学修支援、その為の資料作成、模擬試験実施、補習プログラムの立案を行ない、受験者の意識付けを行なう。
本年度の活動方針・目標
ストレートで4年次まで上がった履修制限者の合格率を上昇させるため、前期から現役生の成績下位層を重点的に指導し、学年全体の成績が上昇できるよう指導を行う。
主な活動内容
<p>a. <u>目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）：</u></p> <p>毎月1回の国試対策委員会にて基本的計画を確認し、学生の学習進捗状況を確認しながら組織的に国試対策を行った。特に前期の模試では成績不振者を早期に把握し、個別指導に近い形式で補習を行った。</p> <p>後期の総合医学検査演習試験の結果を解析し、ポータルシステム及びmanabaを利用して国試対策での注意点を伝達した。また、学生達の不安を除き学生意欲を上げるため、要所所でガイダンスを行った。</p> <p>教員に執筆依頼して2015年度版国試対策問題集を作成し、3年次から授業の参考資料及び国試対策用の資料として、学生に無償配布した。</p> <p>合格率をみると、本学新卒者87.5%であり、全国新卒者の87.4%と同等であった。合格者の内訳を確認すると4年で卒業した学生は92.3%であるのに対し、5年以上で卒業した学生は50%と合格率に大きな差が生じた。また、既卒生に関しては14.3%とこちらも全国平均の15.9%と同等であった。合格者の内訳を確認すると浪人1年目の者だけが合格し、2年以上浪人している者の合格者はいなかった。前期から成績不振者、浪人生への指導を行った成果もあり、いずれも全国平均並みの合格率とすることが出来たが、ここに至るまでは課程外での教員に献身的とも言えるサポートがあった。全国平均合格率とは言え、11名もの不合格者がいた事は事実である。特に留年生には低学年からの支援が必要と思われる。</p> <p>【根拠資料：国試対策委員会議事録、2015年度版国試対策問題集】</p> <p>目標達成度の評価：①.できた 2.ほぼできた 3.あまりできなかった 4.できなかった</p> <p>b. <u>委員会・組織の主要な活動内容（根拠資料・記録）：</u></p> <p>4月6日 第1回委員会 年間スケジュール決定、成績不振者への対応策</p> <p>4月15・22日 M4 第1回模擬試験</p> <p>5月15日 M4 第2回模擬試験</p> <p>5月22日 第2回委員会 国試対策問題集配布、既卒生への国試対策案内</p> <p>5月26日 M4 前期1回目補習開始 14名（6月17日までの火～金1限目）</p> <p>6月19日 M4 第3回模擬試験</p> <p>6月19日 第3回委員会 60回国試改変問題作成、M3, M4: 模擬試験について</p> <p>6月29日 M4 前期2回目補習開始 18名（7月15日まで1限目）</p> <p>7月3日 M3 第1回模擬試験</p>

7月17日	M4 第4回模擬試験
7月27日	第4回委員会 M4 夏補習の概要決定
7月30日	M4 前期3回目補習開始 17名(8月12日まで1限目)
8月25日	第5回委員会 成績不振者の把握と対策
8月31日	M4 第4回模擬試験
9月16日	M4 後期1回目補習開始 30名(9月25日まで1限目)
9月24日	第6回委員会 全国模試の解析、学内模試作成
10月8日	M3 第2回模擬試験
10月22日	第7回委員会 M4:成績不良者と欠席者の把握
11月26日	第8回委員会 医歯薬模試2回分結果から動向分析
11月30日	M4 後期2回目補習開始 28名(12月11日まで)
12月24日	臨床検査学教育協議会模試A
12月25日	第9回委員会 M4:成績不良者への補習方法、今後の補習策
1月5日	M4 後期3回目補習開始 28名(1月7日まで)
1月21日	M4 後期4回目補習開始 41名(1月29日まで)
1月29日	第10回国委員会、M4:国試直前の対応
1月24日	休日ボランティア(2月21日まで) 教員が交替で休日に出勤し監督
2月3日	M4 後期5回目補習開始 26名(2月19日まで)
2月19日	第11回委員会 国試ガイダンスの確認、模範解答作業の確認
2月24日	第62回臨床検査技師国家試験、大阪商業大学にて激励
2月24日	模範解答作成 学内自己採点
2月25日	学内自己採点、国試後ガイダンス、協議会への報告
3月16日	第12回委員会 62回国試の分析、27年度の振り返り
次年度の課題	
<p>全国大学生新卒合格率は89.6%に対し、本学を4年で卒業した学生は92.3%とそれを上回っていた。その一方、5年以上で卒業した学生は50%と、合格率に大きな差が生じた。</p> <p>次年度以降は最終学年の国試対策だけでなく、履修制限者を含めた成績不振者へ学科全体での対応が有効である。</p>	

b. 看護学科・国家試験対策委員会 委員長 黒野 利佐子

本年度の課題
<p>1) 学生の主体的な取り組みの支援</p> <p>①4年次の学生には早期から国試の取り組みの支援、特に保健師国家試験対策では目的意識を高く持ち、看護師国家試験対策とともに早くから学習計画の中に組み入れ学習準備することの重要性を常に意識させる。②低学年(3年生・2年生)が、国試を意識した学習の取り組みができるよう支援する。</p> <p>2) 学習環境の整備</p> <p>①学習環境の整備としての教室の確保だけでなく、学生たちが主体的にグループ学習に取り組めるよう多様な環境の整備を考える。</p>

②Webでの学習環境を整える。
本年度の活動方針・目標
<p>学生が主体的に国家試験に対する学習姿勢を培い、学習方法を確立できるよう支援する。そのために、以下の内容を検討し、活動を進めていく。</p> <p>1) 学生の主体的な取り組みの支援</p> <p>①学生国家試験委員の指導・支援</p> <p>4年次の早期から国試の取り組みへの企画・運営についての具体的指導・支援する。</p> <p>②低学年（3年生・2年生）が、国試を意識した取り組みができるよう支援する。</p> <p>③模擬試験結果から要支援学生を検討し、主体的に学習できるよう指導・支援する。</p> <p>2) 学習環境の整備</p> <p>①後期には「国試学習」のための教室を確保し、学習環境の調整を図るとともに、学生たちが主体的にグループ学習に取り組めるよう支援する。</p> <p>②Webでの学習環境が整うよう支援する。</p>
主な活動内容
<p>a. 目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）：国家試験対策委員会会議記録</p> <p>第105回看護師国家試験合格率93.3% 新卒：94.3%（全国89.4%）（昨年度本学96.4%）</p> <p>第102回保健師国家試験合格率80.1% 新卒：88.5%（全国89.8%）（昨年度本学100%）</p> <p>1) 学生の主体的な取り組みの支援</p> <p>4年次の学生国試対策委員の主体性を尊重し、早期から具体的な模擬試験・補習学習を企画し、年間模擬試験を看護師：8回、保健師3回と昨年より一回ずつ多く実施した。昨年度に続き今年度も、模擬試験の結果を参考に、毎回、模擬試験の結果を見て学習が低迷している学生を抽出し、教員の国試対策委員が7～8月に90分×11回の補講、12月に面接を行い、12月～1月には14回の過去問学習会を催し、合格レベルに達するよう重点指導に当たった。重点指導の呼びかけに応じた7割強の学生は無事合格した。学習低迷者の多くは、もともと試験対策が不得意なうえ、看護研究や実習との両立が図れず、国試対策が遅れる傾向が強い。今回不合格になった学生のうち2名は、実習や研究のため国試の準備開始が大幅に遅れ、必修科目は合格レベルに達したが、一般状況問題に対する学習時間が十分取れなかった。重点指導の対象ではあったが、ほとんど参加できなかった1名と、既卒の不合格者は、両者とも学習低迷の背景に、教員の介入が困難な学習環境があった。重点指導の対象にはならなかった学生の中からも、2名不合格者がでた。模試の結果を受けて学習低迷者の選別を行うが、『学習低迷者』枠組みを見極めることの困難さが露呈された。自己採点結果から領域別に正解率を分析すると、成績が低迷する学生の特徴として、医学基礎の知識不足が、病態生理から看護までの統合的理解の不足につながり、成績の伸び悩みにつながることが再度分析された。</p> <p>保健師国家試験については、保健師課程選択制導入後第1期生の合格率は100%で、新制度導入の成果をみた。しかし以前の統合カリキュラムで受講した新卒1名と既卒生を含む6名では、合格したのは1名のみ、合格率16.7%と低迷し、本学全体の合格率（82.1%）は、全国平均より下がった。</p> <p>2) 学習環境の整備</p>

後期には「国試学習」のための教室を確保したが、時間帯や日によって場所が変わるためか活用した学生は全体の約5%と少なかった。アンケート結果によるとハローホールや図書室で学習した学生が39%と37%と圧倒的に多かったが、黙々と、または友人と有意義に学習に励む学生がいる一方、図書室の暖房が不十分だとか、ホールの騒音や照明の悪さに不満を記述した学生も数名いた。来年度に完成する自己学習室に期待をかけた。なお、ウェブを利用した学習は、昨年より周知の回数を増やし広報に努めたが、最終的に活用した学生は21人と昨年度と比較して10人以上の減少を見た。学生が無料のアプリをスマホで使い勝手のいいものを選んだり、参考書や問題集を好んで使う一方、ウェブでの利用が「使いにくい」という意見があり、医学書院のウェブ利用についての認識は浅く、利用状況は昨年度よりさらに悪くなった。もっと学生が気軽に使えて有効なメディア媒体の転換を検討していく時期にある。

目標達成度の評価：1. できた ②. ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった

b. 委員会・組織の主要な活動内容（根拠資料・記録）：国家試験対策委員会記録

1) 学生の国家試験対策委員への指導・助言

①年間学習計画の策定に向けての指導・助言②効果的な模擬試験実施のための助言・援助

2) 学習支援：①3年生・4年生へのガイダンスによる国家試験に向けての学習への動機づけ②学習会の企画・実施：模擬試験結果を分析し、国家試験対策委員・専任教員が講師となり実施した。③個別指導：模擬試験結果を分析し実施した。④学内模試の企画・実施。

次年度の課題

次年度の課題

1) 学生の主体的な取り組みの支援

2) 学習環境の整備 学生たちが主体的に学習に取り組めるよう多様な環境の整備を考える。

c. 口腔保健学科・国家試験対策委員会 委員長 福田 昌代

本年度の課題

①模擬試験成績不良者の受験に対する対応について

②学生への学習支援について

③成績管理データの活用

本年度の活動方針・目標

①国家試験合格100%を目指す。

②学生の自主的学習を促す。

③1月末の時点で全員が合格ラインを超えるように支援する。

主な活動内容

a. 目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）：

・100%合格を目指し、業者模擬試験を昨年度より4回増やし11回実施した。また学内模擬試験も実施し学習成果の確認を頻繁に行えるように時間割を工夫した。

- ・模擬試験結果をすぐに学生に渡し成績の現状把握を行うように指導した。また成績不良の学生については個別に面談を行い、学習方法の確認を行い必要に応じて改善を促した。
- ・12月末の時点で成績不良の学生には保護者を交えて面談を行い、学習を促した。
- ・学生の自主的な学習を促すため今年度より学生国家試験委員を選出し学生リーダーとして積極的に学習を促す工夫を行った。ホワイトボードを使用し目標設定や励まし、学習のポイントなどを共有することとした。また、国家試験対策に関する話し合いの取りまとめを行ってくれた。
- ・1月末での合格ライン以上の目標に対して、2名以外は全員合格ラインに達していた。しかし問題の難易度によって不安な状態であったため成績不良の学生については個別に勉強会を開催し、学習力の向上に努めた。

目標達成度の評価：1.できた 2.ほぼできた 3.あまりできなかった 4.できなかった

b. 委員会・組織の主要な活動内容（根拠資料・記録）：

①委員会の開催

月1回（第4月曜開催）

②国家試験ガイダンスの実施

第1回：4月6日（月）国家試験受験について、年間スケジュールについて

第2回：9月29日（月）官報、後期スケジュールについて

第3回：12月19日（金）国家試験受験案内、願書記入方法説明

第4回：12月22日（月）願書記入

第5回：2月27日（金）国家試験受験に対する心構え、受験票配布

第6回：3月4日（水）自己採点、免許申請について

③業者模擬試験の学内実施（11回）

④校内模擬試験の作成（過去国家試験問題ならびに模擬試験問題を改変）

⑤教員オリジナル模擬試験の実施とそれを活用した補習の実施

⑥成績不良者の三者面談の実施（12月18日22日）

⑦DES 歯学教育スクール夏期講習会学校開催：8月4日（火）

次年度の課題

①過年度生の学習支援

学習期間が成績不良により延長している学生に対する支援を早期に始める。

②基礎科目の成績向上

解剖学、生理学、生化学、病理学、微生物学、薬理学の学力を向上させる

③学生の主体的な学習方法の検討

自習学習教室の確保

学生国家試験委員の活動の活性化

国家試験対策におけるポートフォリオ導入の試み

-模擬試験結果の自己評価、振り返りシートの活用-

個々の学生にあった学習方法の提示

活動内容の補足

委員会報告

第1回：4月27日（月）

＜報告事項＞1. 確認テストの結果について、2. 第1回校内模擬試験実施について、3. 参考書の購入について、4. 年次報告について

＜審議事項＞1. 今年度の委員会方針について、2. 平成27年度国家試験対策スケジュールについて、3. 模擬試験後の自己学習について、4. 委員会開催日について

第2回：5月25日（月）

＜報告事項＞1. 現状報告、2. 前期国家試験対策予定について

＜審議事項＞1. 後期補習予定について

第3回：6月22日（月）

＜報告事項＞1. 現状報告、2. 前期国家試験対策予定について

＜審議事項＞1. 夏期課題について、2. 後期補習専任教員の担当時数について、3. 専任教員模試出題内容について

第4回：7月27日（月）

＜報告事項＞1. 現状報告、2. 夏期講座について

＜審議事項＞1. 後期特別時間割案について、2. 前期卒業者の国家試験対策受講について

第5回：9月25日（金）

＜報告事項＞1. 現状報告、2. 国家試験日決定に伴う時間割変更について

＜審議事項＞1. 後期模擬試験監督について、2. 後期模擬試験内容について、3. 第2回国家試験ガイダンスについて

第6回：10月26日（金）

＜報告事項＞1. 現状報告

＜審議事項＞1. 成績不良者の対応について、2. 補習時の座席について

第7回：11月16日（月）

＜報告事項＞1. 現情報報告、2. 専任教員模試について、3. 補講の座席について

＜審議事項＞1. 成績不良者について、2. 第3, 4回国家試験ガイダンスについて

第8回：12月22日（火）

＜報告事項＞1. 模試結果について、2. 個人面談について、3. 願書記入について

＜審議事項＞1. 1月以降の5限目補習の必要性について

第9回：1月25日（月）

＜報告事項＞1. 平成28年度卒業予定者の模擬試験実施について、2. 補習の状況について

＜審議事項＞1. 模試の結果について（成績不良者の対応について）、2. 印刷機の件

第10回：2月22日（月）

＜報告事項＞1. 第25回歯科衛生士国家試験引率の件、2. 国家試験対策スケジュールの確認

＜審議事項＞1. 模試の結果について（成績不良者の対応について）、2. 第5, 6回ガイダンスについて

第11回：3月29日（火）

＜報告事項＞1. 第25回歯科衛生士国家試験結果について、2. アンケート結果について

＜審議事項＞1. 平成28年度卒業予定者対象第1回国家試験ガイダンスについて、確認テストについて、2. 年度総括

d. 看護学科通信制課程・国家試験対策委員会 委員長 山岡 紀子

本年度の課題
新卒者・既卒者ともに前年度を上回った合格率の更なる向上を目指す取り組みの実践。
本年度の活動方針・目標
1. 現役生が本課程の学修を進めながら、早期より自発的に国試対策するための支援を行う。 2. 既卒者が自らを振り返り、行動目標を立て実践に移し継続するための支援を実施する。
主な活動内容
<p><u>a. 目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録：通信制課程会議録）</u></p> <p>1. 昨年度より入学式の午後に学修説明会を実施し国試対策についての説明を行っているが、今年度は東京会場でも実施し、学修計画と並行して国試対策を進める具体案を提示するとともに、早期からの取り組みの必要性を根拠と共に示した。また、4～6月の概論スクーリングや7～10月の実習スクーリングでは、各教員がそれぞれの科目に関する国試対策について説明した。さらに、実習スクーリング終了直後の10月中旬に新たに必修模試を実施した。模試を受験して学力を確認し、同日午後に解説DVDを視聴して復習するとともに、今後の具体的な勉強法の説明を受けることで、学生はこれから何をどうすれば良いのかを明確にすることができたと考える。</p> <p>2. 第104回国試不合格者には、第105回国試受験に向けた文書を国試対策資料と共に郵送した。また、課程長と国試対策委員が全員に電話連絡し学習相談を実施した。さらに、本課程で行う国試対策事業の案内を、現役生と同様に送付した。今年度は、初めての取り組みとして5月に既卒者のための国家試験対策オリエンテーションを実施した。既卒者に特化した国試対策と具体的な学習方法の説明に加え、教員を交えた学習交流会を行ったことで、参加者全員が自らを振り返り目標を発表する等前向きな姿勢がうかがえた。しかし、参加者は既卒者106名中19名と少なかつたため、次年度以降の継続には再考を要する。 目標達成度の評価：1. できた ② ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった</p> <p><u>b. 委員会・組織の主要な活動内容（根拠資料・記録：通信制課程会議録）</u></p> <p>1) 国家試験対策オリエンテーション（神戸）：4月3日（金）・5日（日） （東京）：4月11日（日）</p> <p>2) 既卒者のための国家試験対策オリエンテーション：5月23日（土）19名</p> <p>3) 解剖と疾患と看護がつながる講座：〈循環器〉6月28日（日）70名 〈呼吸器〉7月5日（日）57名 〈消化器〉7月11日（土）60名</p> <p>4) 専門基礎模試および解説DVD視聴：10月10日（土）・11日（日）74名</p> <p>5) 必修模試（+解説DVD視聴&学習方法説明会）：10月17日（土）・18日（日）78名</p> <p>6) 国試ベーシック過去問講座（3日間）：10月31日（土）～11月2日（月）83名</p> <p>7) 社会保障制度DVD上映会（神戸）：11月10日（火）・12日（木）・15日（日）74名 （東京）：11月14日（土）6名</p> <p>8) 全国模試（総合力判定）：11月28日（土）・29日（日）97名</p>

9) 必修予想 200 問特訓講座 (2 日間) : 12 月 19 日 (土) ~12 月 20 日 (日) 73 名

次年度の課題

第 105 回看護師国家試験は、新卒者の合格率は 79.3%であり、全国の 2 年課程通信制学校新卒者合格率 (77.1%) および本学の昨年度新卒者合格率 (75.5%) を上回った。入学年度別にみると、最も合格率が高かったのは 13 年度生で 82.6%、14 年度生は 76.0%、12 年度生は 69.2%であり、在籍年数による合格率の差も昨年と比較して 8.6%小さく、在籍期間が長いほど合格率が低いこれまでの傾向とは異なる結果を示した。在籍 3 年目以上の学生がモチベーションを維持して学習を続けるための支援が功を奏したと考えられるが、今後は 2 年で卒業する学生が計画的かつ早期に単位修得を完了し、国試対策のための時間を確保できるような支援の強化が必要である。

既卒者の合格率は 26.6%と昨年度 (42.5%) を大幅に下回り、今年度の既卒者合格率の全国平均 (26.5%) と同様の結果となった。既卒者のための国家試験対策オリエンテーション参加者の合格率は、26.3%にとどまった。受験回数別にみても、2 回目受験者は 38.9% (昨年度より 16.7%↓)、3 回目受験者は 25.0% (昨年度より 12.5%↓) と厳しい結果となった。第 104 回、105 回と現役合格率が上昇し続けているが、裏を返せば、在籍時の国試対策や学修支援を強化してもなお合格できなかった学生が既卒者となっていることを示している。このことは、今年度は従来よりも既卒者への国試対策を強化したのにもかかわらず合格率が低下したことの要因と考える。今後既卒者の合格率を向上させるためには、これまでの取り組みの中で甘かった部分を改め、既卒者が「次は必ず合格する！」と覚悟を持って国試対策に取り組めるような働きかけが必要であると考えます。

以上より、1) 「2 年で卒業&2 年で国試合格」するための支援の強化が課題といえる。また、2) 既卒者が真剣に国試合格を目指して取り組むための支援も課題である。

16. 臨地実習委員会 年間活動報告

a. 医療検査学科・臨地実習委員会 委員長 岩井 重寿

本年度の課題
<ul style="list-style-type: none">・ 臨地実習の準備から実施へ向けて円滑に遂行する。・ 学内修得スキルと臨地実習の間での総合的教育効果の検討を可能な限り進める。・ 施設での感染予防対策に対して多様化かつ検査項目の増加が予測されるため実施状況に対応部署から早期に情報収集する。
本年度の活動方針・目標
感染予防対策の状況や実習配属先など各種運用にくわえて、前年度調査した資料をもとに臨地実習に向けた学内教育効果の取り纏め、実習で修得した知識の4年次での活用、さらに実習に支障をきたさぬよう状況変化に即した実習施設の確保を行う。当該年度を含めた3年間を対象に臨地実習の運用を包括的にすすめる。
主な活動内容
<p>a. <u>目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）：</u></p> <ul style="list-style-type: none">・ 定例委員会10回と持ち回り委員会1回を開催して学科、学生、および実習施設へ反映させた（委員会議事録）。・ 学生には4月の臨地実習ガイダンスで感染予防登録手続きの確認、医療現場におけるマナー、倫理、接遇などを指導し、教授会での臨地実習承認後の配属施設開示を経て、11月に第二回ガイダンスを開催することでワクチン接種等の書類準備状況の確認を含めた臨地実習に臨む詳細な準備を整えた。（学科会議事録・配布資料、学生配布資料、教授会議事録、キャリア支援課保管資料）・ 臨地実習事前打合せ会の開催で前年度の反省点や今年度の方向性を確認・討議した。（学科会議事録・配布資料）・ 新しい試みとして前年度の学生による実習中作成問題をM4時期に応用可能にするためデータを取り纏めの上、学生がmanabaで閲覧可能とした。（manaba、学科会議事録）・ 学内授業内容と医療現場の各部門間の相関を図るため学生による評価調査を実施し、取り纏めた。（学科会議事録・配布資料）・ 円滑な実習に向けて、「実習の記録」をはじめとする学生持参資料や巡回教員の施設訪問用資料を取り纏め準備した。（学科会議事録、配布資料）・ 今年度の新規臨地実習施設に加え来年度に向けた準備として施設訪問で4病院から内諾をいただいた。（学科会議事録） <p>目標達成度の評価：1. できた ② ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった</p> <p>b. <u>委員会・組織の主要な活動内容（根拠資料・記録）：</u></p> <ol style="list-style-type: none">1. 委員会開催：定例10回、持ち回り1回（委員会議事録）2. ワクチン接種状況のキャリア支援課での確認と学生指導（キャリア支援課保管資料）3. 実習配属先の立案と学生開示（委員会議事録、学科会議資料・議事録）4. 臨地実習事前打合せ会（委員会議事録、学科会議事録、配布資料）5. 学生ガイダンスを2回実施（委員会議事録、学科会議事録、配布資料）6. 学生作成問題のmanaba掲載（委員会議事録、manaba、学科会議事録）

7. 実習期間中の施設への対応（委員会議事録、学科会議議事録）
8. 実習評価の取り纏め（臨地実習評価通知表）
9. 臨地実習施設の開拓（委員会議事録、学科会議議事録、出張伺・復命書）
次年度の課題
1. 臨地実習委員会での運用項目とその内容の見直しに向けた問題点の洗い出し
2. 学生への各実習施設の情報供与・引継ぎによる円滑な実習遂行
3. 実習施設数の確保

b. 看護学科・臨地実習委員会 委員長 生島 祥江

本年度の課題
<ul style="list-style-type: none"> ・平成28年度の実習計画案を、早期から、実習施設、看護学校他関連諸施設との調整を行い、学生の学習成果が得られるように立てる。 ・課題別総合実習施設の施設確保に努力する。 ・実習施設との臨地実習指導者連絡会や研修会を通して、指導者の資質維持・向上に取り組んでいく。特に、研修会に参加いただけない施設の理由を明確にして参加していただけるように対策を立てる。 ・学生の感染症の抗体価及びワクチン接種状況確認の年間計画を施行する。
本年度の活動方針・目標
<p>臨地実習に伴う問題を明らかにしながら、臨地実習が効果的に実施できるように取り組むとともに、次年度以降の実習計画に反映させていく。臨地実習指導者連絡会および研修会を通して、指導者の資質維持・向上に取り組んでいく。</p>
主な活動内容
<p>a. <u>目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）：</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・毎月第3月曜日4時限を定例として委員会を開催した。 ・次年度の臨地実習計画調整を前年度末から施設依頼し他校との調整を経て、年間の実習計画案を立てた。 ・臨地実習において発生したアクシデント、インシデントを定例委員会で報告し、原因と対処を確認した。 ・臨地実習指導者連絡会は、臨地実習科目の目的・目標、内容の確認と学生の実習後の目標到達状況を確認するために、実習施設ごとに適宜開催し、臨地実習指導者との連携を図った。 ・臨地実習指導者研修会について年度初めから検討し、平成28年3月4日、テーマ「学生の主体的な学びの支援を考える」のもと、保健科学部看護学科学科長 長尾厚子教授の基調講演、グループワークを実施し、研修会を終えた。研修会に参加していただけるよう、看護部を通じて病棟看護師の目に留まるように配布していただいた。 <p>尚、詳細は看護学科臨地実習委員会議事録参照</p> <p>目標達成度の評価：1. できた 2. <u>ほぼできた</u> 3. あまりできなかった 4. できなかった</p> <p>b. <u>委員会・組織の主要な活動内容（根拠資料・記録）：</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・毎月第3月曜日4時限を定例とし、今年度は11回委員会を開催した。

- ・平成28年度の臨地実習計画案を2月学科会議にて報告した。
- ・各臨地実習科目の計画案を委員会で検討後、学科会議で審議し、教授会で決定後実施した。（学生配置については学科会議で承認後実施した。）
- ・臨地実習指導者連絡会を関連臨地実習科目に応じて企画・運営した。臨地実習中は、実習施設と随時連絡調整した。
- ・3月4日実施した臨地実習指導者研修会を企画・運営した。（学外参加者：45名、学内参加者：29名）昨年度参加していただけなかった施設からの参加も見られた。
- ・臨地実習において発生したアクシデント、インシデントを委員会で共有し、学内授業も含めて実習指導に反映させた。
- ・看護学科教員全員で学生指導する看護活動基礎実習と課題別総合実習の企画を行った。臨地実習要綱、看護活動基礎実習要領の内容を見直し一部修正した。
- ・学生の感染症の抗体価及びワクチン接種状況確認のための年間計画に基づき、委員で確認作業を行い、臨地実習の運営がスムーズにいった。

尚、詳細は看護学科臨地実習委員会議事録参照

次年度の課題

- ・平成29年度の実習計画案もこれまでと同様に、早期から、実習施設、看護学校他関連諸施設との調整を行い、学生の学習成果が得られるように立てる。
- ・これまでと同様に、適宜実習施設との臨地実習指導者連絡会を開催すること、そして研修会を通して、指導者の資質維持・向上に取り組んでいく。研修会については、看護部に広報活動を行い、臨地実習指導者の参加を促していく。
- ・学生の感染症の抗体価及びワクチン接種状況報告を求める施設が増えている。入学直後の臨地実習に向け、キャリア支援課と協力して新入生の確認作業を施行するとともに、在校生については年間計画に基づく確認作業を継続する。

c. こども教育学科・臨地実習委員会 委員長 井上 文雄

本年度の課題

- ・完成年度を迎えるにあたり、将来の職種及び修得資格を見据えた適切な実習ができるよう4年間を見通した実習の流れや内容を検討する。
- ・今年度初めて行う課題別実習の実施方法・実習先などについて実施を踏まえ検討を加える。
- ・実習実施にあたり、心構えや取得単位に問題がある学生に対しての指導・助言の在り方を検討する。
- ・複数担当者による実習については今年度と同様、担当者を中心にスムーズに実施できるよう準備・計画をする
- ・それぞれの実習における事前指導等の調整を図り、共通した実習指導が行えるよう連携を深める。

本年度の活動方針・目標

- ・4年間の実習を踏まえ、適切な実習が行えるよう計画・準備を行う。また、課題別実習がスムーズに行えるよう計画・準備をする。

<ul style="list-style-type: none"> ・実習施設との連絡を密にし、充実した実習が行われるための内容の確認を行う。 ・専門実習科目履修細則の点検、見直しをすすめる。 ・28年度より実施される新カリキュラムに合わせた専門実習科目履修細則の検討を行う。
<p>主な活動内容</p>
<p>a. <u>目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）</u>：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・4年間を見据えた学年ごとの実習計画表を作成し、資格、免許状取得に向け4年間の実習を見通した活動を進めた。 ・課題別実習では、教育委員会、施設等と連携を深め実習を行った。また、活動報告書や出席表を準備し学生の活動がスムーズに行えるようにした。さらに、幼稚園、保育所、施設、小学校実習を実施するうえで様式等そろえられる部分については統一を行った。 ・実習実施に当たり、事前指導の欠席者に対しては別途指導した。また、履修細則にある単位未修得者に対して、今後の心構えなどについて個別に面談し指導を行った。 ・複数担当者で実施する基礎実習Ⅰ、基礎実習Ⅱについては、昨年度に引き続き、担当者を中心に連絡・相談を密にして順調に実施することができた。 ・現行の専門実習科目履修細則の点検、見直しをすすめ改訂を行った。 ・28年度より実施される新カリキュラムに合わせた専門実習科目履修細則を新たに作成し、学科会議で提案して共通理解を行った。 ・各実習における事前指導の統一について、共通した事前指導を行うための打ち合わせが十分行えなかった。次年度への課題としたい。 <p>目標達成度の評価：1. できた ②. ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった</p> <p>b. <u>委員会・組織の主要な活動内容（根拠資料・記録）</u>：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・臨地実習委員会9回（27年 4/2、6/22、7/27、8/31、9/28、10/26、11/30、28年 1/25、2/29） ・月1回月曜日を定例会としたが、委員全員の都合のよい日を設定するのが難しかった。 ・1名の委員を新たに加え、施設実習担当1名、保育所実習担当2名、幼稚園実習担当2名、小学校実習担当3名、教務課事務担当1名が役割を分担しながら実施した。 ・今年度新たに実習担当室を設置した。また、担当者を配置し提出物、書類などの管理を行った。各実習とも提出先が同じになったので良かった。 ・実習委員会で検討した事案については、学科会議で提案し、学科教員全員が共有できるよう共通理解を行った。事前に実習委員会で検討することにより、学科会議での提案がスムーズに行えた。 ・＜詳細はE科臨地実習委員会議録参照＞
<p>次年度の課題</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・新カリキュラムが実施されるにあたり、1年生からの実習実施に向けた計画を立案するとともに、実施後の改善点等について検討する。 ・実習担当室の設置により、各実習がより効率的に行えるように実習室を中心とした全体の流れを構築する。 ・それぞれの実習における事前指導等の調整を図り、共通した実習指導が行えるよう連携を深める。

d. 口腔保健学科・臨地実習委員会 委員長 原 久美子

本年度の課題
<p>1) 前年度からの申し送り事項の以下のことを行う</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 効果的な実習がおこなえる施設の選択と、臨地実習指導者の本学の教育への理解を深めていただくように努める。 ・ 年間スケジュールに基づいて、滞りなく臨地実習がおこなえる体制の充実を図る。 <p>2) 臨地実習要綱・要領を整備する。</p> <p>3) 学生の感染症の抗体価及びワクチン接種状況確認方法等について整備する。</p>
本年度の活動方針・目標
<p>1) 年間スケジュールを作成し、滞りなく臨地実習が実施できるようにする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 常盤大学短期大学部歯科診療所（以下、学内歯科診療所）を臨地実習場として明確に位置づけ、実習の充実を図る（実習日数の増加）。 ・ 定例臨地実習委員会を開催し、委員全員の意見が臨地実習に反映できるようにする。さらに、学科会議に報告し、学科教員全体の意識統一を図る。 ・ 臨地実習指導者会議を開催し、当科の教育方針を臨地実習指導者に理解していただく。 ・ 新規実習施設を開拓し、全学生が効果的な実習をおこなえるよう環境を整える。 <p>2) 臨地実習要綱・要領の内容を検討し、表記方法の統一を図り学生に分かりやすくする。</p> <p>3) 感染症の抗体価及びワクチン接種状況確認方法を他学科と同じシステムで実施できるようにする。</p>
主な活動内容
<p>a. 目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）：</p> <p>1) ・ 年間スケジュールを作成し、委員および臨地実習担当教員に周知したことで、円滑に準備が進み、問題なく臨地実習をおこなうことができた（臨地実習会議議事録）。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 帰学日の振り返り指導に KJ 法を試み、良い感触が得られたため、来年度、本格的に導入する。 ・ 学内歯科診療所の学生実習日数を検討し、来年度は、現状の3日間を7日間実施できるようにした。 ・ 臨地実習委員会として、診療所運営会議に学内歯科診療所の臨地実習内容の充実を申し入れた。 ・ 学内歯科診療所で円滑な臨地実習を行うために、診療所運営会議に臨地実習委員会より委員として1名受け入れて頂き、連携したい旨を申し入れ、了承を得た。 ・ 臨地実習委員会を定期的（1回／月）に開催し、急を要す場合はメール会議も行った。 ・ 臨地実習指導者会議を2回開催した（臨地実習指導者会議議事録）。 ・ ときわ病院病棟実習責任者と実習内容や同意書の整備を行った。 ・ 学生数に即して施設と調整を行い全学生が滞りなく効果的な実習を行うことができた。 <p>2) 臨地実習要綱・要領については、各科目責任者が相互に見直し、表記方法の統一を図り、学生にも、実習指導者にも分かりやすいもののができた（H27-28 臨地実習要綱、H27 要領）。</p> <p>3) 感染症の抗体価及びワクチン接種状況確認方法を他学科と同じシステムで実施できるようにし、確認方法と確認時期のマニュアルを作成した。0科担当教員も新たに設定した（臨</p>

地実習会議議事録)。

目標達成度の評価：1. できた 2. ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった

b. 委員会・組織の主要な活動内容（根拠資料・記録）：

1) 臨地実習委員会

- ・臨地実習会議 毎月第3月曜を定例として12回開催し、会議内容は、学科会議で報告し周知した（臨地実習会議議事録）。
- ・診療所運営会議に積極的に働きかけた。
- ・巡回指導教員には、巡回方法および評価方法について緊密に連携を取った。
- ・学生には、毎回の実習開始前に全体実習前指導、終了後には、実習場ごとにグループワークを行い発表形式で実習成果を確認した。また、実習期間中の帰学日には、学生の実習状況の把握のために各科目責任者・巡回指導者が面談方式で指導を行った。
- ・臨地実習要綱および要領の整備を図った。
- ・キャリア支援課と連携を図り、感染症の抗体価及びワクチン接種状況確認方法の整備を行った。

2) 臨地実習指導者会議

- ・2回開催（平成27年8月20日・平成28年3月24日）（臨地実習指導者会議議事録）
第1回の会議では、実習の概要説明に加え、各科目担当者から本学科の教育内容を説明後、「事故報告方法・手続き、医療安全」と題して講義を行い、本学の教育内容について理解を頂いた。さらに講義内容を深めるために、「臨地実習現場における医療安全対策」というテーマで意見交換会の時間を設けた。
第2回の会議では、実習の概要説明に加え、各科目担当者から本学科の教育内容を説明後、「歯科衛生過程について」と題して講義を行い、歯科衛生過程の考え方が歯科衛生士教育の基盤であり、本学がこの考えに基づいて教育していることの理解を頂いた。さらに、「臨地実習における学生指導の創意工夫」というテーマで意見交換会を行った。各実習場からの報告に様々な発見があり実り多い交換会となった。
- ・ときわ病院実習責任者（看護師長・担当歯科衛生士）と打ち合わせ会議を持ち、病棟実習マニュアルとそれに伴う同意書の作成を行った。

次年度の課題

- 1) 常盤大学短期大学部歯科診療所における臨地実習の充実を図る（増加した日数の実習内容）。
- 2) 帰学日指導の充実を図る（KJ法による振り返りを定着）。
- 3) 年間スケジュールに基づいて、滞りなく臨地実習がおこなえる体制の充実を図る。
- 4) 感染症の抗体価及びワクチン接種状況確認システムの適切な運用を図る。

e. **看護学科通信制課程・臨地実習委員会 委員長 中野 順子**

本年度の課題

- ・実習の為の健康診断の実施時期と内容の検討
- ・関東地域の実習病院・施設の確保の継続

<ul style="list-style-type: none"> ・関東での実習事前オリエンテーション実施後の内容検討と充実に向けた取り組み
<p>本年度の活動方針・目標</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・健康診断書の提出時期の見直しとワクチン接種の徹底 ・関東地域（東京・千葉・神奈川・静岡）の領域別実習施設の確保に向けた取り組みの推進 ・関東での実習事前オリエンテーション（基礎看護学・看護マネジメント及び領域別看護学実習）の時期と方法の見直しの検討
<p>主な活動内容</p>
<p>a. <u>目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）：</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・感染症検査の施設への情報提供の増加により、健康診断書の提出時期を早め、内容を文書と口頭で行ったが時期による問題はなかった。結核検査では項目を追加した。ワクチン接種後の診断書の提出を求めたが、抗体価低値のワクチン接種の徹底に課題を残した。 ・関東地域での学生の領域別人数と受け入れ数を早期より情報共有し、新規施設開拓及び受入数依頼の増減を検討し確保した。関東地域での実習施設はほぼ充足したが、今後エリア全体の学生数増加が予測されるため施設確保に向けた取り組みの継続が必要。 ・関東での基礎看護学・看護マネジメント実習事前オリエンテーションを従来の12月より10月実施と早め実施した。レポート取り組みの動機付けでは評価できたが、実習開始（2月～）までの期間が長く、実習直前の問い合わせが多くあり、今後検討が必要。 ・遠隔地（関東）での領域別看護学実習事前オリエンテーションについて、内容・方法を見直し、本学実施と同等な内容を提供するための工夫を検討し、平成28年4月実施予定。 <p>目標達成度の評価：1.できた ②ほぼできた 3.あまりできなかった 4.できなかつ</p>
<p>b. <u>委員会・組織の主要な活動内容（根拠資料・記録）：</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・年間を通し、毎月1回定例で委員会を開催し、活動内容の検討・推進・運営にあたった。 ・4月：各領域別実習事前オリエンテーションの実施、運営。（平日と日曜日の2回） 年間スケジュールに基づき、委員会の開催日と活動内容を確認・決定した。 ・5月～6月：実習配置の為の準備作業と配置作業の実施及び資料の送付作業の実施。 ・7月～10月：施設実習前オリエンテーションに同行。実習期間中の学生・施設対応の役割当番の実施。（実習日別施設ごと学生一覧ファイルの活用、連絡メモによる伝達） ・10月：基礎看護学・看護マネジメント実習事前オリエンテーションの実施。（本学3回、東京1回） ・10月～12月：次年度の実習の依頼と調整の為の施設訪問の実施138施設。 ・12月～2月：エリア別実習枠と領域別学生予定数より次年度の新規施設への依頼の実施。 ・1月：領域別実習終了後の施設向け報告書（実習のまとめ）の作成と送付。（122施設） ・年間を通し、要請のあった施設の指導者会への参加。（12施設）
<p>次年度の課題</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・遠隔地での実習事前オリエンテーション（各領域別）実施後の評価及び検討 ・健康診断書のワクチン接種実施の徹底の工夫 ・基礎・看護マネジメントオリエンテーションにおける実習直前のフォロー体制の検討 ・学生数に応じた実習施設の確保の継続

17. 通信教育委員会 年間活動報告

委員長 長尾 厚子

本年度の課題
1) 受験者数の確保 ①関東地方の受験者数の確保 ②関西地方の受験者数の確保 (特に兵庫県内) 2) 実習施設の確保 ①関東地方および母性・小児の実習施設の確保 3) 国家試験合格に向けての支援の強化
本年度の活動方針・目標
<活動方針・目標> 1) 受験者数の確保に向けて、関東方面の広報活動を強化し広域的な受験者確保に努める。 ①関東地方は、事務局・教員との連携のもと広報活動を強化する。 ②関西地方(特に兵庫県内)の広報活動を強化する。 2) 実習施設の確保 ①関東地方の学生の実習施設を確保する。 ②母性・小児看護学領域の実習施設の確保 3) 国家試験合格のための支援を強化する。 ①国家試験対策委員会の活動を支援する。
主な活動内容
a. 目標達成に向けた活動内容 (根拠資料・記録) : 通信教育委員会議事録 1) 受験者数の確保 昨年度は145名であったが今年度は161名であった。今年度より自己推薦入試を2回から5回に増やし、さらに早期からの受験を可能にした。その結果受験増につながったと推測できる。自己推薦入試での受験生は昨年度は58%であったが今年度は65%となり、次年度も自己推薦入試での応募者に期待したい。また、関東地方の広報活動も神奈川・東京・千葉・埼玉・静岡県など広域にわたりリビング誌等の掲載、看護協会への説明会等を実施し、東海・信越を含むと東京会場での受講者は50名近くなる。次年度は東京会場開設3年目を迎え、関東地方の知名度が徐々に上昇してきたことがうかがえる。一方、関西地方特に京都・滋賀方面の受験者が少ないため、今後の関西地方の受験者の確保のための広報の工夫を考える必要がある。 2) 実習施設の確保 昨年度から関東地方の入学生の実習が開始し、さらに実習施設を20施設(全実習施設157施設)確保した。今後、関東地域の学生の増加による実習施設の確保が課題となる。特に母性・小児の領域の実習施設の確保には困難をきたしている。 3) 国家試験合格のための支援 国家試験対策委員を中心に、模擬試験の実施・学習会の開催等、合格のための支援を実施している。105回看護師国家試験合格率は新卒79.3%(昨年75.5%)、既卒26.6%(昨年44.1%)であった。新卒の合格率は毎年上昇しており、逆に既卒の合格率が低迷している。

今後も国家試験対策委員を中心に、支援の継続が課題である。

目標達成度の評価：1. できた ②. ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった

b. 委員会・組織の主要な活動内容（根拠資料・記録）：通信教育委員会議事録

通信教育委員会は毎月第2月曜日を定例にし、平成26年度は11回開催した。構成メンバーは、通信教育委員長・通信制課程の専任教員と事務職員である。

1) 教育課程及び単位認定に関する事項

・既修得単位の認定について

放送大学では毎年開講科目の変更や追加があるため、入試要項作成に向けて新しく開講された科目を確認し既修得科目を検討、追加した。また、他大学・専門学校での既修得科目の認定についても教授会での審議事項として提出するための審議を行った。

2) 授業、試験および単位の認定に関する事項

授業については、時間割および会場についておよび試験の実施について検討した。

3) 入学試験・広報活動に関する事項

一般入試・推薦入試に加えて、受験生の確保に向けて自己推薦入試を昨年度より3回追加し、計8回の入学試験を実施した。広報活動は、看護協会の進学説明会に出席し、学校案内・資料配布を行った。また、関東方面をはじめ、地方紙などの紙面広告を幅広く行った。今年度資料請求数は676と昨年度(511)より増加傾向にある。関東方面からの資料請求数が増えており、広報活動の成果がみられる。

4) 入学・卒業・退学・休学・除籍等学生の身分に関する事項

卒業認定に関する通信制課程原案、および、退学・休学・除籍・復学についても教授会の審議に向けて準備した。

5) 学生の賞罰に関する事項

今年度から「水田亘記念賞」が廃止となったため受賞者はいなかった。

6) スクーリングおよび学外実習に関する事項

スクーリング授業科目・実習および実習スクーリングの実施に当たって、地方会場（京都・東京）の予約が1年前であることから、次年度の時間割について検討した。

7) 国家試験対策

模擬試験の実施、受験手続、国家試験に関する事項について検討した。

8) その他

①毎月のレポート提出状況の報告：全科目のレポート提出状況の把握。

②再提出レポート、年度替わりのレポートの取り扱いについて確認。

次年度の課題

1) 受験者数の確保

①関東地方の受験者数の確保

②関西地方の受験者数の確保（特に兵庫県内）

2) 実習施設の確保

①関東地方および母性・小児の実習施設の確保

3) 国家試験合格に向けての支援の強化

18. 遺伝子組換え実験安全管理委員会 年間活動報告

委員長 澤田 浩秀

本年度の課題
平成 23 年度に「神戸常盤大学遺伝子組換え実験安全管理規程」が制定され、さらに遺伝子組換え実験安全管理委員会が設立された。本年度は、新たな遺伝子組換え実験計画に対する申請書の審査、遺伝子組換え実験教育訓練を実施した。
本年度の活動方針・目標
1. 新たな遺伝子組換え実験計画に対する申請書の審査 2. 遺伝子組換え実験施設としての緑風館 5 階に立ち入る教職員および立ち入る可能性のある学生（医療検査学科）に対する遺伝子組換え実験教育訓練（講習会）の実行
主な活動内容
a. <u>目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）</u> ： 1. 平成 27 年度は、新たな遺伝子組換え実験計画承認申請書が 5 件提出された。 2. 教職員および医療検査学科 2 回生に対する遺伝子組換え実験教育訓練は、学科ガイダンスの行事に組み込まれ、平成 27 年 4 月 3 日（金）に実施した。 目標達成度の評価：1. できた 2. ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった
b. <u>委員会・組織の主要な活動内容（根拠資料・記録）</u> ： 1. 平成 27 年度に提出された遺伝子組換え実験課題等は下記の通りである。 ①実験課題名：Cables タンパク質の発現メカニズムの解明 審査対象者：医療検査学科教授 坂本秀生 審査日 5 月 28 日 審査結果：承認 ②実験課題名：Down syndrome critical region 9 (DSCR9) の機能解明に関する研究 審査対象者：医療検査学科助教 澤村暢 審査日 10 月 29 日 審査結果：承認 ③実験課題名：マウス Acupuncture-induced I-L (Aig1L) タンパク質の機能解明 審査対象者：医療検査学科特命准教授 高岡裕 審査日 12 月 25 日 審査結果：承認 ④実験課題名：ネッタイシマカの voltage gated Na ⁺ channel プロフィル解析 審査対象者：医療検査学科教授 鈴木高史 審査日 12 月 25 日 審査結果：承認 ⑤実験課題名：Presepsin の産生機序解明に関する研究 審査対象者：医療検査学科助手 溝越祐志 審査日 2 月 5 日 審査結果：承認 2. 教職員および医療検査学科学生に対する遺伝子組換え実験教育訓練は、坂本秀生安全主任者を講師とし、約 1 時間の講習会として実施した。教育訓練の有効期間は 3 年間であり、2 回生以上の学生で教育訓練受講者は卒業時まで教員同伴の下で緑風館 5 階の入室が可能である。教職員の場合は、前回の教育訓練から 3 年経過した場合は、再度受講しなければ、遺伝子組換え実験安全管理規程第 14 条より緑風館 5 階の入室が不可となる。 3. 次年度より、遺伝子組換え実験承認申請手続きの提出期限を、毎月 20 日までとした。
次年度の課題
次年度も、新たな遺伝子組換え実験計画に対する申請書の審査、教職員および医療検査学科 2 回生に対する遺伝子組換え実験教育訓練を実施する。

19. 健康保健センター 年間活動報告

センター長 松田 正文

本年度の課題
<ol style="list-style-type: none"> 1. 全国大学保健管理協会加盟校として、また同協会近畿地方部会運営委員校として、協会運営に参加・協力する。同部会代表世話人校として近畿地方部会運営の世話役を果たす。 2. 健康保健センターへの看護師などの配置を実現する。
本年度の活動方針・目標
<ol style="list-style-type: none"> 1. 全国大学保健管理協会および同協会近畿地方部会が行う諸事業に積極的に参加・協力する。 2. 健康保健センターへの看護師などの配置を実現するために、具体的に活動する。
主な活動内容
<p>a. <u>目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）</u>：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 全国大学保健管理協会評議委員会（平成 27 年 9 月 8 日、盛岡市）、同協会総会（平成 27 年 9 月 9 日、盛岡市）に出席した。 2. 第 53 回全国大学保健管理研究集会に出席した（平成 27 年 9 月 9、10 日、盛岡市）。 3. 全国大学保健管理協会近畿地方部会運営委員校・代表世話人校として下記の会議および研究集会を開催した。 <ol style="list-style-type: none"> a. 近畿地方部会運営委員校会議（平成 27 年 5 月 28 日、神戸常盤大学） b. 近畿地方部会保健師・看護師班幹事校会議（平成 27 年 5 月 28 日、神戸常盤大学） c. 近畿地方部会研究集会・総会（平成 27 年 7 月 30 日、神戸市ラッセホール） d. 近畿地方部会保健師・看護師班研究集会・総会（平成 27 年 9 月 17 日、神戸常盤大学） 4. 養護教諭 武田奈々子氏が採用され（平成 27 年 10 月 26 日）、キャリア支援課に配置された（健康保健センター関連業務も担当）。 <p>目標達成度の評価：1. できた 2. ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった</p> <p>b. <u>委員会・組織の主要な活動内容（根拠資料・記録）</u>：</p> <p>第 1 回委員会（平成 27 年 7 月 13 日 月曜日） A 会議室 ・全国大学保健管理協会近畿地方部会 7 月研究集会（7/30 日開催）の実施について</p> <p>第 2 回委員会（平成 27 年 9 月 11 日 金曜日） A 会議室 ・全国大学保健管理協会近畿地方部会 9 月保看班研究集会（9/17 開催）の実施について</p>
次年度の課題
健康管理室と学生相談室との情報共有化を図る。

a. 健康管理室 責任者 井本 しおん

本年度の課題
<ol style="list-style-type: none"> 1. 全国大学保健管理協会近畿地方部会の代表世話人校として協会運営を遂行する。 2. 学校保健を専任とする職員（看護師、保健師または養護教諭）の配置を目指す。 3. 各学科の臨地実習委員と協力し学生の予防接種の徹底に努める。

本年度の活動方針・目標
上記課題の解決・実行
主な活動内容
<p>a. 目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. については、7月、9月に全国大学保健管理協会近畿地方部会の研究集会を開催し、無事終了できた（詳細はセンター長報告参照）。 2. については、平成27年10月に養護教諭の武田奈々子氏が、主に健康管理室の業務に携わる常勤職員として採用され、キャリア支援課に配属された。 3. 養護教諭の着任に伴い、学生の予防接種・抗体検査についての説明・様式の見直しを行い、より解りやすいものに改定した。平成28年度入学学生から適用する。 <p>目標達成度の評価：1. できた 2. ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった</p> <p>b. 委員会・組織の主要な活動内容（根拠資料・記録）：</p> <ul style="list-style-type: none"> • 平成27年5月、授業中に学生の救急搬送を要した事例が発生したことを受け、大学の健康管理に役立てる目的で健康調査票を作成した。平成28年度新生に適用する。 • 学内傷病者および体調不良を訴える者への対応を行った。 平成27年度の健康管理室利用者数は51名（M17、N12、E10、O12）であった。主な症状は、生理痛（11）、体調不良（10）、胃腸症状（7）などであった。外科的傷病（けが、打撲など）も14件あった。 • 健康管理室の備品、医薬品の整備状況を確認するため、医薬品等リストを作成した。 • 禁煙すすめ隊の活動：学生委員会と共同で取り組んでいる。これまでの敷地内パトロールや喫煙者数調査等の活動に加え、本年度は健康フェアに出展して禁煙についてのアドバイス・指導を行った。
次年度の課題
<ol style="list-style-type: none"> 1. 健康調査票、健康診断結果、予防接種・抗体検査結果など学生の健康情報を適正に管理・運営する体制を整備する必要がある。 2. 健康管理室の備品・医薬品については、必要なものを配備し、物品管理が適正に行われる管理体制を構築する必要がある。 3. 学生や教職員に、健康に関する情報をより積極的に発信していくことが望ましい。

b. 学生相談室 責任者 後藤 晶子

本年度の課題
<ol style="list-style-type: none"> 1. 学生相談をより効果的に実施する体制を考える。 <ol style="list-style-type: none"> ① 発達障害を抱えた学生への対応について、委員による情報収集・研修を行う。 ② カウンセリングルームの利用しやすさとして、開設曜日等の要因について検討する
本年度の活動方針・目標
<ol style="list-style-type: none"> 1. 学生相談をより効果的に実施する体制を考える。 <ol style="list-style-type: none"> ① 発達障害を抱えた学生への対応について、委員による情報収集・研修を行う。 ② 利用しやすさとして、開設曜日等の要因について検討する。
主な活動内容

a. 目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）：（学生相談室会議議事録、案内文書・参加記録）

1. 発達障害を抱えた学生への対応について、学生相談室員（カウンセラーを含む）で、先進的な取組をしている富山大学のビデオを視聴し、相談室員としての在り方を確認した。また、日本学生支援機構主催の「日本障害学生支援セミナー」研修に室員を派遣し、その後委員で共有を図った。
2. カウンセリングをより効果的に行うために、ケースカンファレンスを4回実施し、カウンセラーならびに学生相談サロンで教員が抱えているケースについて、委員間で議論した。
- 3 利用しやすさとして、昨年度より準備していたカード式広報媒体を配布し、予約についてはメールでの対応を可能とした。また、開室時間帯の通路の電灯を点灯状態に維持した。
4. 箱庭ウィークは来談のきっかけになりうるので、箱庭を充実させて今年度も実施した。またキャリア支援課にもミニ箱庭を設置し、箱庭そのものにも親しみをもてるようにした。
5. 新規教員もいるので、これまで同様コンサルテーションについて案内を作成し教員メールボックスに配布した。前期には延べ8件、後期は相談までいかずとも来室があり、教員にとってすこし敷居が低くなった様子がみられた。
6. 次年度の便覧掲載内容で、利用しやすさが伝わるように表記を検討した。
7. 今年度ルームの開設日を木・金に設定したことについて、来室状況を検討した。金曜日の夕刻開室は、あまり来室者の増加はなかった。

目標達成度の評価：1. できた ② ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった

b. 委員会・組織の主要な活動内容（根拠資料・記録）：（会議議事録）

1. 今年度のカウンセリングルームの利用者数は、延べ114名（昨年度は79名）、実数17名（昨年度は23名）であった。
2. 試験終了後もカウンセリングが必要な学生に対して、カウンセリングルームを開室した。
- 3 過呼吸発作について、旧来の対応に終始しないよう、塩江カウンセラーから事務職員対象に研修を行った。
4. 委員会会議を3回開催した。（aで記述した内容の諸打ち合わせ等は含まない）またケースカンファレンスを4回実施した。

次年度の課題

1. カウンセリングルームの実質的な縮小方針が打ち出された中で、学生のカウンセリングに対するニーズをきめ細やかに掌握し、エビデンスに基づいたカウンセリングルームの充実を図る。
2. 学生の心の問題について掌握できたものについては、かかわる教員へのコンサルテーションや研修などを検討する。

20. 神戸常盤ボランティアセンター

センター長 中田 康夫

本年度の課題
<ul style="list-style-type: none">・ 学生スタッフの育成、学生による自主的な活動の促進・ 有事の際（特に災害時）のボランティア活動者の養成・ センターや学生活動の発信、広報
本年度の活動方針・目標
<ul style="list-style-type: none">・ カリキュラム上の問題も踏まえたうえで、学生が主体となって活動と他の学生を繋いでいくボランティアセンターを目指した学生スタッフの育成・ 有事の際（特に災害時）のボランティア活動者の養成・ 幼稚園・高等学校との連携の質の向上・ 登録学生増強のため、学生の活動の様子やセンターの取り組み等の情報発信の強化
主な活動内容
<p>a. <u>目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）</u>：</p> <ul style="list-style-type: none">・ 本年も引き続き、学生スタッフの育成について検討した。学生たちへの聞き取り調査から、ボランティア活動の紹介や広報については、参加経験のある学生からの体験談に基づく紹介や先輩や友人等同じ学生という立場の者からの誘いが、参加するきっかけになるとの回答が得られた。これに対し、次年度は試験的に学生スタッフの組織化を試みる等して、引き続き検討を重ねる。・ 有事の際のボランティア活動者の育成としては、2016年3月に長田区社協との共催による災害ボランティアセンター設置訓練及び、災害ボランティアセンター運営者研修を実施し、災害ボランティアに関心のある学生が災害時のボランティア活動者の受け入れについて学んだ。大学コンソーシアムひょうご神戸主催事業「東日本大震災学生ボランティア登録事業」に3名、「災害時学生ボランティアリーダー養成プログラム」に1名が参加した。・ 幼稚園との連携については、1.17KOBEに灯りをinながたのろうそく作りを園で行うとともに、保護者への追悼行事の案内等連携をしており、また高校とは、密な連携のもと学内広報や学期毎のボランティア説明会を実施した。結果として幼稚園保護者が1.17KOBEに灯りをinながたの会場に園児と訪れる等、連携の効果が表れている。・ 情報発信の強化に対する取り組みについては、学生に対してはポータルや掲示板等での広報活動を実施しているが、学生のみならず教職員に対する広報についてもブログ等の活用を検討する必要がある。情報発信の強化の部分でも学生スタッフによる積極的な広報活動を展開できるよう、今後検討を行う。また本年作成し5周年記念誌を活用し、外部団体にもボランティアセンターとしての情報発信を行った。 <p>目標達成度の評価：1. できた ②. ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった</p> <p>b. <u>委員会・組織の主要な活動内容（根拠資料・記録）</u>：</p> <p><2016年3月末現在のボランティア登録者></p> <p>ボランティア登録者数 合計263人（内訳 大学207人 高校54人）</p> <p>医療検査学科48人（内訳 1年8人 2年15人 3年16人 4年9人）</p> <p>看護学科31人（内訳 1年14人 2年7人 3年5人 4年5人）</p>

こども教育学科 35 人（内訳 1 年 2 人 2 年 14 人、3 年 15 人、4 年 4 人）
 口腔保健学科 92 人（内訳 1 年 4 人 2 年 12 人 3 年 76 人）
 高等学校 54 人
 <2015 年度活動件数・延活動者数>
 ・活動数 67 件（依頼総数 74 件）
 うち、本 VC が主体あるいは他団体との協働による事業・・・18 件（2014 年度 23 件）
 地域団体・福祉施設等からのボランティア依頼件数・・・49 件（2014 年度 39 件）
 ・延活動者数・・・大学 409 名、高校 180 名（2014 年度 大学 402 名、高校 146 名）

<活動の概要>

行事名	内 容
LOVE49 キャンペーン in KOBE	子宮頸がん予防啓発イベントの企画・運営
ネパール地震支援募金活動	街頭及び学内での募金活動
私たちの運動会	障がい者事業所合同運動会の企画・運営
長田在宅支援センター夏祭り	高齢者施設夏祭り手伝い
長田区自立支援協議会つどう部会	発達障害児を対象にした行事の企画、実施
おやつはべつばら	Tooth☆ピッカーズによる歯磨き指導
TOKIWA 健康フェア	炊き出し、被災地支援活動報告
一七市拡大版 2015	・一七市拡大版運営支援（受付・着ぐるみ・アンケートの実施）
学祭	関東水害被災地復興支援ブース出展、募金活動
大黒地区防災訓練	炊き出し
1.17 KOBE に灯りを in ながた 2016	炊き出し、募金活動、会場設営など
災害ボランティアセンター設置訓練	長田区社協との共催による災害ボランティア研修、訓練

上記活動のほか、長田ボランティアセンター運営委員会への参画や、長田区自立支援協議会つどう部会・防災プロジェクト、一七市拡大版 2015 実行委員会、1.17KOBE に灯りを in ながた 2016 実行委員会、「子宮の日」LOVE49 キャンペーン in KOBE 実行委員会等へ参加し、地域団体との連携・協働のもとに活動を行っている。

ボランティアセンターの運営に関しては、年 2 回（6・3 月）の運営委員会を開催して運営に関する協議を行うとともに、円滑な運営を行うため、年間 3 回（6・12・3 月）のスタッフ会議を開催して法人内の委員による喫緊の課題の検討と情報共有を行った。

次年度の課題

- ・カリキュラム上の問題も踏まえたうえで、学生が主体となって活動と他の学生を繋いでいくボランティアセンターを目指した学生スタッフの育成について、ボランティア活動の紹介（ボランティアコーディネート）、情報発信・広報の分野から試験的な取り組みを検討する。
- ・有事の際（特に災害時）のボランティア活動者の養成を引き続き実施する。
- ・幼稚園・高等学校との連携の質の向上を引き続き実施する。

21. 地域交流センター 年間活動報告

センター長 中村 忠司

本年度の課題
1. 地域交流センターの運営体制の確立 2. わいがやラボ、地域交流センター全体の広報活動 3. コミュニティハウス事業への学生の参画 4. 地域活動に参加するためのより良い学内の環境整備
本年度の活動方針・目標
1. 学園の地域交流および地域貢献活動の総合窓口として機能する 2. 地域活動の拠点である「わいがやラボ」の広報活動を行う 3. 既存の地域活動に加え、新たに地域の活性化に繋がる事業を計画する
主な活動内容
a. <u>目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）：</u> 近年、地域からのニーズが多様化する中で、学園の知財を使って、地域ニーズに即した事業を展開するとともに学生の「学びの場」を創出した。 1. 公開講座 2. 学生の地域活動 3. 長田区との連携活動 4. 離島プロジェクト 5. TOKIWA 健康フェア 6. コミュニティハウスでの活動 目標達成度の評価：1. できた ②. ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった
b. <u>委員会・組織の主要な活動内容（根拠資料・記録）：</u> 1. 地域活性化事業 高齢化社会の課題である高齢者の健康と福祉を中心とした公開講座などの活動を行った。（16 講座を実施し受講者数 679 名であった） TOKIWA 健康フェア 2015 では、健康をテーマに 25 を超えるブースを出店し、前年度と同じく 1,000 名を超える参加者を記録した。 2. ボランティア（一般）事業 地域活動拠点「わいがやラボ」を中心に、学生企画イベントや離島プロジェクトを展開。各学科の専門性を活かした様々な活動を行い、地域貢献を果たしながら、その経験を自らの成長に役立てている。
次年度の課題
学内外および学生に対して積極的な広報を行うことができ、地域から多くの依頼を受けることができた。しかし、過密なカリキュラムにより、意欲ある学生が参加できず、依頼を断らざるを得ないケースもあった。 よって、学生が地域活動へ参加しやすい学内環境の一層の充実を図る。

22. 国際交流センター 年間活動報告

センター長 野村 秀明

本年度の課題
1. 「大学コンソーシアムひょうご神戸」の事業継続と拡大 2. ネパール交換研修活動の継続と拡大 3. 学生の聞き、話す英語力の向上 (English Evening クラスの前後期開講を継続) 4. 学生および教員の国際交流活動環境の整備と支援 5. 学生の外国語学習の促進
本年度の活動方針・目標
1. ボストン、シカゴ、フィリピン、ネパールでのコンソーシアムひょうご神戸の活動を成功させ、学生の国際交流への誘いを行う。 2. ネパール交換研修 (本年度はネパール訪問) を成功させる 3. スタンフォード大学インターンシップ学生の受け入れを国際交流センターで行い、学生との交流を発展させる。 4. 学生の外国語学習の促進に関する新規事業の開拓を行う。
主な活動内容
<p>a. <u>目標達成に向けた活動内容 (根拠資料・記録) :</u></p> <p>1. 国際交流センター (GCC) ルーム (研究棟 7 号館 1F) の設営、設備拡充を行った。 2. 平成 27 年度は月例のセンター会議を、計 12 回開催した。そこで、活動課題と方向性について議論を行い、毎回の議事録を収録・保存した。 3. センター構成員 (センター長 1 名、副センター長 1 名、医療検査科 1 名、看護学科 3 名、こども教育学科 2 名、口腔保健学科 1 名、通信看護学科 1 名、常盤高校 1 名、職員 4 名) の計 15 名で構成され、活動した。</p> <p>目標達成度の評価 : 1. できた ②. ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった</p> <p>b. <u>委員会・組織の主要な活動内容 (根拠資料・記録) :</u></p> <p>1. ガイダンス説明会 (平成 27 年 4 月 3 日) 新年度ガイダンスにて、国際交流センターについて各学科の委員および職員がガイダンスを行い、学生に活動内容と活動状況について周知した。 2. スタンフォード大学インターンシップ学生の受け入れを受諾、申請を行うも今年度の希望学生はなかった。 3. 大学コンソーシアムひょうご神戸学生派遣プログラム (平成 27 年 9 月 5 日～9 月 13 日) 兵庫県下の大学が合同で実施する海外派遣プログラムで、今年度は医療検査学科および看護学科 7 名がボストン、フィリピンを訪問、口腔保健学科 7 名がシカゴを訪問し、日本と比較した各国の医療・保健事情を学んだ。また 4 月 29 日の大震災の影響で延期となったネパールは、平成 28 年 3 月 15 日から 25 日に医療検査学科および看護学科計 8 名を派遣し、現地医療系フィールドワークに加え、震災義援金譲与のセレモニーも併せて行った。 また、その成果は、大学祭 (平成 27 年 11 月 22 日) 時に、ポスター発表を行い、学生、教職員、さらに同窓会の父兄に披露した。また、ネパール報告会は、平成 28 年 3 月 28 日に</p>

神戸常盤大学にて行った。

4. ネパール交換研修（平成 27 年 12 月 6 日～12 月 14 日）

ネパール・ハチガンダ福祉協会との交換研修生派遣制度に基づき、本年度は、ネパールから学生 2 名の研修生（Sigan college : Ms. Sabina KC、Ms. Phanu Maya）を受け入れ、ホームステイ生活の中で、日本の医療事情、教育環境を実際に見学、また日本文化にも触れ、学生達と異文化体験・交流を行った。

5. 本学ホームページに国際交流センターのページを充実させた。

次年度の課題

1. 学生の外国語学習の促進

従来、課外活動として提供されていた「イングリッシュ・イブニング」を、国際交流センター主催で開催し、学生の英語能力、特にコミュニケーション、プレゼンテーション能の向上に努める。

2. ネパールでの新しい交換研修の開拓

ネパール、ポカラのリージョナルカレッジとの交換研修プログラムの申請を推進する

3. 国際交流センター主催の海外活動講演会の開催を企画する。

4. 学生に開かれた国際交流センターの整備を図る。

5. 他大学国際交流センターとの連携を模索する。

活動内容の補足

昨今「大学のグローバル化」の必要性が叫ばれる一方で、実際に留学する大学生の数や、諸外国からの留学生の受け入れ数も近年減少傾向にある。若い頃に、語学力・コミュニケーション能力を身につけ、外国を訪問することは、学生達の幅広い視野と、異文化に対する理解力を養う絶好の機会であり、また将来的な協調性・柔軟性、責任感・使命感、主体性・積極性、チャレンジ精神の育成に繋がると考えられる。

神戸常盤大学としても、共に生き、共に学ぶ「共生」の理念を基に、国際交流を通して得るグローバルな視野と人間性の拡大を、大学での学びや将来的なキャリア（仕事）に活かすキャリア教育でもあるため、GCC も出来る限り援助を惜しまない所存で、その方向性に沿った活動の展開を試みている。

※ GCC = Global Communication Center

23. 教職支援センター 年間活動報告

センター長 後藤 晶子

本年度の課題
1. E科一期生の小学校教員・N科養護教諭採用試験合格を目指し効果的な支援を実施する。 2. 教職支援センターと学科のこれまでの取り組みを検証し、次年度以降に活かす。
本年度の活動方針・目標
1. E科一期生の小学校教員・N科養護教諭採用試験合格を目指し効果的な支援を実施する。 2. 上記以外の学年の教職を目指す学生についても、効果的な支援を実施する。 3. 教職支援センターと学科のこれまでの取り組みを検証し、次年度以降に活かす。
主な活動内容
<p>a. <u>目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）</u>：（センター会議議事録）</p> <p>1. 前年度末にセンター会議で決定した、「平成27年度教職支援プログラム・年間予定表」に基づき、学科、キャリア支援課と連携を図りながら活動を展開した。</p> <p>① 今年度初の実施であった大学推薦枠規定について、問題点を確認して、修正を行った。</p> <p>② 上記以外のE4およびN4について、自治体による出題内容の違い等を確認し、センター事務室と学科で分担して指導した。</p> <p>③ その他の学年については、これまで同様にセンター室長による定例学習会、東アカ「人物対策講座」「基礎力養成講座」、「教職教養」、学科教員による学習会、専門教養対策として主要教科の「秋季・春季セミナー」、夏期E・N各学年対象 弱点フォロー勉強会（センター室長とE科教員指導）、春季集中学習会を実施した。これらの学習会については適宜保幼の公立志望の学生にも周知を図り出席を得た。</p> <p>④ 学力把握にかかわる具体的内容として、年3回 学力把握テスト実施（支援センター作成）、E・N3 全国模擬試験、及び都道府県別模擬試験を実施した。</p> <p>⑤ 意欲の喚起として今年度初めて、E科一期生による合格者座談会を開催した。また、養護教諭志望者対象に合格者座談会も開催した。</p> <p>⑥ これまでの取組については、今年度の成果により、一応の評価を得るものとする。支援センター、学科ともに熱意をもってかかわってきたが、学生から、両者の連携に若干円滑さが欠ける旨指摘があることを把握し、学科とセンター事務室で共有し、次年度改善への布石とした。</p> <p>2. センター会議で、計画案、経過報告、事後総括を共有した。（センター会議議事録） 目標達成度の評価：1. できた ②ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった</p> <p>b. <u>委員会・組織の主要な活動内容</u>：上記以外（根拠資料・記録）：（センター会議議事録）</p> <p>1. 上記の活動を円滑に進めるために、支援センター会議を11回開催した。</p>
次年度の課題
<p>1. 引き続きE科二期生の小学校教員合格者をだすための支援とN科養護教諭採用試験の合格を目指した支援を効果的に実施する。</p> <p>① 次年度主要自治体の採用試験日程の前傾化、出題分野・形式等の変更に適応する支援体制を早急に整える。</p> <p>② 教職支援センターと学科との連携を一層円滑に進める。</p>

24. KTU 大学研究開発センター 年間活動報告

センター長 足立 了平

本年度の課題
<ol style="list-style-type: none"> 1. 科研費申請などの申請者数、採択数の伸びの低下⇒研究者支援の強化、研究環境整備 2. 研究活動に関する不正防止に関する倫理教育が実施されていない⇒研究倫理委員会とのコラボで実施 3. 研究者の業績や研究テーマが公表されていない⇒機関リポジトリの構築
本年度の活動方針・目標
<ol style="list-style-type: none"> 1. 教員の研究活動活性化に関する支援 2. 研究費および研究活動における倫理教育の強化 3. 研究業績の公表に関する支援
主な活動内容
<p>a. <u>目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）：</u></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 教員の研究活動活性化に関する支援： <ol style="list-style-type: none"> ① 教員を対象とした研究意識調査（アンケート）の実施（8/1～8/8）：教員から指摘があった問題点について、関係する部署に回答をもらってHPにアップした ② 夏の研修会実施（8/31）：テーマは〈1〉高等教育研究を考える〈2〉manabaの全学的普及〈3〉図書館の利用促進 ③ 神戸学術フォーラム（10/3）：若手研究者に聞く ④ 科研費申請に関する説明会（10/3） 2. 研究活動における倫理教育：研究倫理委員会での実施が決定した 3. 研究業績の公表に関する支援： <ol style="list-style-type: none"> ① 機関リポジトリの構築については、図書館と共に継続して法人と交渉中 <p>目標達成度の評価：1. できた 2. ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった</p> <p>b. <u>委員会・組織の主要な活動内容（根拠資料・記録）：</u></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. テーマ別研究費の公募・審査・採択者公表・発表（KTUセンター会議議事録） 2. テーマ別研究費の区分に関する見直しと審査基準の見直し 3. 図書館機能の充実に係る支援（KTUセンター会議議事録） 4. 研修会の図書館との共同開催：英語向け医中誌・Pro Quest 利用講習会（2/22）
次年度の課題
<ol style="list-style-type: none"> 1. 研究活性化の取り組みを継続する 2. 本学の研究成果公表システムを構築する 3. 他委員会や他部署との協働

25. 口腔保健研究センター

センター長 野村 慶雄

本年度の課題
<ul style="list-style-type: none"> ① 附属ときわ幼稚園・神戸常盤女子高校・新入生の歯科検診（継続） ② 新入生の口腔保健に対する行動変容推進（継続） ③ TOKIWA 健康フェアの歯科検診等の口腔保健事業（継続） ④ 地域の口腔保健関連事業への参画（継続） ⑤ 口腔保健に関する研究業績の蓄積
本年度の活動方針・目標
<ul style="list-style-type: none"> ① 附属ときわ幼稚園・神戸常盤女子高校、新入生の歯科検診 ② TOKIWA 健康フェアの歯科検診等の口腔保健事業（歯科検診・歯科相談） ③ 地域の口腔保健関連事業への参画 ④ 歯科検診結果の解析 ⑤ 歯科診療所受診に対する行動変容推進
主な活動内容
<p>a. <u>目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）：</u></p> <p>1. 口腔保健事業</p> <p>1) 長田区連携事業</p> <ul style="list-style-type: none"> ①平成 27 年度長田区子どものむし歯予防のための検討会議 ②長田区・神戸常盤大学連携協定にもとづく打ち合わせ会 ③長田区民まちづくり会議 にこやか部会 ④長田区との地域連携会議 <p>2) 歯科検診</p> <ul style="list-style-type: none"> ①神戸常盤女子高校歯科検診 ②附属ときわ幼稚園歯科検診 ③TOKIWA 健康フェア 2015 歯科検診 ④新入生歯科検診 <p>3) 診療所業務</p> <ul style="list-style-type: none"> ①口腔ケア（新入生含む） ②フッ素塗布 ③神戸市 40 歳総合健診歯周疾患検診 ④神戸市妊産婦歯科健康診査 <p>2. 啓発活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 子育て支援センター「えん」での口腔保健啓発事業 （口腔保健研究センター会議、歯科診療所運営会議議事録） ② 長田区こどものむし歯予防のための検討会議 （口腔保健研究センター会議、歯科診療所運営会議議事録） ③ 長田区民まちづくり会議 （口腔保健研究センター会議、歯科診療所運営会議議事録）

<p>④ 口腔保健啓発のための講演・研修（医療従事者・一般対象） （口腔保健研究センター会議議事録）</p> <p>⑤ ホームページリニューアル（神戸常盤大学短期大学部歯科診療所）</p> <p>3. 教育関連</p> <p>① 地域口腔保健支援実習Ⅰ（保護者実習）：前期</p> <p>② 総合歯科実習：後期</p> <p>4. 研究活動</p> <p>① 学会発表（6件）</p> <p>② 論文（4編）</p> <p>目標達成度の評価：1.できた ②ほぼできた 3.あまりできなかった 4.できなかった</p> <p>b. 委員会・組織の主要な活動内容（根拠資料・記録）：</p> <p>① 口腔保健研究センター（2回）、歯科診療所運営会議（6回）を開催し、口腔保健研究センターのフィールドの一つである歯科診療所の活性化について検討した。予防的診療業務に加え「神戸市40歳総合健診歯周疾患検診」・「神戸市妊産婦歯科健康診査」を追加した。（口腔保健研究センター会議、歯科診療所運営会議議事録）</p> <p>② 子育て支援センター「えん」での出前講座に加え、幼児へのフッ素塗布を実施した。（口腔保健研究センター会議、歯科診療所運営会議議事録）</p> <p>③ 長田区こどものむし歯予防のための検討会議（2回）に参加し、長田区の乳幼児のう蝕予防について検討・提案した。長田区の乳幼児う蝕罹患率最下位を脱出できた。（口腔保健研究センター会議、歯科診療所運営会議議事録）</p> <p>⑤ 長田区民まちづくり会議（5回）に参加し、長田区における健康教育を通しての啓発活動を行った。（歯科診療所運営会議議事録）</p> <p>⑥ 地域のみならず全国において口腔保健啓発の講演会・研修会等において30回出務した。（口腔保健研究センター会議議事録）</p>
<p>次年度の課題</p> <p>① 附属ときわ幼稚園・神戸常盤女子高校・新入生の歯科検診（継続）</p> <p>② 新入生の口腔保健啓発活動（口腔保健に対する保健行動の変容を促す）</p> <p>③ TOKIWA健康フェア2015の歯科検診等の口腔保健事業（継続）</p> <p>④ 地域の口腔保健関連事業への参画（継続）</p> <p>⑤ 口腔保健に関する研究業績の蓄積</p> <p>⑥ 歯科診療所の活性化対策の検討と実施</p>
<p>活動内容の補足</p> <p>・附属ときわ幼稚園歯科検診：58人（3～6歳）</p> <p>・神戸常盤女子高校歯科検診：854人（3日間）</p> <p>・新入生歯科検診：341人 医療検査学科94人 看護学科82人 こども教育学科84人 口腔保健学科76人</p> <p>・子育て支援センター「えん」でのフッ素塗布 延 41人</p> <p>・歯科診療所受診者数：延べ365人（新患127人）</p>

26. 神戸常盤大学子育て支援センター「子育て広場えん」

センター長 上月 素子

本年度の課題
大学付属の子育て支援センターとしての役割を見直し活動の充実を図る
本年度の活動方針・目標
① 地域における大学付属の子育て支援センターとしての活動内容の見直し充実を図る。 ② 安定した運営ができるようスタッフを補充し育成する。
主な活動内容
a. 目標達成に向けた活動内容 【根拠資料・記録】：
長田区との連携事業 【各月の日程表・日報・記録ファイル】 ふれあいプラザ（月1回子育て応援プラザ）健康相談（5月6月7月9月10月11月12月1月2月3月保健師）子育て相談（月3回子育てサポーター）遊びのマエストロ養成講座実習（10月）
なでしこレディースホスピタルとの連携事業 【各月の日程表・日報・記録ファイル】 月2回木曜日ベビーマッサージ（5月～11月助産師）※交通費の実費を支払う
法人及び大学学科間の連携事業 【各月の日程表・日報・記録ファイル】 O科：月一回実施の歯の相談（個人カルテ作成による継続的歯の相談の実施）及びフッ素塗布（8月9月12月1月担当御代出先生）。N科：まちの保健室の実施（6月10月担当庄司先生）。附属ときわ幼稚園：園児募集説明会（8月）E科：遊びと遊具（9月11月担当上月）
スタッフの企画事業 【各月の日程表・日報・記録ファイル】 うたあそび—今月のうた—（水）いっしょに体操（木）今月の絵本・おはなしの時間（金）親子あそび（土）手作りプレゼント（子どもの日・クリスマス・お正月・雛祭り）毎月 の環境構成（壁面構成・今月の折り紙・今月の歌カード）第2子3子誕生お祝いカード
学生受け入れ事業 【各月の日程表・日報・記録ファイル】 O科（フッ素塗布のサポーター12月1月）N科（まちの保健室のサポーター6月10月） E科：基礎実習Ⅰ（87名8月8回）基礎実習Ⅱ（9名9月3回）
スタッフの育成事業 【記録ファイル】 兵庫教育大学子育て支援ルーム「GENKI」との合同研修会（6/26 17時～19時）参加：「えん」山口・上月「GENKI」名須川室長・室員2名：兵庫教育大学神戸サテライト教室「えん」の活動内容及びスタッフの対応について報告
目標達成度の評価：1.できた 2.ほぼできた 3.あまりできなかった 4.できなかった
① については、2. ほぼできた 低年齢化傾向にある利用者親子に対して、スタッフの交代があったにも拘らず、質を保ち事故もなく日々子育て支援の場を提供し続けられた。
② については3. あまりできなかった 7月に1名退職（西村）1名採用（前田）、9月に1名退職（榮）1名採用（高村）、1月1名（槌井）2月1名（天知）採用、4月2名採用予定（高室・南）と、年度末になり、次年度に向けての体制がようやく整うという状況だった。

<p>b. センターの主要な活動内容（根拠資料・記録）：</p> <p>上記活動内容を実施するために次の活動を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・活動内容人事管理等（後藤・上月・戸川）事務処理物品購入等（小谷・猿渡）【会議録】 ・長田区子ども家庭支援課（中筋係長他）の協力を得て「子育て相談」「健康相談」「子育て応援プラザ」等を企画し実施する【記録ファイル】 ・シンポジウム『子育て親育ちを促す支援者の役割』（7/18 主催：兵庫教育大学就学前教育カリキュラム研究開発室）に上月がシンポジストとして参加し、「えん」開設後 5 年間の支援者養成を報告し、望ましい支援者の在り方についての話題提供をする【記録ファイル・兵庫教育大学 平成 27 年度 第二年度次文科省特別経費事業報告書 H28 年 3 月発行】
<p>次年度の課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大学付属の子育て支援センターとしての役割を見直し活動の充実を図る。012 歳児のこどもと保護者のためのリビングルームとしての「えん」における支援のあり方を再確認し、質的向上と内容の充実を図る。 ・質の高い安定した運営ができるよう、スタッフの継続的雇用を図る。これまでにない、7 名体制という良い状況で 4 月を迎えるが、うち 4 名が新たなスタッフである。日々の仕事をこなすだけでなく、大学の支援センターとしてのスタッフの質を充実させるために、スタッフが良好な状況で継続して仕事が続けられるようにしていきたい。
<p>活動内容の補足</p> <p>1. 稼働日数 年間 217 日 開館曜日時間 火曜日～土曜日の 5 日間 10 時～12 時 13 時～4 時までの 5 時間 休館日 日・月と月曜日が休日の次の火曜日、センターが定めた春、夏、冬の休館日 警報が出された日 スタッフの補充が出来なかった日（複数名のスタッフの家族がインフルエンザに罹ったり、スタッフの病気や予定が重なり 2 名配置ができなかったため）</p> <p>2. 利用者数 年間入場者数 合計 5116 名 1 日平均 11.3 名 年間登録者数 405 名 今年度は昨年度（利用者数 6629 名、登録者数 555 名）に比して減少傾向にある。その理由の一つとしては、平成 27 年度より本格実施の認定こども園化により、近隣の幼稚園の 3 歳児以下の就園が促進されたことが影響していると考えられる。えんの利用児の分布を見ると、1 歳児が 940 名と最も多く続いて 0 歳児が 653 名で、低年齢化の傾向が顕著になっている。そのため年度内に活動内容の見直しを進めてきた。「いっしょにたいそう」の活動が低年齢化で実施しにくくなってきたため新年度からは低年齢化に合わせて「おやこあそび」と名称も内容も変更し、これまで「おやこあそび」として実施してきたふれあい遊びを「伝承あそび」と変更する予定である。</p> <p>3. スタッフの採用退職等について 開設以来最も厳しいスタッフ構成で支援事業を実施する。 7 月西村退職（体調不良）7 月前田採用（土曜日のみ勤務可能）9 月榮退職（専任職に就くため）9 月高村採用（火曜日午前中と水木勤務可能 3 月で退職）【記録ファイル】</p>

開設以来のスタッフが1名（山口）でどの曜日も入れるのも1名（山口）という厳しい状況のため、短期大学で非常勤講師を務めた公立幼稚園園長経験者の井上先生に都合のつく金曜日と土曜日に、9月以降は火曜日午後には大学の非常勤助手の川井先生にと、関係者の協力を得て、毎日スタッフ2名が入れるようやりくりをしながら開館を維持してきた。4月当初より広く人材確保に努めたが、上記の条件付き2名の採用しかできなかった。1月以降に、槌井（短期大学時代の卒業生）天知（井上先生紹介）大室（井上先生紹介）南（一般公募）の4名の採用が決まり、新年度は安定したスタッフ体制で望めるようになった。こうした厳しい状況にもかかわらず、事故やトラブルを起こすことなく、地域の方から「心の安らぐ場所」と好評をえて運営することができたのは、山口先生を中心に井上先生が積極的に関わり他の曜日のスタッフへ周知を図る、小谷課長は頻回にえんに出向く等のお蔭と感謝している。

スタッフの継続的勤務への課題として高村先生の退職理由について記したい。「時間給1000円という事で就職したが開始前（清掃のため15分前に入る）閉館後（4時に即利用者が退出しないので後片付け等に15分ほど残る）の無給時間を差し引くと実質給が低いためよりよい事業所に転職する」とことであった。これまでも、この件について不満を漏らすスタッフはいたがセンター長の力不足で具体的な解決策を取ることができないまま現在に至っている。主婦のパート勤務者にとって時間給の多少は大きな問題であるので考慮しなければいけない課題と考える。大学として、地域に信頼される質の良い支援を提供するには、良いスタッフに継続して勤めてもらう必要がある。前後の超過分を可能な範囲でプラスし補てんするか、清掃の簡略化を図る等して、この件については今後の課題として善処して頂きたい。

4. 2015年までのセンター長の職務の2016年度4月以降の役割分担について

- ・運営全般 中田先生
 - ・毎月の予定表作成 中田先生 ※4月5月上旬作成
 - ・毎月のスタッフ調整及び配置表作成 山口先生（中田先生）※4月5月上旬作成
 - ・行事計画及び実施 中田先生 山口先生（井上先生）
※他学科の「えん」における行事は中田先生
 - ・長田区の事業 ※3月11日 中筋係長土屋所長中田先生上月で打ち合わせを行う
マエストロ養成講座 2016年度は上月（中田先生は子育て支援が未経験のため）
子育て支援者スキルアップ講座 2016年度は上月（同上）
- その他子育て関連事業の連絡調整 中田先生

27. ライフサイエンス研究センター

責任者 坂本 秀生

本年度の課題
センター利用者の拡大及び研究活動の活発化を目指し、本センターの利用者増加を行った。利用者の増加に伴い、競争的研究資金の獲得が増えるようにする。
本年度の活動方針・目標
本センター利用者の研究が活性化され、学内外での競争的研究資金獲得につなげる。 目標として、科研費などの大型研究費を1人でも多く獲得出来る環境を整える。
主な活動内容
<p>a. <u>目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）</u>：</p> <p>坂本秀生：1) ヒト Cables 遺伝子の機能解析、2) POCT 対応装置の機能評価。 井本しおん：ヘム誘導体が単球/マクロファージのROS産生と細胞死を誘導する機構の検討 澤田 浩秀：1) マウスモデルを用いたパーキンソン病の予防の研究：国立長寿医療研究センター（愛知県大府市）との共同研究、2) 近赤外光トポグラフィ法を用いた認知症予防の研究：認定NPO法人認知症予防ネット神戸および介護施設うみのほし大久保との共同研究 高岡 裕、大田美香、菅野亜紀：1) 東洋医学（鍼灸）による骨格筋修復・再生機構の分子細胞生物学的解明、2) 酵素反応の <i>in silico</i> 数理モデル化と <i>in silico</i> ドラッグリポジショニング創薬、3) 自然言語処理技術の医療情報応用 澤村 暢：FGA ノックアウト細胞を用いたフィブリノゲン合成・分泌に関する研究 溝越祐志：1) 好中球におけるプレセプシン産生機序の解明、2) 相互作用タンパクの探索及び精製系の確立</p> <p>目標達成度の評価：1. できた ②. ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった</p> <p>b. <u>委員会・組織の主要な活動内容（根拠資料・記録）</u>：</p> <p>坂本秀生：研究代表者として科学研究費基盤（C）を得た。国際学会発表を2回、国内発表を9回、学術論文和文を2編、著書を2冊出した。 井本しおん：日本臨床検査医学会 学会賞・優秀論文賞を受賞、学会発表2件を行った。 澤田 浩秀：認知症検診時に近赤外光トポグラフィ法を用い、前頭部における脳内酸素化ヘモグロビンを測定し、認知症の検診への有用性について検討。認知症高齢者に対し、ダーツ、ノルディック・ウォーキングを実施し、脳を活性させる取り組みを行い、これらが認知症進行抑制に意義があるか証明中。学会発表：3回（共同発表2回、筆頭発表1回） 平成27年度神戸常盤大学テーマ別研究費「腸管免疫賦活によるパーキンソン病予防の研究」 高岡 裕、大田美香、菅野亜紀：研究代表者として2課題の科学研究費（基盤研究（C））と1課題の（財）ひょうご科学技術協会研究助成金を、研究分担者として3課題の科学研究費（2課題を基盤研究（C））と1課題を日本医療研究開発機構から、計730万円を受け入れ研究を遂行した。研究成果は原著論文6本（欧文5本）、実践報告論文／解説論文2本（和文）、招待講演1回、学会発表10回であった。また、第16回日本クリニカルパス学会学術集会で3年連続となる座長賞を受賞した。 澤村 暢：学内テーマ別研究費の獲得。第4回神戸常盤学術フォーラムで発表した。</p>

溝越祐志：平成 27 年度テーマ別研究費を獲得し、敗血症マーカーである、プレセプシン及びその複合体を免疫沈降後、ウェスタンブロットィングで検出する系を確立し、プレセプシンが複合体を形成することを確認した。好中球におけるプレセプシン産生メカニズムに関する検討結果を神戸常盤大学紀要第 9 号（2016）で発表した。

次年度の課題

利用者が増えてきたので、研究が行い易いように共同利用機器などの使用環境を整える。また、利用者同士の情報交換を活発にする。

28. 事務局 年間活動報告

事務局長 坂本 啓

本年度の課題	
1. 2号館新築に伴う的確な対応	(庶務課)
2. 適正な予算執行管理	(経理課)
3. カリキュラム変更等円滑な授業運営	(教務課)
4. 各学科と入学者選抜の在り方等の検討	(入試広報課)
5. 就職委員会等との連携強化及び学生サポート体制の確立	(キャリア支援課)
6. 私立大学等教育研究活性化設備整備事業補助金の活用	(研究協力課)
7. 看護学科通信制課程における学生募集方策の展開	(通信制課程事務課)
8. 図書館の利用環境の整備及び授業と連携した学習支援	(図書館事務室)
9. 子ども教育学科が完成年度を迎え、受験対策の強化	(教職支援センター事務室)
本年度の活動方針・目標	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 本年度の課題に対し、事務局職員は、法人組織、教員組織と連携を密にしなが、円滑な業務を遂行する。 ・ 職員間の意思疎通を諮り、情報の共有化を図る。(毎月定例課長会議の開催) ・ 職員は担当業務の研鑽に努め、効率的な業務の執行に努める。 	
活動内容	
a. 目標達成に向けた活動内容(根拠資料・記録)：	
1. 2号館新築工事は、業者との連携を密にし、学内外関係者に情報を提供し、事故もなく工程どおり5月の竣工に向けて順調に推移した。	(庶務課)
2. 会計基準改正への対応に向けて、研修会・説明会等に参加し、情報の共有を行い、制度の共通認識と理解を深めた。また、予算管理部の明確化及び正確な数値管理等を行うとともに、支出伺いの様式変更並びに事務処理の確認、事前申請、検収の徹底、速やかな精算等を行い、事務の効率化と適切な対応へと繋げた。	(経理課)
3. 授業運営等に関して、キャンパスプラン、ポータルシステム及び教室予約管理システムを導入し、授業の円滑な管理運営ができた。	(教務課)
4. 各学科入試広報委員と綿密な協議をしながら、入学定員確保のため、高校訪問をはじめ業者主催の入試説明会に積極的に参加した。 高校訪問数 延べ600校 業者主催入試説明会 150会場、 本学学生による母校訪問学校数 59校 オープンキャンパス 4回開催 参加者 1841名	(入試広報課)
5. 学生支援体制は、全ての課員が対応できるように業務マニュアルを作成し情報の共有を図った。また、学生に対し修学支援奨学金の有効な支援を行うべく制度の内容を早期に周知した。	(キャリア支援課)
6. 私立大学等教育研究活性化設備整備事業補助金は2号館新築に伴い、必要な備品のみならず更なる学内の教育研究活動の充実をはかるべく「地域発展分野」で大学及び短大で申請を行い採択された。	(研究協力課)

7. 看護学科通信制課程の学生募集のため、特に関東地区の病院訪問及び看護協会主催の説明会に積極的に参加した。また、これまでの入学試験の実施形態を見直し、7月以降8ヶ月の長期にわたり、試験を8回実施した。(通信課程事務課)
8. 図書館では、グループ学習室、書架サイン、館内電源の整備・増設、学認利用による学外からの電子資料へのアクセス環境整備を行い学生の利便を図った。また、蔵書・文献検索による授業支援、教員対象のデータベース講習会による研究支援を行った。(図書館事務室)
9. 教員採用試験受験者に対し、各種計画案、経過報告、事後総括等を関係者が共有し、学生支援の充実を図った。(教職支援センター事務室)

目標達成度の評価①. できた 2. ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった

b. 事務局組織の主要な活動内容 (根拠資料・記録) :

1. (庶務課) * 教職員の服務、福利厚生 * 教授会の運営 * 文書管理
* 諸儀式、諸行事 * 学長秘書業務 * 文書管理
2. (経理課) * 予算、決算 * 補助金、助成金事務 * 学生納付金等出納事務
* 教職員の給与 * その他会計
3. (教務課) * 教育課程の編成、授業 * 学生の履修 * 学業成績の整理、記録
* 卒業、成績証明 * 教室の運営 * 教務委員会の庶務
4. (入試広報) * 学生募集 * 大学案内、入試要項作成 * オープンキャンパス
* 高校訪問 * 入学試験実施
5. (キャリア支援課) * 学生の進路教育、就職指導、斡旋、求人先の開拓
* 就職状況調査、就職等の資料の収集及び保管 * 学生寮 * 奨学金
* 学生の保健衛生、生活指導、自治会活動、課外活動の助成
6. (研究協力課) * 教員の研究助成、研究業務、研究資格
* ライフサイエンス研究センター
7. (看護学科通信制課程事務課) * 通信制課程全てに係る事務
8. (図書館事務室) * 図書館運営全てに係る事務
9. (教職支援センター事務室) * 教職課程履修学生に係る進路指導、就職支援事務

次年度の課題

1. 3号館耐震改修工事的確な対応と実施 (庶務課)
2. 新会計基準のもとでの適切な予算・決算処理 (経理課)
3. カリキュラムの変更後の円滑な授業運営の推進 (教務課)
4. アドミッションポリシーに基づく入学者選抜の在り方等の検討 (入試広報課)
5. 健康管理室業務の充実及び健康に関する学生支援業務の確立 (キャリア支援課)
6. 私立大学等教育研究活性化設備整備事業補助金の活用法の検討 (研究協力課)
7. 学生募集のなお一層の広報の展開の推進 (看護学科通信制課程事務課)
8. 図書館の電子サービス拡充と利用認知向上の推進 (図書館事務室)
9. 教員採用試験情報の収集、分析を行い学生支援業務の充実 (教職支援センター事務室)

第2部 自己点検・評価委員会の年間活動方針報告

—教育イノベーション機構発足から2年間の活動報告—

1. 自己点検・評価委員会の年間活動方針について

自己点検・評価委員会の平成27年度年間活動方針は、「年次報告書による評価活動だけでなく、大学全体の目標に対する自己点検・評価を数年に1度実施する体制の構築」です。

大学全体の目標に対する取り組みのモデルケースとして、教育イノベーション機構を中心に推進されている「**教学マネジメント改革**」を採り上げました。

まず、教育イノベーション機構発足の経緯から平成28年3月末までの約2年間の活動を、従来の年次報告書様式にとらわれず記載していただきました。学科の活動から独立させて第2部として掲載することによって、教学マネジメント改革の目的、意義を、大学全体で再認識することをめざしています。

また、年次報告書という大学内外に公開される媒体に記録していくことにより、教育イノベーション機構の進行過程が明確に示され、改善、改革へのフィードバックに活用されることが期待できます。

次の段階として、進捗状況や課題を点検・評価し、改善へ向けたフィードバックができる体制の構築が必要となります。大学全体の点検・評価（ASP）を適正に実施していくには、自己点検・評価委員会の在り方、運営方法等の見直しも必要でしょう。

平成28年度からは、自己点検・評価委員長に松田副学長が就任され、ASPができる体制へと、第一歩を踏み出します。

今後の自己点検・評価活動に対し、大学教職員の皆様のご理解とご協力をいただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

平成27年度自己点検・評価委員長

井本 しおん

2. 教育イノベーション機構の活動報告

学長からのメッセージ

日本の、そして世界の社会状況が大きく変貌、流動化する中で、求められる専門職業人「いのちのサポーター」の育成教育はどうあるべきかを一から見直す機構として、二年前「教育イノベーション機構」が組織された。検討内容は当初の初年次教育や教養教育の拡充の範囲を超え、教学マネジメント全体の見直しに及んできた。これは開学以来の改革であるとともに、神戸常盤大学と同短期大学部100年の大計に関わるものである。今般の報告書ではまだ改訂カリキュラムの全貌は見えないが、基盤教育など核となる理念は固まってきた。これら理念の早急な具体化に期待するところ大である。

1. 教育イノベーション機構設立の経緯

本学は、神戸常盤大学として2学部3学科、神戸常盤大学短期大学部として1学科1課程を抱え、いずれも「専門職業人の育成」を教育の目標としている。しかし、先端の知識・技術を修得するためにカリキュラムが過密になり、人間形成のための知性や感性を磨く教育内容を加えにくい状況である。また、多様な入試形態により入学してくる学生達の学力のばらつきが是正されないまま、専門教育に入らなければならない状況もある。

一方現代社会からは、大学教育の質保証や質向上が求められている。大学の特色を活かし、入り口と出口を理念で一貫させる教育に向け、どのような学生を社会に送り出すのかを明言したディプロマ・ポリシー（DP）、DP 実現のための教育の仕組み・内容を示すカリキュラム・ポリシー（CP）、どのような学生に来てほしいのかのアドミッション・ポリシー（AP）、を明確に表現することが求められてきている。

以上のような幅広い課題に向け、教育体系を一から見直すため、平成26年4月に教育イノベーション機構が立ち上げられた。設立初年度の主な歩みは以下のとおりである。

- ・ 平成26年4月、第1回運営委員会で教育イノベーション機構計画が承認された。
- ・ 平成26年4月、上田学長より「神戸常盤大学基幹教育について」の諮問を受けた。
- ・ 平成26年12月25日、「神戸常盤大学基幹教育について（答申）」を提出した。
- ・ 平成27年1月、基幹教育科目の、理念・目的、目標、カリキュラムと科目、教育方法等を検討し、学長に原案を提出した。
- ・ 平成27年2・3月、基幹教育科目の、理念・目的、目標、カリキュラムと科目、教育方法等について、各学科との調整を行った。

このような歩みの中で教育イノベーション機構の中・長期計画を策定していった。

2. 教育イノベーション機構計画

長期計画：

幅広い教養を持つ学生を育て、いのちを共にする喜びを享受し、あらゆるいのちに共鳴できる人材育成を目指す。小さくてもきらりと輝く「いのちに寄り添う大学」として、教育の改革（イノベーション）を続ける。

中期計画：

1. 「学ぶ喜び、知る愉しさを学ぶ」と「学びのスタイルを転換する」の二つの目標を達成するために、次の教育改革に取り組む。
 - 1) 神戸常盤大学基幹教育の改善を、継続して行う。
 - 2) 学校法人玉田学園「未来に向けての防災宣言」を受け、「いのちに寄り添う大学」として地域と共に、幅広い教育を進める。
 - 3) 学生リーダー（SA：Student Assistant）の養成を、ボランティアセンター、地域交流センター、国際交流センターと協働して進める。
 - 4) 学生の能動的な活動を起こす教育方法の改善を目指し、教員の研修（FD委員会等との協働）を進める。
 - 5) 「10年後を見据えた学習成果・指標モデル構築」（保健科学・教育分野）を目指す（2020アクションプラン（仮称））。
2. 神戸常盤大学の使命と教育理念（AP、CP、DPを含む）を提案する。
3. その他

3. 平成26年度（初年度）の活動と自己評価

平成26年度は、開設初年度という意気込みもあり、また教育改革が幅広い分野にまたがることで、総花的な計画案となった（平成26年度年次報告書参照）。

機構開設記念講演会・研修会の実施、地（知）の拠点整備事業（Center Of Community: COC）、大学教育再生加速プログラム（Acceleration Program for University Education Rebuilding: AP）への主体的取組、機構教員研修会、ワーキンググループの作業、教職員自由学習会の開催、学生リーダーの養成、系列校への入学前教育、教育イノベーションニュースの発刊等、多岐に亘る幅広い計画を立てたため、教育改革については、「神戸常盤大学基幹教育について（答申）」を提出する（平成26年12月25日）に留まり、初年度は余りできなかった。

ただ、地（知）の拠点整備事業、大学教育再生加速プログラム、機構教員研修会、ワーキンググループの作業等一つの目標に向かった活動を通し、機構員の教育改革に対する考え方の共通理解と一体感が高まったことは評価できる。

4. 平成27年度の活動と自己評価

目標：

1. 神戸常盤大学基幹教育の教育目標を構築し進める。
2. 平成29年4月教育課程変更に向け、準備を進める。
3. 「未来に向けての防災宣言」を受け、地域交流センター、ボランティアセンター、国際交流センター等と協働し、教育改革の取組を始める。

主な活動内容：

- ・ 基幹教育科目の、理念・目的、目標、カリキュラムと科目、教育方法等について、運営委員会に提出した（平成27年第1回運営委員会）。
- ・ 2018年問題、2030年問題に備えるためには、教育改革推進が急務である。基本は教養共通科目と確認した（平成27年度教育イノベーション機構第8回議事録）。
- ・ 教育イノベーション機構会議による審議を重ねた（平成28年3月まで29回開催）。

- ・ ワーキンググループによる作業の推進：基幹教育カリキュラム改正案作成（平成 27 年 2 月より）、基幹教育改革・カリキュラム改正；DP 原案作成・なぜ改革が必要か（平成 27 年 9 月より）等幅広く検討した。
- ・ 基幹教育科目の理念・目的、目標、カリキュラムと科目、教育方法等について学長室会議で再度検討した。全学ディプロマ・ポリシー設定について検討した（平成 27 年 7 月）。
- ・ 基幹教育科目について、学部長、学科長と調整した（平成 27 年 9 月）。
- ・ 全学ディプロマ・ポリシー案を提出した（平成 27 年 10 月）。
- ・ 平成 27～28 年度教育イノベーション機構ロードマップを作成した（平成 27 年 10 月）。
- ・ 全学ディプロマ・ポリシー案について学長の意見を伺った（平成 27 年 11 月第 21 回会議）。
- ・ ディプロマ・ポリシーだけでは、改革が進まないと判断し、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシーについても、ワーキングチームにより検討を始めた（平成 27 年 11 月）。
- ・ ワーキングチームをタスクフォースチーム（3 名＋事務 2 名）に編成替し更に検討を進めた。ここで、学長の助言により「カリキュラム改革」に留まらない「教学マネジメント改革」とすることとなった。
- ・ 全学教育改革案を提示し、学部長、学科長に説明した（平成 28 年 1 月学長室会議）。
- ・ 全学教育改革案を各学科会議で提示（平成 27 年 2 月）。
- ・ 教学マネジメント改革第二弾の説明と質疑応答を行った（平成 28 年 2 月学長室会議）。
- ・ 人間教養科目群の科目作成上の留意事項について説明を受けた（平成 28 年 2 月 29 日：教務課長補佐より）。
- ・ 学部長学科長会議（平成 28 年 3 月 10 日）において、1) ときわ教育の全体像、ときわ教育目標（承認）、2) 全学ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシー（承認）、3) 全学 SSP・ASP（継続審議）、となった。
- ・ 人間教養科目群作成チーム（平成 28 年 2 月 29 日、3 月 10、14、28 日）4 回の会議で、「ときわ力（ときわコンピテンシー）」に基づく統合と整理を行い、人文科学：9 科目、社会科学：13 科目、自然・人間科学系および先端複合領域：10 科目、キャリア形成：4 科目（※要調整）、言語・情報系：10 科目、保健体育：4 科目（※要調整）、計 50 科目を設定し、学長の意見を伺うこととした。
- ・ 各学科独自科目については、学科毎に提出を依頼した。
- ・ M・N 科の専門科目調整は、副学長会議（平成 28 年 3 月 24 日）で進めた。
- ・ その他、短期大学部看護学科通信制課程と協力し、平成 27 年度リカレント講座「法的な目で事件を見る」を開催し、123 名の参加を得た。また、系列校の入学前教育を継続実施した（平成 27 年 12 月、平成 28 年 2 月）。

活動に対する自己評価：

1. 神戸常盤大学基幹教育の教育目標を構築し進めるについて

各学科の教育課程は、資格に関わる特質上、また、設置年度が異なりそれぞれの学科独自の教育目標が掲げられており、全学共通教育の目標を設定するのに時間を要した。しかし、機構員の努力、学長室の支えと各学科の協力で、ときわ教育の全体像、ときわ教育目

標、全学ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシーが承認されたことは、評価したい。基幹教育を基盤教育と改め、1については、ある程度まで進めることができた。

2. 平成 29 年 4 月教育課程変更に向け、準備を進めるについて

「ときわ力（ときわコンピテンシー）」育成のための科目検討については、平成 28 年度に係るため、道半ばである。

3. 「未来に向けての防災宣言」を受け、地域交流センター、ボランティアセンター、国際交流センター等と協働し、教育改革の取組を始めるについて

1 年生全員に市民救急救命士資格を取得させるに留まり、余りできなかった。

4. その他

本学初めての特許申請が受理されたのは、大学教育再生加速プログラムで議論された成果と考える（発明の名称「カラーボード装置」：特許 5800101 号）。

5. 教育イノベーション機構計画案（平成 28 年 1 月 12 日作成）

平成 27 年度までの活動を踏まえ、平成 28 年度以降の活動に向けて教育イノベーション機構計画を、以下のように再整理した。

基本的方向性：

大学を卒業した後も永遠に持続する「学ぶ力」をもち、いのちに寄り添うことができる人材を育む教育を推進する。そのために、幅広い教養を持つ学生を育て、小さくてもきらりと輝く「いのちに寄り添う大学」を目指し、教育の変革（イノベーション）を続ける。

成果目標：

「神戸常盤大学の基幹教育について（答申）」をふまえ、主体的に問いを立て自ら探究する力すなわち、「卒業後も持続する学ぶ力の育成」を理念と目的とし、「学ぶ喜び、知る愉しさを学ぶ」と「学びのスタイルを転換する」の二つの目標を達成するために、次の中期計画に取組む。また、神戸常盤大学の使命と教育理念（DP、CP、AP を含む）を提案する。

中期計画：

- 1) 神戸常盤大学の教学マネジメント改革の改善を、PDCA サイクルで継続して行う。
- 2) 学校法人玉田学園「未来に向けての防災宣言」を受け、「いのちに最も寄り添う大学」として地域と共に、幅広い教育を進める。
- 3) 学生リーダー（SA：Student Assistant）の養成を、ボランティアセンター、地域交流センター、国際交流センターと協働して進める。
- 4) 学生の能動的な活動を起こす教育方法の改善を目指し、教員の研修（FD 委員会等との協働）を進める。
- 5) 「10 年後を見据えた学習成果・指標モデル構築」（保健科学・教育分野）を目指す（2020 アクションプラン（仮称））。

資料

全学ディプロマ・ポリシー（案）

神戸常盤大学及び短期大学部は、建学の精神にもとづき、国家及び地域社会の発展に寄与するため、「知性と感性を兼ね備えた専門職業人の育成」を目指している。本学は、他大学に例を見ない「未来に向けての防災宣言」（平成 26 年 12 月 20 日学校法人玉田学園）に象徴されるように、

開学以来「いのちに寄り添う大学」としてその社会的責務を果たしてきた。こうした歴史と精神を踏まえ、本学では、教育課程終了後授与する学位を、以下に示す

1. 学部・学科に所定期間在学して、当該学部学科のDPを達成する。
2. 卒業までに、本学学生が、それぞれの課程を通して常盤力を身につける。

全学カリキュラム・ポリシー（案）

神戸常盤大学及び短期大学部は、「常盤教育目標」及び「ディプロマ・ポリシー」のもと、「全学共通科目」及び「専門科目」を設置し、そのカリキュラムを次の方針に沿って編成する。すべての学生が履修する全学共通科目のカリキュラムとして、「学び始め科目群」「人間教養科目群」「創造実践科目群」の科目及びその他必要と認める科目を設置する。各学部・学科に設置される専門科目のカリキュラムは、各学部・学科が定めるカリキュラム・ポリシーに基づき編成する。

以上の方針に沿い編成されるカリキュラムは、その実施を通じて、「ディプロマ・ポリシー」に掲げる学修目標の達成が目指される。また科目の実施においては、「（常盤コンピテンシー）」に示される諸能力のうち、当該科目で育成すべき能力をシラバスに明示し、その育成が目指される。

なお、学修の結果と過程については、「アセスメント・ポリシー」に基づき適正かつ公平に評価を行い、その評価結果に応じてカリキュラムやその実施のあり方に対して改善を行う。

全学アドミッション・ポリシー（案）

神戸常盤大学及び短期大学部(以下、大学)は、「常盤教育目標」及び「ディプロマ・ポリシー」に定める人材を育成するため、複数の受験機会と多様な入試方法により入学者選抜を行う。入試では、いのちに寄り添う意欲と資質を備え、知性と感性を磨き、伸ばそうと考える人材を求める。

全学スチューデント・サポート・ポリシー（SSP）

現在検討中

全学アセスメント・ポリシー（ASP）

現在検討中

第3部 本年度の「学生による授業評価」学科別のまとめ

概要

本学では、自己点検・評価委員会が中心となり、非常勤を含めた全教員に対して学期毎に学生による授業評価を実施し、評価結果を教員が今後の授業改善に活用する取り組みを進めている。

さらに、教員個人の取り組みに留まらず学科及び大学全体のFD活動に資するべく、各学科の自己点検・評価委員は「学生による授業評価」結果の学科別年間平均値データを解析するとともに、各教員の「授業評価報告書」から授業改善策をとりまとめ、調査結果を作成している。調査結果は学科内FD活動に活用するとともに年次報告書に掲載し、授業改善に向けた情報を大学全体で共有することをめざしている。

調査方法

昨年度と同様、非常勤を含め全教員の原則全ての授業を対象に、以下の要領で実施した。

- 1) 各教員は、各学期の最終授業時にアンケートを実施する。アンケートは無記名である。設問に対し5段階評価（高得点ほど高評価）で回答するものと、記述式のものがある。
- 2) 前期の評価結果は後期のはじめに、後期の評価結果は年度末に、各教員に通知される。
- 3) 各教員は、評価結果を検討し今後の授業改善対策等を「授業評価報告書」として学科長に報告するとともに、「学生へのメッセージ」を作成し学生にフィードバックする。
- 4) 「学生へのメッセージ」は、冊子を学内3箇所配備するとともに、学内共有フォルダに掲載しているため、学内コンピューターで学生が随時閲覧できる。
- 5) 自己点検・評価委員会は、「授業評価報告書」に記載された全学科の授業改善策をとりまとめ、学科会議等で提示することにより授業改善のための情報共有を図る。
- 6) 各学科の自己点検・評価委員は、1年間の授業評価平均値の学科別集計データを解析するとともに、「授業評価報告書」に基づく学科内の授業改善に向けた取り組みを「学科の授業評価報告書」としてまとめ、年次報告書に掲載する。

アンケートの設問について

1. 学科共通（CCNを除く）の設問項目：設問3～16：5段階評価で回答
2. 学科毎の設問項目：5段階評価で回答
3. CCN（看護学科通信制課程）の設問項目：5段階評価で回答
4. 記述式で回答する設問（全学科・過程共通）

1. 学科共通（CCNを除く）の設問項目：

問		設問分
I 学生自身	3	この授業への出席状況は？
	4	この授業に関連して、授業以外に学習した時間。（授業1回あたりの平均時間）
	5	この授業に意欲的に参加した。
II 授業内容	6	授業の到達目標がシラバスや授業でわかりやすく示された。
	7	毎回の授業内容はよくまとまっていて、よく理解できた。
	8	授業は知的関心や好奇心を起こす内容であった。
III 授業方法	9	聞きやすい話し方だった。
	10	板書、スライド、教材などの使い方は、わかりやすく適切だった。
	11	授業の進行速度は適切だった。
	12	学生の質問や意見への対応が十分になされていた。
IV 学習成果	13	自分にとって新しい考え方・発想を得ることができた。
	14	授業で扱った分野に対する基本的な知識を得ることができた。
	15	自分で調べ、考える姿勢が身についた。
V 総合評価	16	この授業を受けて満足している。

2. 学科毎の設問項目：

医療検査学科

M	17	【実習科目】 レポートや課題などのチェックは適切だった。
	18	【実習科目】 器具・備品・試薬などの準備は適切だった。
	19	【実習科目】 スタッフの補助・対応は適切だった。

看護学科

N	17	【演習科目】到達度の確認は適切であった。
	18	【演習科目】(複数教員授業の場合)教員間の連携、対応は適切であった。
	19	抽象的な内容については、適度に事例を示して具体的な説明があった。
	20	授業内容は、教員独自の意見や考えを適度に示し、心に響くものであった。

こども教育学科

E	17	教員の学生への対応は公平であった。
---	----	-------------------

口腔保健学科

O	17	【実習科目】実習器材や材料の準備は適切に行われた。
	18	【実習科目】教員の人数や配置は適切であった。

3. CCN (看護学科通信制課程) の設問項目 :

カテゴリー I (学生自身)	問3	あなたはシラバスを読んで授業内容を確認して臨みましたか。
	問4	3日間の授業に意欲的に取り組みましたか。
	問5	この授業を受けて今後の学習に意欲的に取り組みますか。
カテゴリー II (授業内容)	問6	授業内容は無駄や重複がなく順序立てて整理されていた。
	問7	専門的内容に対し、わかりやすい説明があった。
	問8	抽象的な内容については適度に例を示して具体的な説明があった。
	問9	授業内容は表面的ではなく教員自身の意見や考えを適度に示し、心に響くものであった。
カテゴリー III (授業方法)	問10	聞きやすい話し方だった。
	問11	授業の進行速度は適切だった。
	問12	授業の要点・テーマ・目的がわかりやすい展開であった。
	問13	板書・スライド・教材などの使い方は適切だった。
	問14	ノートをとるための時間はちょうど良かった。
カテゴリー IV (学習成果)	問15	学生への質問の量、タイミングや方法は適切であった。
	問16	自分にとって新しい考え方・発想を得ることができた。
	問17	授業で扱った分野に対する基本的な知識を得ることができた。
カテゴリー V	問18	自分で調べ、考える姿勢の大切さに気づいた。
	問19	この授業を受けて満足している。

(総合評価)		
--------	--	--

4. 記述式で回答する設問（全学科共通）

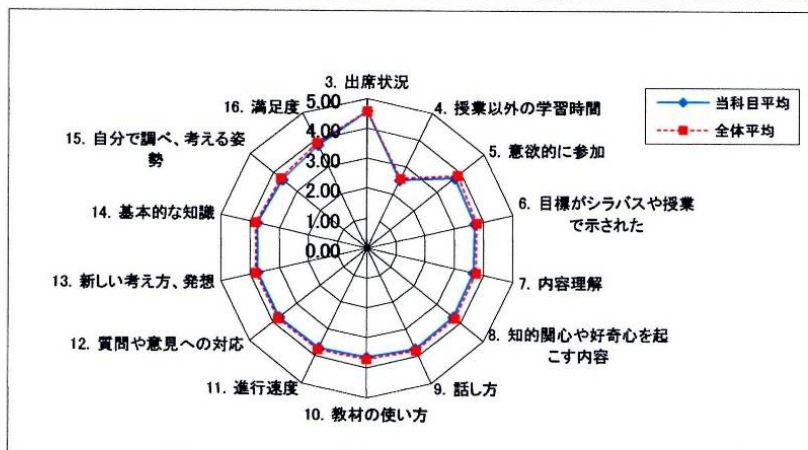
- ① この授業でよいと思った点があれば書いてください。
- ② この授業で改善すべきだと思った点があれば書いてください。
- ③ 教室、教育設備等で改善すべき点があれば書いてください。

「学生による授業評価」結果の通知様式

医療検査学科全体の評価結果を例示する。教員個人用では、右から2列目（青字）に教員個人の評価点、右端（赤字）に学科全体の評価点が示される。

2013年度前後期 学生による授業評価調査

科目コード		科目名				担当教員名				受講者数	回答者数			
M		医療検査学科 全体								10093	8679			
1	所属学科	M科	N科	E科P科	O科	2	学年	1年生	2年生	3年生	4年生	当科目平均	全体平均	
		8556	87	0	1			3609	2424	1959	626			
問	設問文						5	4	3	2	1	当科目平均	全体平均	
							そう思う	どちらかといえば思う	どちらでもない(ふつう)	どちらかといえば思わない	そう思わない			
I 学生自身	3	この授業への出席状況は？						すべて出席	1回欠席	2回欠席	3回欠席	4回以上欠席	4.58	4.58
	4	この授業に関連して、授業以外に学習した時間。(授業1回あたりの平均時間)						2時間以上	1～2時間	30分～1時間	30分未満	0時間	2.51	2.56
	5	この授業に意欲的に参加した。						1993	2890	3235	350	82	3.74	3.87
II 授業内容	6	授業の到達目標がシラバスや授業でわかりやすく示された。						1694	3109	3473	304	81	3.70	3.77
	7	毎回の授業内容はよくまとまっていて、よく理解できた。						1646	3241	3041	619	121	3.65	3.74
	8	授業は知的関心や好奇心を起す内容であった。						1752	3236	3049	490	138	3.69	3.77
III 授業方法	9	聞きやすい話し方だった。						2137	3035	2786	556	156	3.74	3.81
	10	板書、スライド、教材などの使い方は、わかりやすく適切だった。						1791	3047	3027	613	173	3.66	3.72
	11	授業の進行速度は適切だった。						1862	3206	3019	444	136	3.72	3.77
	12	学生の質問や意見への対応が十分になされていた。						1962	2967	3312	313	103	3.74	3.80
IV 学習成果	13	自分にとって新しい考え方・発想を得ることができた。						1786	3325	3133	331	77	3.74	3.81
	14	授業で扱った分野に対する基本的な知識を得ることができた。						1749	3487	3045	299	75	3.76	3.81
	15	自分で調べ、考える姿勢が身についた。						1490	3015	3614	424	108	3.62	3.69
V 総合評価	16	この授業を受けて満足している。						2111	3034	2856	339	96	3.80	3.87



分野	当科目平均	全体平均
I 学生自身	3.6	3.7
II 授業内容	3.7	3.8
III 授業方法	3.7	3.8
IV 学習成果	3.7	3.8
V 総合評価	3.8	3.9

神戸常盤大学・神戸常盤大学短期大学部

各学科の調査結果

1. 保健科学部 医療検査学科

1. 授業評価実施数

- ① 授業評価アンケート回答数（延べ人数）：8936名（受講者数10420名、回答率85.8%）
- ② うち学科長に報告書が提出された科目数：98科目

2. 学生による授業評価の集計結果

1) 設問別回答分布

平成27年度前後期 医療検査学科の学生による授業評価調査の設問別回答分布および平均値を図1に示す。

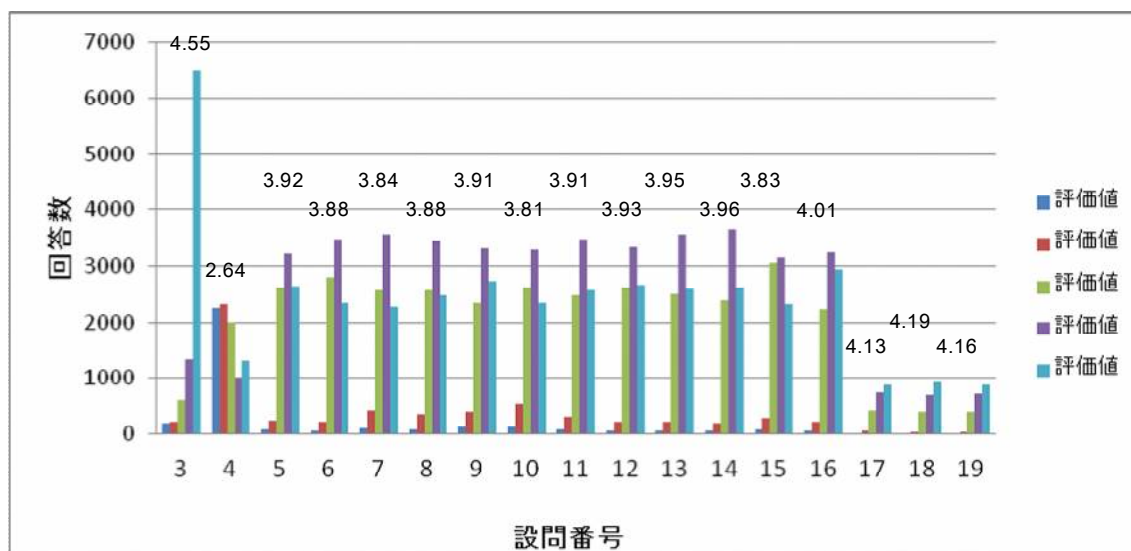


図1 設問別回答分布および平均値

2) 各設問の平均値

図1に示すように、問5～19のうちで平均値が高い設問は、問17（実習レポート等のチェック・指導）、問18（実習準備）、問19（実習スタッフ）と、実習科目に対するものであった。実習科目に関する設問を除くと、問16（満足度）、問14（基本的な知識を得た）が高かった。一方、平均値の低い設問は問10（板書、スライド、教材などの使い方はわかりやすく適切だった）、問15（自分で調べ考える姿勢を身につけた）であった。問3（出席率）及び問4（学習時間）は他の設問と選択肢が異なるため比較からは除外している。

平成27年度の設問別平均値を平成25、26年度と比較した（図2）。多くの設問で今年度

の評価の方が高い値を示し、評価が上昇傾向にあることがわかる。

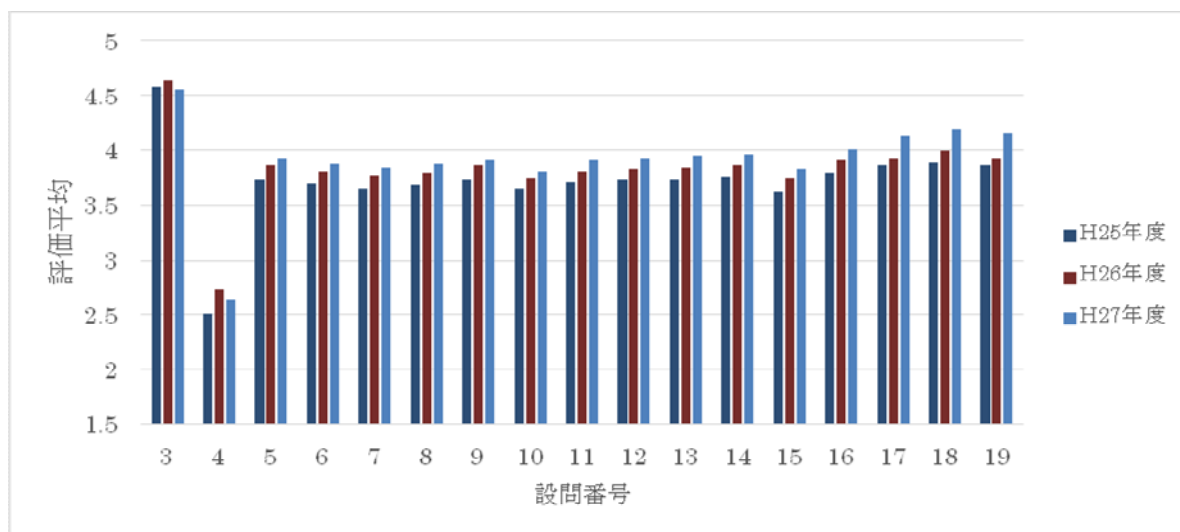


図2 設問別平均値の年次推移

3) カテゴリー別平均値

平成27年度の Kategorie別平均値を表1に示す。カテゴリーIの学生自身がやや低くなっているが、設問3（出席率）と設問4（学習時間）は他の設問と選択肢が異なるため、一概に比較はできない。

平成25、26年度の結果と比較すると、カテゴリーIを除いて評価結果が上昇していることが分かる（表1、図3）。

表1 カテゴリー別平均値

	I 学生自身	II 授業内容	III 授業方法	IV 学習成果	V 全体評価
H25年度	3.60	3.70	3.70	3.70	3.80
H26年度	3.75	3.79	3.79	3.82	3.96
H27年度	3.70	3.87	3.89	3.91	4.01

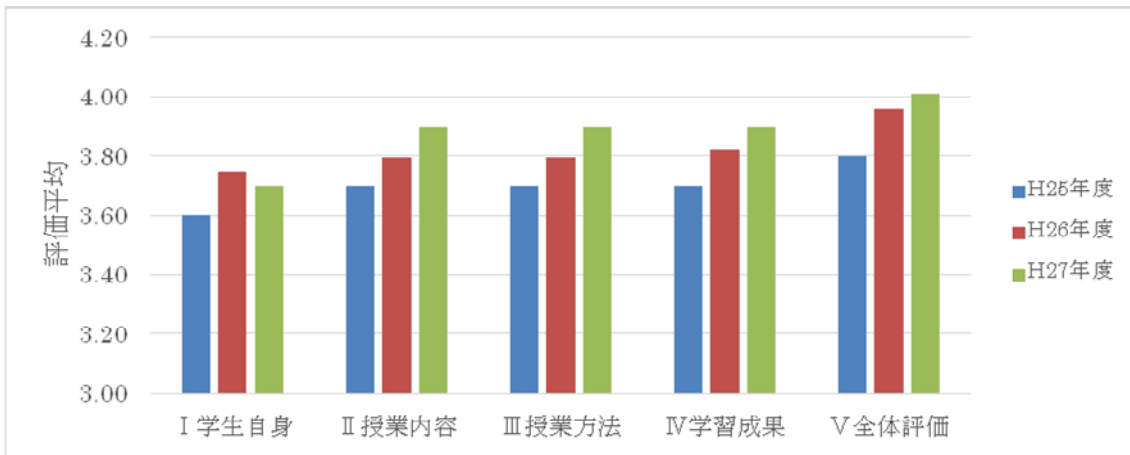


図3 カテゴリー別平均値の年次推移

3. 集計結果の解析と問題の所在

1) 設問・カテゴリー別評価とその年次推移

設問別にみて高い評価を得たのは、実習科目に関する設問 17～19 で評価平均は 4.13～4.19 であった。次いで高い評価を得たのは、設問 16（満足度：評価平均 4.01）、設問 14（基本的な知識を得た：評価平均 3.96）、設問 13（新しい考え方・発想を得た：評価平均 3.95）、設問 12（学生の質問・意見への対応：評価平均 3.93）、であった。一方、評価が相対的に低かったのは、設問 10（板書、スライド、教材などの使い方が適切だった：評価平均 3.81）、問 15（自分で調べ、考える姿勢を身につけた：評価平均 3.83）であった。

この結果から、例年通り実習科目については担当教員の指導が学生に高く評価されていることがわかる。一方、学習成果に対する評価では、学生は授業を通じて「基本的な知識」を得たと感じてはいるが、「自分で調べ、考える姿勢」は知識ほどには身につけていないとしている。但し、何れの設問も評価平均が 3.8 以上と肯定的回答が多かったことから、特に大きな問題点はないものと考えられる。

設問・カテゴリー別評価の年次推移をみると、学生自身に関する評価以外は何れについても昨年度を上回る高い評価であり、全体平均（全学科・学年）と比べてみても相対的に高い結果となっている。

2) 学年別評価

前期及び後期に得られた全ての授業評価アンケートを学年別に集計し、比較した。その結果、4年生（平成 24 年度入学生）の全評価平均が他の学年よりやや低く、2年生（平成 26 年度入学生）の評価がやや高い傾向にある（表 2-1）。昨年度（表 2-2）、一昨年度（表なし）の解析結果でも平成 24 年度入学生の評価は他の学年よりやや低く、入学年度によって授業評価の評価基準は変動する事がわかる。また、評価が低い学年は設問 4 の授業以外の学習時間評価平均も低くなっている。なお、1年次の評価結果は総じて高い傾向にあり、

平成 27 年度入学生の評価を前期・後期で比較してみると前期の評価が高かった。その要因はいくつか考えられるが、その一つとして大学に入学して初めて回答する授業評価アンケートへの取り組み方が関係していると思われる。

表 2-1 平成 27 年度 学年別評価結果

学年 (入学年度)	カテゴリー別評価平均					全評価 平均	*設問 4 学習時間 評価平均
	I	II	III	IV	V		
1 (H 27)	3.66	4.08	4.11	4.09	4.26	4.04	2.45
2 (H 26)	3.84	3.88	3.87	3.96	4.00	3.91	2.88
3 (H 25)	3.59	3.63	3.70	3.67	3.80	3.68	2.56
4 (H.24)	3.38	3.64	3.72	3.68	3.73	3.63	2.34

*設問 4 : 授業以外の学習時間評価 5: >2 時間 4:1~2 時間 3:30 分~1 時間 2:<30 分 1:0 時間

表 2-2 平成 26 年度 学年別評価結果

学年	カテゴリー別評価平均					全評価 平均	設問 4 学習時間 評価平均
	I	II	III	IV	V		
1 (H 27)	3.86	4.00	4.00	4.03	4.11	4.00	2.66
2 (H 26)	3.74	3.69	3.73	3.76	3.89	3.76	2.79
3 (H 25)	3.47	3.54	3.60	3.54	3.61	3.55	2.37
4 (H.24)	3.57	3.77	3.79	3.79	3.88	3.76	2.67

3) 授業形態別評価

前期及び後期に得られた全ての授業評価アンケートを授業形態別に集計し、比較した(表 3-1)。その結果、実習科目は講義・演習科目より全てのカテゴリーにおいて評価が高く、授業外の学習時間評価平均も講義・演習より高くなっている。座学中心の講義・演習より、実際に手を動かしてデータを得る実習の方が達成感を得やすく、また授業時間以外にレポート作成などを行うため、評価が高くなるのは当然であろう。このことから授業評価は全体平均で比較するよりも授業形態別で評価すべきと考える。

次に、同様に授業形態別評価を行っていた平成 24 年度の解析結果(表 3-2)と比較すると、実習、講義・演習科目とも全てのカテゴリーにおいて評価が高くなっている。特筆す

べき点は設問4の授業以外の学習時間評価平均で、講義・演習ではほぼ変わらないものの、実習においては平成24年度の2.36から1.38ポイント上がり、3.74と高くなっている。これは、以前より授業改善策に挙げられていた「レポートの細かい添削指導や個別指導」、「優秀なレポート、課題を公開する」などの効果ではないかと推察される。

表 3-1 平成 27 年度 授業形態別評価結果

形態	カテゴリー別評価平均					全評価 平均	設問 4 学習時間 評価平均
	I	II	III	IV	V		
講義・演習	3.54	3.82	3.87	3.86	3.97	3.81	2.34
実習	4.22	4.02	3.99	4.08	4.15	4.09	3.74

表 3-2 平成 24 年度 授業形態別評価結果

形態	カテゴリー別評価平均					全評価 平均	設問 4 学習時間 評価平均
	I	II	III	IV	V		
講義・演習	3.47	3.59	3.64	3.57	3.68	3.59	2.36
実習	3.59	3.66	3.82	3.73	3.80	3.72	2.36

4. 授業の改善策の検討

今年度も学科長宛に提出された授業評価報告書に、多くの授業改善策が提案された。今年度はmanabaが導入されその活用方法や改善点などの報告もあるが、導入している学科教員は少ないようである。提出された報告書の中から、効果があったと記載されていた改善策や授業における問題点とされるものを以下に示す。

<授業内容>

- ニュースなどの最新の事例を授業に取り入れる
- 少しポイントを絞って解説する
- 身近な話題を取り入れる

<授業方法>

- 図での解説がわかりやすく理解しやすい
- 視聴覚教材を取り入れることで理解が深められた
- 改善策の一つであったグループワークを取り入れた点が評価された。グループでまず課題を仕上げ、それで解決できない点を教員が見つけて、その部分を学生に戻しグループではなく個人で取り組む方法だった。学生も自分たちの問題点を明確に捉えることができ、教員側も学生が行き詰っている箇所をピンポイントでおさえることができたので、学生の理解を助ける上で効果があったのではないかと推察される。

- manaba の活用
- その日の授業でクリアすべき課題の提示（演習）
- 医療検査学科の専門教員による講義（語学）や上級生による科目の必要性の話し
- 出席用紙にコメントや質問を書いてもらい、翌週に回答
- 講義内容毎に「まとめ」と「設問」等を頻繁に取り入れ、重要なポイントとなる知識を学生自身が把握できるようにする。
- 各学生が作成した学修内容のまとめを用いた発表会の実施（アクティブラーニング）
- 学生の反応を確かめながらの授業進行
- 重要な内容は丁寧に説明する
- 実習機器を増やすことで 1 グループあたりの人数を少なくして、学生が手を動かす機会を増やす
- スライドだけでなく、学生の反応を見ながら黒板での説明を追加する

<課題・レポート等>

- 提出をすべて manaba 上で実施することで提出管理がリアルタイムで可能
- 復習課題を定期的に出す
- 基準に達するまで何回もレポートを再提出させる（わからないまま終わってしまう事態を改善）

<視聴覚・配布資料・テキスト>

- manaba 活用により欠席学生でも授業内容の把握および配布ファイルを入手可能
- 配布プリント（サブノート）に出来るだけ多くの図表を掲載し、板書を写す作業を軽減

<その他、問題点>

- どのレベルの学生に合わせるべきか、判断に迷う
- 実習を欠席あるいは未提出のレポートがあっても、筆記試験の成績次第では単位がもらえる現行制度には問題があるので、レポート点と平常点のウェイトを上げ、実習を欠席、もしくはレポートが未提出の場合には筆記試験の成績だけでは単位が取れないように変更
- 人数が多いのでどうしても手が届かないところもある

授業改善に向けての意識、努力は永続的に必要ではあるものの、個人で思いつく改善策には限りがある。平成 25 年度から、全学科より前期に提出された改善策を学科会議で提示することで、後期の授業に活かせるようにしている。後期で挙げられた改善策を含めて、学科として取り組むべきと考えられるものについては学科内 FD 研修として計画を立てるなど、提案されている改善策を有効に活用していきたい。

なお、授業評価結果は年々上昇している。これは各教員が授業評価を真摯に受け止め、学生の学修に対して効果的な授業を構築すべく継続的な授業改善に取り組んでいる結果であると思われる。

2. 保健科学部 看護学科

1. 授業評価実施数

- ①授業評価アンケート回答数（延べ人数）6,374名
- ②学科長に報告書が提出された科目数：74科目

2. 学生による授業評価の集計結果

1) 設問別授業評価結果

各設問別にみても、各設問において平均値は全て 3.8 以上と高い評価を得ている。特に 4.0 以上と高い評価を得た設問は、問 5（意欲的な授業参加）、問 8（知的関心や好奇心を起こす授業内容）問 9（聞きやすい話し方）問 13（新しい考え方・発想が得られる成果）問 16（授業の満足度）であった。一方問 3（出席状況）は高いが、問 4（授業一回あたりの自己学習時間）は 3.0 と低い。平成 27 年度の設問別平均値を平成 26 年度と比較した（図 1）。ほぼ変わらない結果となっている。



図 1 設問別平均値の年次推移

2) カテゴリー別平均値

平成 27 年度のカテゴリー別平均値を表 1 に示す。

平成 27 年度のカテゴリー別平均値は、Ⅰ学生自身、Ⅱ授業内容、Ⅲ授業方法のいずれもが平均 3.9 である。昨年と比較するとⅡ授業内容とⅢ授業方法が 0.1 低くなっているが、Ⅳ学習成果とⅤ総合評価において、4.0 と高い評価を得た。

表 1 カテゴリー別平均値

	Ⅰ 学生自身	Ⅱ 授業内容	Ⅲ 授業方法	Ⅳ 学習成果	Ⅴ 総合評価
平成 27 年度	3.9	3.9	3.9	4.0	4.0
平成 26 年度	3.9	4.0	4.0	4.0	4.1

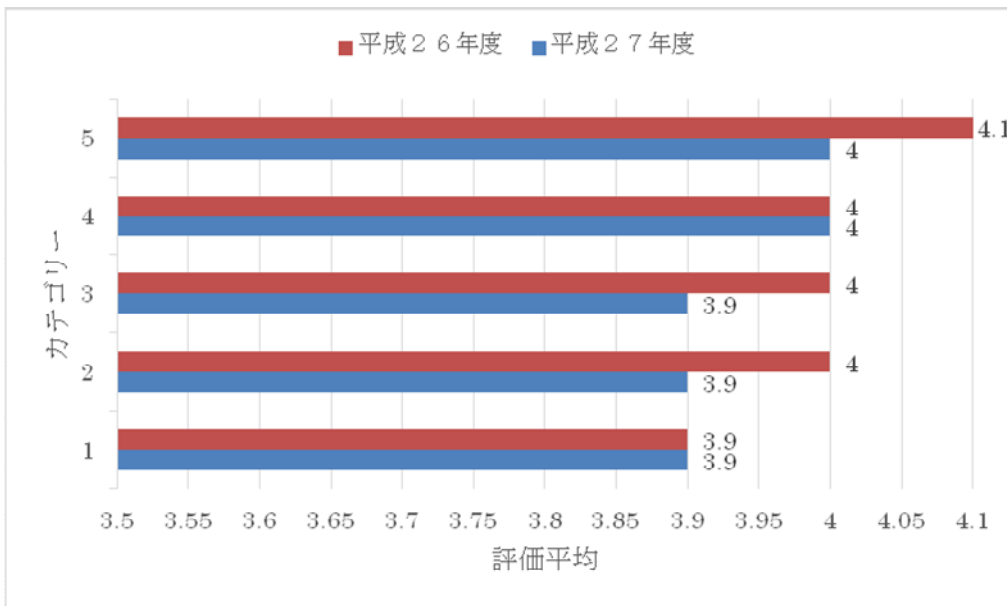


図2 カテゴリー別平均値の年次推移

3) 学年別評価

学科長に提出された教員の授業評価報告（兼任教員・非常勤を含む）について前期および後期に得られたすべての授業評価アンケートを学年別に集計し、比較した（表2・表3）。教員の自主的な提出科目74科目の平均であることから表1の数字と異なる結果となっているが、全体的にみると同様の結果を示している。常勤と非常勤の評価が混在していること、他学科教員の兼任授業評価も含めた結果である。学年別評価は以下の通りである。

学年ごとの集計結果からは、カテゴリー別評価の平均値は3年生と4年生においては5つのカテゴリーが4.0以上となっている。しかし4年生のカテゴリーⅠの出席状況、学習時間、意欲的な参加という項目については、3.9であった。各学年共に授業満足度のカテゴリーⅤについては、4.0以上と昨年よりも評価が高い。尚本授業評価は、実習科目は含まれていない。

表2 平成27年度 学年別評価結果

学年	カテゴリー別評価平均値				
	I	II	III	IV	V
1	3.77	3.88	3.87	3.89	3.98
2	3.92	3.48	3.48	3.66	4.01
3	4.17	4.34	4.19	4.37	4.42
4	3.90	4.34	4.26	4.20	4.16

表 3 平成 26 年度 学年別評価結果

学年	カテゴリー別評価平均値				
	I	II	III	IV	V
1	3.71	3.89	3.88	3.81	3.97
2	3.97	4.21	4.26	4.25	4.32
3	3.91	3.72	3.71	3.76	3.79
4	4.14	4.24	4.21	4.21	4.21

3. 集計結果の分析と問題の所在

個々の状況の平均値を検討することには限界はあるものの、学科の全体的な傾向として集計結果を受け止め、専任教員だけでなく、非常勤教員を含めて授業評価に取り組んでいく。本年度は本調査の結果をもとに検討した授業改善案をまとめて、学科会議で共有した。5 カテゴリーの回答の平均値が昨年よりも 0.06 低い結果ではあったが 3.94 と高い評価であり、カテゴリーⅣ（学習成果）カテゴリーⅤ（総合評価）が昨年に続き 4.0 と高い結果となっているのは、個々の教員が継続して授業改善に取り組んだ結果であると推察され、良好な成果である。しかし一部全体評価のなかで、授業評価が「3.0」以下の授業科目も存在するので、今後も積極的な授業改善の具体的な検討を継続する必要がある。

2) カテゴリーⅠ（学生自身）は、3.9 と昨年と変わらないが、学生の学習時間は依然十分とはいえ、主体的に取り組めるように学習の動機づけを今後も継続していく必要性があることが示唆された。

3) 学生の授業評価は、担当教員がその結果を真摯に受け止め、自己の教育活動を振り返るきっかけになるもので、多くの教員が具体的な授業改善につながる取り組みを実践している。学科長に授業評価報告を提出するだけでなく、効果的な授業改善案について学科内の情報共有化を図ることや姿勢が望ましい教育体制の基盤づくりの核となっていくと考える

4. 授業の改善策の検討（資料 1）

今年度も「学生による授業評価」を受けて学科長に提出された授業評価報告書に、多くの授業改善策が提案された。これらの改善策をまとめたものを表 1 に示す。ほとんどの教員が、改善を要すると考えられる評価項目の改善策を具体的に推進している。学科全体として、実際に学生の授業評価が年々上昇してきていることは、個々の教員にとっても励みとなっている。しかし学生自身の自己評価項目「意欲的な授業参加態度」や「自己学習時間」が低い学生も存在するので、授業参画への動機づけや主体的な学習による授業理解度の向上に向けて、個別的な教員側の支援が必要である。授業評価の方法については、授業形態や科目の特性も大きいため複雑な課題もあるが、学科会議での教員相互の情報交換や FD 研修などを通して教員自身が主体的な授業改善に向けての自己努力を継続していくことが重要である。

資料1. 平成27年度 N科・授業改善策のまとめ

授業における現在の課題	改善策
<カリキュラムの内容>	
・受講生が昨年よりも減少した。(選択科目)	・受講者数の増加に向けては、先行する授業において興味関心を高める。
・学習速度(後期の実習)や就職を考えると、受講者を増やしたい。	・授業概要やその方法を事前に理解して他の必修・選択科目と平行して受講しても負担感がないことを理解してもらるように導入する。
・「もう少し時間がほしかった」という意見があった。保健師課程が選択性になって初めての授業なので、詰め込みすぎた。	・実習時期や他との兼ね合いも考慮しながら開講回数と授業内容を見直し、時間をかけて学んでいける体制作りを考えていきたい。講義内容は演習や実習で見出した健康課題と結びつけながら展開すると理解に繋がると思う。
・学生達が疲れている週半ば(水曜5限)という時間設定	・一考する
・テーマが分かりづらいなどの記述が見られた。	・より詳細な説明を行い、学生たちの理解を進めることも必要
<授業方略の選択>	
・受講生が少人数となった場合の学習効果・学習成果を考えた方略。	・演習内容を増やすなど展開を変更できたが多くはシラバス通りになった。 ・少人数で授業内容を深め充実できるようなグループワーク。
・知識詰め込み型の授業になった。1回の授業で教員が変わると授業のペースが乱れ、集中力の乱れにつながった。	・個別の意見を引き出せる授業展開への変更を臨機応変に行っていく。 ・授業内容の精選をし、一方的に与える内容は減らしていく。 ・担当する主教員を決め、一人が責任を持って担当する。
・学生の主体性・単位取得のみが目当てのような学生の態度。	・学生が自由に発想する機会を与え、IBL形式のグループワークを取り入れ主体的な学習につなげられた。教員もIBLの効果的な進め方の学習と検討を重ねつつ、今後増やしていく。
・学習時間、能動的学習姿勢の高揚を図りたい。	・学生が学習する、他の科目も含めた、全体を考えたの時間配分が必要。 ・manabaの活用などで個に対応した指導。
<授業評価>	
・レポートの提出について	・レポート提出は自主的に提出させてきたが、レポート点が加味されることをシラバスだけでなく、口頭でも伝えて周知させたい。
・定期の筆記試験結果	・各単元終了時にミニテストを実施し、その結果定期試験の平均点は昨年より高得点となった。ミニテストは学生がポイントを押さえて学習をすることを支援できたと考える。来年も継続させたい。
<その他>	
・学生-教員の相互作用	・毎回の感想・質問は提出させ、全員目を通し、次の授業で返す。 ・manabaを用いた双方向・アクティブラーニングの取り組み
・複数教員で学生指導を行っている科目では、学生の取り組みや教員の調整など、ココの学生への指導状況に差異が生じている。	・次年度検討
・自由記載に、「プリントより自分のやり方(絵を描くなど)で行いたい」と要望があった。	・学生の主体性を尊重した学習方法を検討し、より意欲的に学んでほしい。 ・当科目として学ばせる内容は共通認識できるように教員間の意見交換を充実させていく。
・教材について	・事前学習としてVTRの視聴を課すと授業が分かりやすかったという意見があった。視聴していない学生にとっては授業が早かったようである。

3. 教育学部 こども教育学科

1. 授業評価実施数

- ①授業評価アンケート回答数（学生の延べ人数）：6430 名
- ②うち学科長に報告書が提出された科目数：121 科目

2. 学生による授業評価の集計結果

1) 設問別回答分布

平成 27 年度前後期こども教育学科の学生による授業評価調査の設問別回答分布を図 1 に示す。

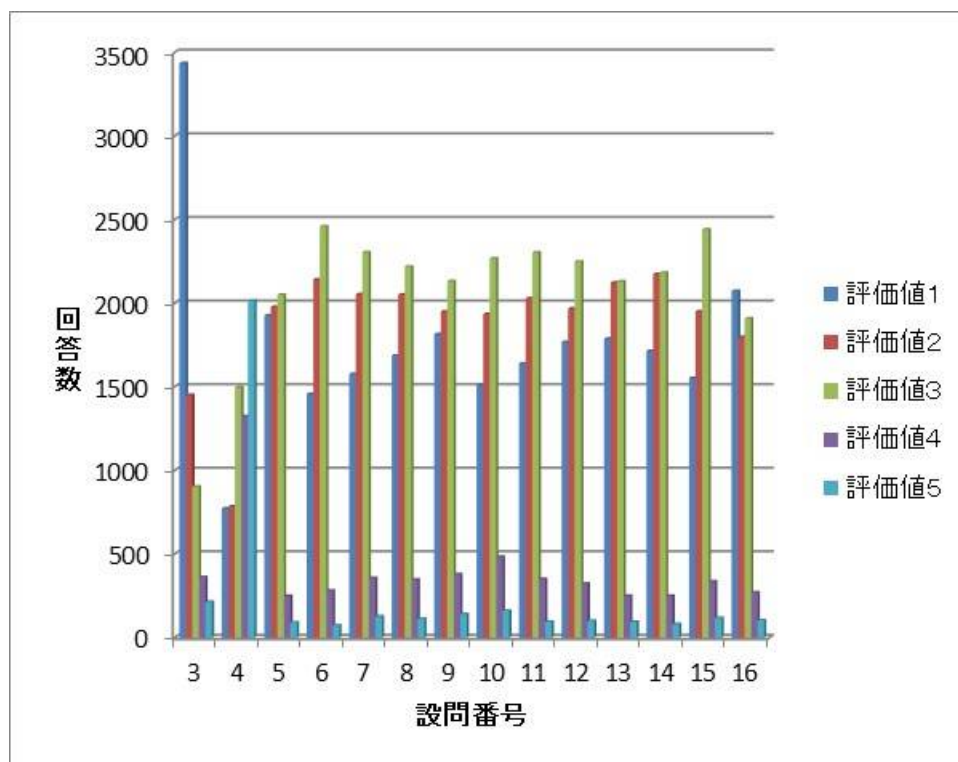


図 1 設問別回答分布

2) 各設問の平均値

各設問の平均値を図 2 に示す。設問 3～16 の各設問において平均値が 4.0 以上だったのは、設問 3 の「この授業への出席状況は？」のみだった。また、最も平均値が低かったのは、設問 4 の「この授業に関連して、授業以外に学習した時間。（授業 1 回あたりの平均時間）」

であり、中央値 3 ポイントを下回っていた。その他の項目はすべて 3.6 から 4.0 未満の範囲に分布していた。全体的には昨年と同じ傾向であるといえる。

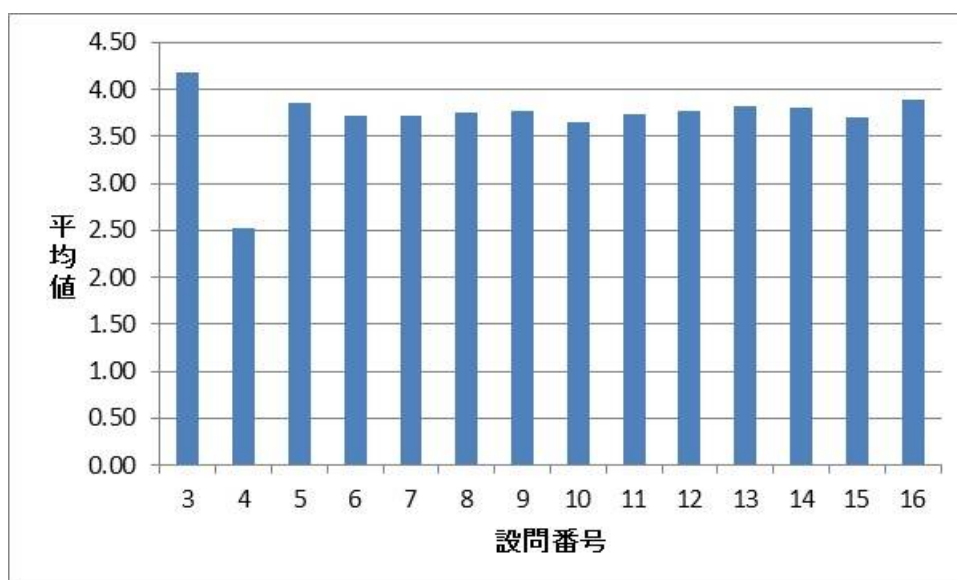


図2. 設問別平均値

3) カテゴリー別平均値

カテゴリー別平均値を表1に示す。各平均値は3.5～3.9の間に分布していた。高いものから V総合評価>IV学習成果>II授業内容=III授業方法>I学生自身の順であった。昨年度の結果と比べると、大きく変化しているわけではないが、II授業内容、III授業方法、V総合評価が0.1ポイント下がっていた。

表1 カテゴリー別平均点

I 学生自身	II 授業内容	III 授業方法	IV 学習成果	V 総合評価
3.5	3.7	3.77	3.8	3.9

3. 集計結果の分析と問題の所在

1) 全体評価

設問別評価からは、例年指摘されている問4「授業時間外での学習時間」は2.53と最も低い値を示しており、正課外の学習時間の短さが今年もみられた。後述の改善策においても課題の工夫があげられており、学習時間の増加につながるものとして期待したいところである。

また、問5～16の平均値に注目すると3.65～3.89の分布であり、やや肯定的な回答であることを示している。回答の内訳で最頻回答は3（どちらでもない、ふつう）であるが設問13「自分にとって新しい考え方。発想を得ることができた。」、設問14「授業で扱った分野に対する基本的な知識を得ることができた。」は4（どちらかと言えばそう思う）の回答数が（どちらでもない、ふつう）の回答数と近似値となっていた。

平均値上位3位の設問は、設問16「この授業を受けて満足している。」（3.89）、設問5「この授業に意欲的に参加した。」（3.86）、設問13「自分にとって新しい考え方・発想を得ることができた。」（3.82）であった。一方、下位3位の設問は、設問10「板書、スライド、教材などの使い方は、わかりやすく適切だった。」（3.65）、設問15「自分で調べ、考える姿勢が身についた。」（3.70）、設問6「授業の到達目

標がシラバスや授業でわかりやすく示された。」(3.72)と設問7「毎回の授業の内容はよくまとまっていて、よく理解できた。」(3.72)であった。上位、下位の設問も数年同様の傾向がみられる。到達目標については、後述の改善策にもあげられており、教員側にも自覚する点があることがわかる。

なお、学科独自項目である問17「教員の学生への対応が公平」については、平均値3.97と高い値を示しており、本学科が意識している点が平均値にも反映された結果であるといえる。

2) カテゴリー別評価

すべてのカテゴリーにおいて全学科平均値よりも0.1~0.2ポイント低い結果であった。カテゴリーの中で最も低かったのはI学生自身である。このカテゴリーの平均値に大きく影響する授業時間外の学習時間の回答については、次年度からは正課外活動を行う時間を取ることを意識した新カリキュラムの新体制がスタートする中で様子を見ていきたい。

4. 授業の改善策の検討

今年度は「学生による授業評価」を受けて学科長宛に121科目の報告書が提出されたが、この中で多くの授業改善策が提案された。以下に本学科より出された改善策を示す。

●学生に向けての発信

- ・もっとこまめに声をかけ、授業への出席を促す。(授業欠席が多い学生に対して)
- ・気候条件等で意欲を失う学生への言葉かけ、休憩の取り方の検討。
- ・遅刻軽減の呼びかけと、人数が揃わない中での授業の入りかたを検討する。
- ・学生とコミュニケーションがとれる授業を心がける。
- ・教員間で決めたことを学生にプリント配布する。(複数教員担当科目：情報伝達がうまくいかなかったので)
- ・初回の授業時に各担当者の役割をきちんと学生に伝える。(複数教員担当科目)
- ・遅刻・欠席に対する減点の仕方等が明確に決め、初回授業で学生全員にはっきりと伝える。
- ・科目の特性を理解せずに授業を受けていた学生もいたので再確認する。
- ・他教科との関連を説明する。
- ・作品を鑑賞するだけでなく、提起されている問題について考えることが重要だという点の理解を行き渡らせる。
- ・グループワークについて、卒業後チームで働くことが必要になることをしっかり学生に伝え、協同することの大切さを伝える。
- ・講義の重要項目やテスト範囲を丁寧に告示する。
- ・最終評価方法を明確にする。
- ・授業の目的を周知徹底する。

●教員自身

- ・教材の素晴らしさを心から味わえるよう心の純度を高める。
- ・受講者がこれまでの日常の学習生活で、どのような知的体験を経てきているかを知る。
- ・授業評価で極めて悪い評価をつけるような学生が、何に問題を抱えているかを早め

にキャッチしたい。

- ・ 学生の基礎知識レベルに配慮する。
- ・ 聞き取りやすい話し方を心がける。
- ・ 時間配分表を作成する
- ・ クラスや学年によって態度や言葉遣い等に差が出ないように留意する。
- ・ 休講補講が多かったのが当該時間に実施する。
- ・ 小テストにおける実施内容や実施方法を年度初めに決める。（複数教員担当科目）
- ・ 試験の課題や基準に関して学科の教員全員で共有する。（複数教員担当科目：学生にきちんと周知することができなかつたので）
- ・ 講義に一貫性をもたせるために、前もって全講義担当者による内容の打ち合わせをする。（複数教員担当科目）
- ・ 学生の就職先を考慮し、より具体的な内容を解説できるよう取り組む。
- ・ 板書等、よりわかりやすく工夫する。
- ・ 一人ひとりの学生の顔と名前をできるだけ早期に記憶する。

● 授業内容

- ・ 導入を改善する。
- ・ 課題の出し方で内容のバランスを考える。
- ・ 各課題の共通項に気づかせることで、課題に取り組む意欲を喚起させる。
- ・ 課題内容の目的をより具体的に説明し、各自の問題点の所在を認識させる。
- ・ いくつかの課題にしぼってじっくり丁寧に進める。
- ・ 最後の授業で、学びの振り返りを行い、模擬保育と科目のねらいを重ねて分かっていくようにする。
- ・ Iの時よりレベルアップしているという認識をIIで持てるような内容を心掛けていきたい。
- ・ 授業ノートの改善。
- ・ 内容を絞込み一項目を徹底して指導する。
- ・ 1回の内容をもう少し少なくし、学生が不消化の状態をなくす。
- ・ 自分で調べ、考える姿勢が身に付くような内容にする。
- ・ よい教師として児童の前に立つために、大切にしたいことを語る、語り合う。
- ・ より現実的で具体的な内容や資料を提示する。
- ・ 学生の意欲や好奇心を刺激するような素材の提供について検討する。
- ・ 授業の全体構成や毎回の授業の意図をわかりやすく示す。
- ・ 授業外学習時間伸長のために、次回授業の予習事項の明示。
- ・ 授業開始時に前回の内容の復習をする。
- ・ 授業の開始時に学生の疑問を引き出し、探究的項目を設定して、一回一回の授業に流れを作る。
- ・ 学生が感じ考えたことを引き出しながら、授業を進めていくように内容を考え直す。
- ・ 現場でのより実践的な事例を通して根拠となる法令や理論がわかる授業としたい。
- ・ より具体的かつ有効な練習法を提案する。
- ・ 関心を高めるために、理論的な整理より具体的な事例や判例などから入る。

- ・他の科目で活用できるように、指導内容の順序を変更する。
- ・電子黒板の操作方法など、ICT 機器を活用できる能力を育成する。

●授業方法

- ・ピンマイクを使用する。
- ・マイクの音量に注意する。
- ・学生に考えさせるように、問いかけを増やす。
- ・学生たちに考えさせ、発表させる手法なども取り入れる。
- ・新しい課題に何を意識して取り組むのか、質問を考えてもらう。
- ・学生が躓きを感じた部分で、無理なく前に進めるような教育方法を開発する。
- ・受け身になりがちな学習に対して、主体的にかかわることのできる学習方法を検討する。
- ・提出物の未提出により低成績にならないように、提出物の「見える化」をして提出を促す。
- ・中間テスト（形成的評価）を実施する。
- ・教育内容を整理しやすいような教材を配布する。
- ・見えそうな映像を探す。
- ・テキストや教材を工夫する。
- ・見やすいパワーポイントスライド作成。
- ・学生が協働で学ぶ活動を増やすことで、主体的に授業に取り組めるようにする。
- ・もう少しゆとりのある教室に変更を申し出る。
- ・学生の「意欲」「関心」「主体性」を引き出すため、学生同士でディスカッションをする等の機会を増やす。
- ・説明、実技、振り返りの時間配分を検討する。
- ・テーマのより詳細な説明を行い、学生達の理解を進める。
- ・課題を全員が理解して進めるよう個人、グループでの発表を通して反復練習させる。
- ・学習カード等の記入方法を改善し、記入の時間を確保する。
- ・質疑応答形式により理解度を確認する。
- ・授業終了時のまとめと質問時間を確保する。
- ・繰り返し説明する。
- ・学生がディスカッションに慣れるように、ペアや小グループ、グループのサイズを徐々に大きくする。
- ・時間の有効活用のために、個人指導の場合は学生が教員のところに来るのではなく、教員が学生のところに戻る。
- ・実技と講義のバランス
- ・班編成や時間のかかる初学者への指導の仕方について再考する。
- ・クラス分けを就職先希望別で分ける。
- ・個人の能力に適應したよりきめ細やかな指導を迫及する。
- ・各学生の目標に合った指導をする。
- ・要点をその都度書く。
- ・ミニレポートを次の授業に反映させる。
- ・自分で考え応用する力を伸ばす仕組みを作る。
- ・自分たちでする作業をもっと取り入れる内容にし、準備学習を活性化する。

- ・資料を工夫し、書く作業ではなく、考える作業を授業中に取り入れていく。
- ・グループワークで創作し発表させる。
- ・manaba のさらなる積極的に活用する。
- ・manaba による反転授業を体験させる機会を作る。
- ・manaba を利用して効果的に小テストを行う。
- ・多人数にも対応できるより効果的な演習方法を開発する。
- ・学生が主体的に取り組めるような課題を出す。
- ・実験の準備を含め、予習(簡単な指導案の作成)をさせる。
- ・少人数での事例検討ができる時間をとる。
- ・課題や小テストの難易度に工夫する。
- ・個々で具体的な到達目標をもつような取り組みを考える。
- その他
 - ・日射病・熱中症対策のための日陰の設置。
 - ・1年生全員が座れる教室がないので、カメラ等を使い、2教室で座って実施する等の工夫が必要。
 - ・全学科が可能な曜日・時間の選択が重要。
 - ・改善のために「2」「1」を付けた場合は、その理由も具体的に書いてほしい。

以上、数多くの改善策が学生による授業評価アンケート結果を受けて学科長に提出される報告書から上がっていた。最後により評価ができた点と問題点をそれぞれあげたい。

まず、よい評価ができた点は非常勤講師から出た意見を受けて、年度途中段階で学科教員によって学内設備面改善への動きに繋がったことである。学内の予算にも関わることが推測されるため、年度内という少しでも早い段階から動くことができたことは大変評価できる点といえよう。しかしながら、これには同時に問題点もある。実は以前からその意見は出されていたのだが、この改善策が記入されている報告書は担当教員から各学科長への個人報告書であり、大学に向けての要望書ではない。そのような意味では、特に非常勤講師に向けて、学内設備上の問題点や要望については、最終授業日までには別の書面での提出を求めた方が実際的な改善につながるのではないだろうか。

また、問題点としては非常勤講師との連絡がうまくできていないと思われる記述がみられたことである。先の学内設備改善に関する改善策についても、実は以前から出されていた意見であった。他にも複数教員担当科目やオムニバス科目の担当者より評価に関わる改善策の記載があった。「遅刻・欠席に対する減点の仕方」「小テストの実施内容や実施方法を年度初めに決める」というものであったが、科目主担当教員と他の担当教員間、あるいは非常勤講師と各学科教務委員との間の連絡不足が考えられる。評価に関わる内容については、学生も敏感に感じる場所である。教員間の相互理解なくしては誤情報を学生に与えることにもなりかねない。特に非常勤講師がメンバーに入っている場合には、事前事後の打ち合わせ時間に制約があることから、特にこの点を配慮した科目運営が必要となる。今回の意見を契機として注意喚起を促すきっかけとなろう。

4. 短期大学部 口腔保健学科

1. 授業評価実施数

- ① 授業評価アンケート回答数（延べ人数）：4181 名（受講者数 4589 名、回答率 91 %）
- ② うち学科長に報告書が提出された科目数：33 科目

2. 学生による授業評価の集計結果

1) 設問別回答分布（図 1）

平成 27 年度前・後期口腔保健学科の学生による授業評価調査の設問別回答分布を図 1 に示す。昨年度と比較して、すべての設問において評価 4、5 が増加した。とくに設問 16 の「この授業を受けて満足している」の評価 5 が大きく増加したことが特徴的である。

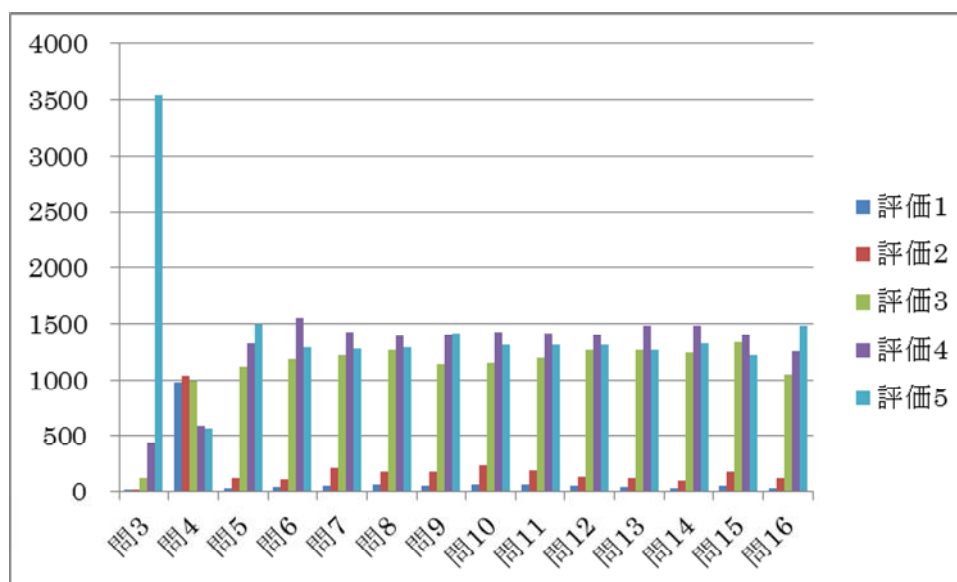


図 1 設問別回答分布

2) 各設問の平均値（図 2）

各設問の平均値を図 2 に示す。昨年度と同様、設問 3「授業への出席状況」の平均値が 4.81 と突出して高く、設問 4 の「授業以外の学習時間（授業 1 回あたりの平均時間）」は 2.69（前年度より 0.1 ポイント上昇）と他の設問に比較して極端に低い評価であった。その他の項目はすべて 3.86～4.02 の範囲に分布しており設問間に大きな差は認めなかったが、昨年度と比較してすべての項目で 0.1 ポイント以上の上昇を認めた。

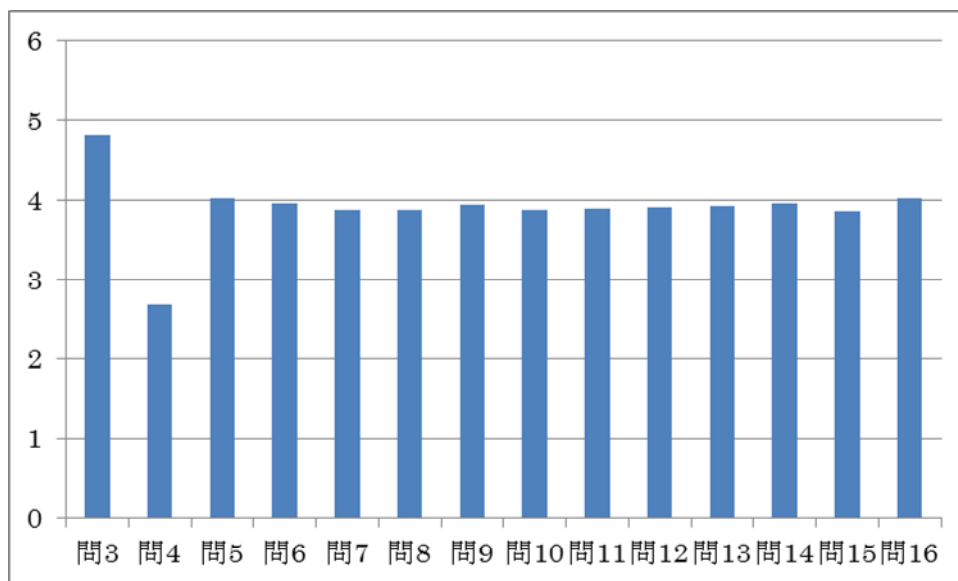


図2 設問別平均値

3) カテゴリー別平均値 (表1)

カテゴリー別平均値を表1に示す。各平均値は昨年度より0.1ポイント上昇したが、学生自身以外のカテゴリーで全学科の平均よりもやや低い評価であった。例年の傾向として本学科では、授業内容の評価は他学科よりもやや低いが、出席状況は良好という結果となっている。ⅡからⅤの各カテゴリー間に大きな差はない。

表1 カテゴリー別平均点

I 学生自身	Ⅱ 授業内容	Ⅲ 授業方法	Ⅳ 学習成果	Ⅴ 総合評価
3.84	3.90	3.91	3.91	4.02

3. 集計結果の分析と問題の所在

1) 全体評価

設問別評価では、全学科を通じて設問3の出席状況が最突出して高い評価(平均4.81)であり、設問4の授業時間外の学習が最低評価(平均2.69)となった。この傾向は例年とまったく同様であり、授業には出席しているが、授業時間外での学習には消極的であることを示している。しかし、いずれも昨年度の比較ではわずかではあるが上昇していることは評価できる。

さらに昨年度以前は、これらの設問を除くすべての設問において3(どちらでもない普通)と評価した学生が圧倒的に多く、1,2が非常に少ないという傾向が認められていたが、今年度はすべての設問で評価4,5が評価3よりも多くなっており教員の努力が伺われる結果となった。

評価が比較的高い(5が4よりも多い)設問は、5「意欲的に参加」、9「聞きやすい話し方」および16「満足度」であり、低評価(1,2)がやや多い設問は7「授業内容の理解」、8「知的好奇心を惹起」、10「板書、スライド」、11「進行速度」、15

「自分で調べ、考える姿勢」であるのは、これも例年通りの結果である。

これらのことから、授業には常に意欲的に参加しており、一部には授業内容や進行速度に不満を持つ者もいるが概ね授業には満足している学生が多いことに気付く。しかし、自ら調べ考える姿勢が弱く、授業時間外の学習が極端に少ないことから授業そのものが「習得する」「考える」授業にはなっておらず、いまだに「教えられる」ことが中心であることを物語っている。教員が目指すべきものは、授業中もしくは授業前に学生が「疑問を感じそれを考え手解決する」ことを意識した授業方法の確立であり、そのためには manaba などを利用した予習重視（翻転）授業である。しかし、昨年度都の比較で評価3が減少し、評価4が上昇したことは授業内容の見直しが図られた結果であると考えたい。

2) カテゴリー別評価

全学科平均ではすべてのカテゴリーで昨年度よりも0.1ポイント上昇したが、4.0を上回ったのは総合評価のみである。例年、全学的にI「学生自身」の中でも「授業外学習時間」の少なさが目立つが、出席状況が高いためにマスクされた形になっている。全ての学科においてこの傾向が長年継続していることから、学生の授業時間外学習時間が確保できるようなカリキュラム改革や斬新な授業方法の導入など画期的なFD活動が求められている。

4. 授業の改善策の検討

「学生による授業評価」を受けて学科長宛に提出された報告書から改善策を学科会議で共有することにより授業改善に活かした。

<授業連携・教員間連携>

- 毎回の授業が、裏表で違う内容で行われているので、授業間での進行、学生の授業態度、課題内容等の密に打ち合わせを行っていく。
- 他の教科との進行を考慮した授業展開を行っていく。

<授業外学習時間・事前学習・復習>

- Manaba を活用した予習・復習を促すような仕掛け
- 事前課題の内容を詳細にして予習時間を軽減する。
- 指示を出さなくても復習を行うことができるよう促す。

<マナバ>

- manaba を用いた双方向のアクティブラーニングに取り組む。
- manaba にアップする資料の量を少なくし事前学習の時間を軽減する、予習についての具体的な指示を出すなどの工夫が必要。
- ポストテストを活用して授業内で復習をさせる仕掛けが必要。

<授業内容>

- 授業時間を有効活用するために行動目標の立案、器材の準備や、動線を配慮し指導案を再度検討していく必要がある。
- エックス線写真のトレース（模写）の際に解剖の知識を簡単に復習してエックス線写真と解剖を比較することで読影能力を深める。模写だけでは読影の能力

は向上しない。

<モチベーション>

- 開講時には学生は意欲的に参加しようとして授業に臨んでいたにもかかわらず、終盤では関心が薄れてしまうため、ビデオ教材や臨床現場でのエピソードなどを取り入れ、まず疾病に対する興味を持たせる。
- 最初の授業をオリエンテーションとして科目の必要性を理解させるために KJ 法などを用いたワークを取り入れる。
- 全学科合同授業では可能な曜日・時間の選択は重要。
- 授業評価ではテーマが解り難い等の記述がみられたため、より詳細な説明を行い、学生達の理解を進めることが必要。

<教材・板書など>

- 配布資料をカラー印刷する。
- スライドの文章表現を簡潔化する。
- 「早口で分かりにくい」という意見があったためしっかり伝わるように授業をすることを心がける。
- 知的好奇心を惹起するために授業内容の理解を深めることが課題。そのために教材の工夫、ビデオや簡単な実験などを取り入れる。

<試験・成績>

- 意図したことがきちんと伝わっておらず、成績に反映されないため、講義や実習での伝え方や資料の提示の仕方など改めて確認する必要がある。
- 授業内容を理解していれば正解できる問題であるとしたら、教員として学生に理解させる工夫がもっと必要。

<その他>

- いのちの大切さ、複雑さ、健康の重要性とその維持の方法、動物である人間は動いてバランスを取っている等を実感し、社会人になっても継続できるような機会にしていくべくさらに工夫していきたい。

5. 短期大学部 看護学科通信制課程

1. 授業評価実施数

- ① 授業評価アンケート回答数（学生の延べ人数）：1060 名
- ② うち課程長に報告書が提出された科目数： 8 科目

2. 学生による授業評価の集計結果

1) 設問別解答分布

平成 27 年度前後期 看護学科通信制課程の学生による授業評価調査の設問別解答分布を図 1 に示す。

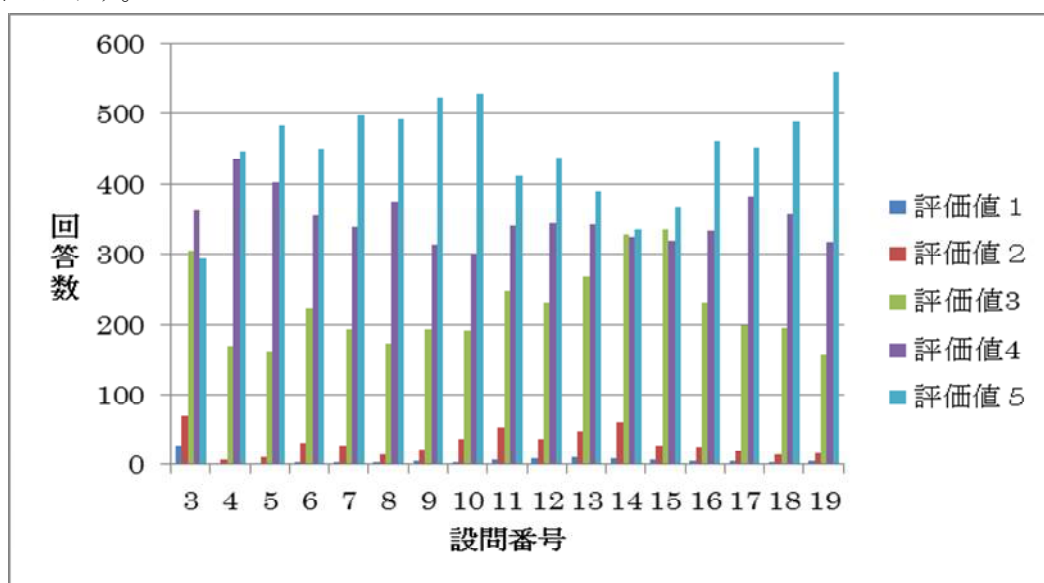


図 1 設問別回答分布

2) 各設問の平均値

設問 3～19 の各設問において平均値が 4.0～4.5 と高かった設問は 13 項目ある。最も高かったのは学生自身の問 5「この授業を受けて今後の学習に意欲的に取り組みますか。」であった。次いで、昨年と同様に授業内容の問 8 の「抽象的な内容については適度に例を示して具体的な説明があった。」で、総合評価「この授業を受けて満足している。」は 4.33 であった。一方、平均値が低い設問は学生自身の「シラバスを読んで授業に臨む」であった。授業方法の 3 項目も 3.87～3.99 と全体と比較するとは低かった。

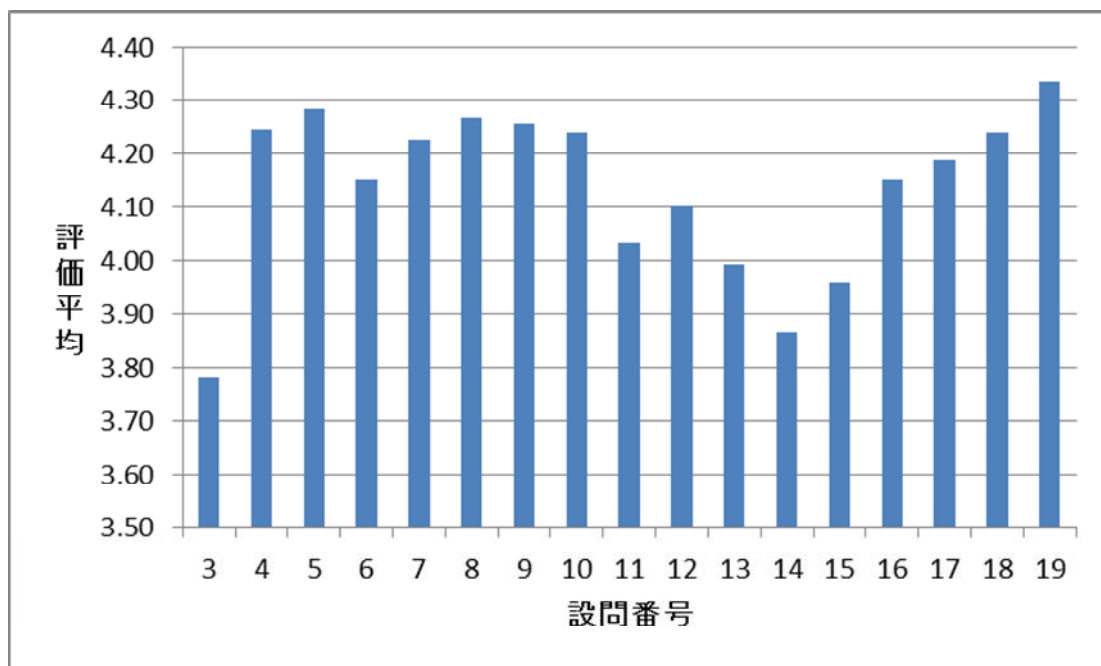


図2 設問別平均値

3) カテゴリー別平均値

昨年とほぼ変わらず、すべてのカテゴリーにおいて4.0以上で、高いものからV総合評価>II授業内容=IV学習成果>I学生自身>III授業方法の順であった。

表1 カテゴリー別平均値

I 学生自身	II 授業内容	III 授業方法	IV 学習成果	V 総合評価
4.1	4.2	4.0	4.2	4.3

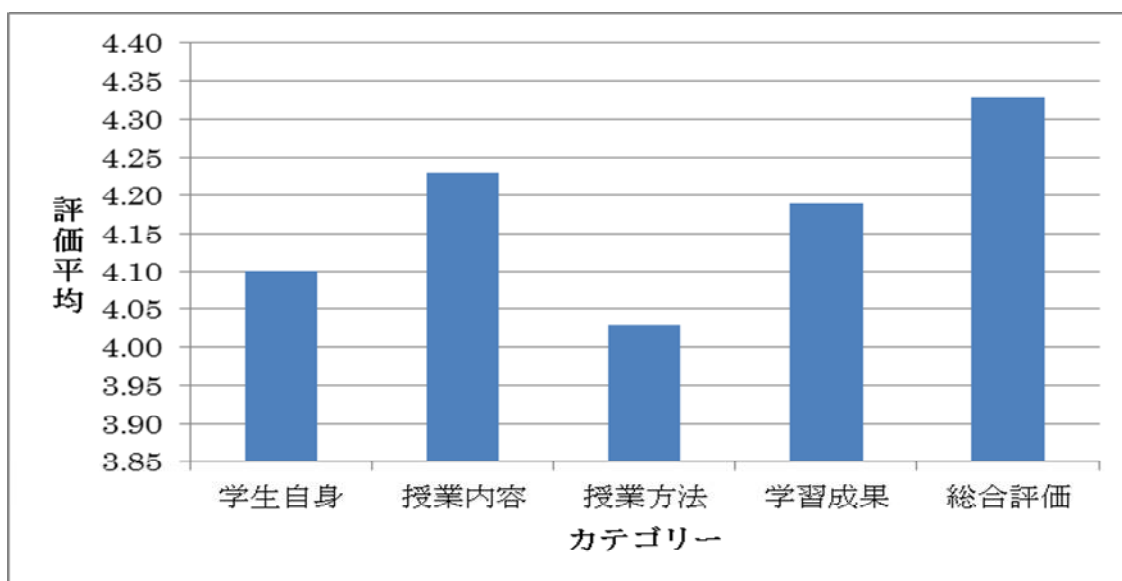


図3 カテゴリー別平均値

3. 集計結果の分析と問題の所在

1) 設問・カテゴリ別評価

設問別評価では、平均値が4.0～4.5と高かった設問は17設問中13項目あり全体に高い評価を得ている。今年度、最も高かった項目は「この授業を受けて今後の学習に意欲的に取り組めますか。」であり、学生が授業を受けて学習に対するモチベーションを高めていることがうかがえる。昨年度の改善策で意見交換された「効果的に学生に関わるように授業方法を工夫する。」に関する努力の結果が出ているのではないかとと思われる。授業内容に関しては昨年と同様に「抽象的な内容については適度に例を示して具体的な説明があった。」と「授業内容は表面的でなく教員自身の意見や考えを適度に示し、心に響くものであった。」は高い評価を得ていた。

しかし、一方「シラバスを読んで授業に臨む」については、変わらず3.78と最も低かったことから、今年度の課題として授業前からの学習姿勢を養うための工夫を継続して検討する必要があると考える。授業方法では「ノートをとる時間がちょうどよい」「板書・スライド・教材などの使い方」は平均値が低かった。教員の授業方法のスキルアップを目指すことも今後の課題と考えられる。カテゴリ別評価でも、すべてのカテゴリにおいて4.0以上と高い評価を得ているが「Ⅲ. 授業方法」に関しては5つのカテゴリの中で最も低い。授業方法の具体的な改善策を検討することが、今後も継続する問題点である。

2) 春期スクーリングと夏期・秋期スクーリングの比較

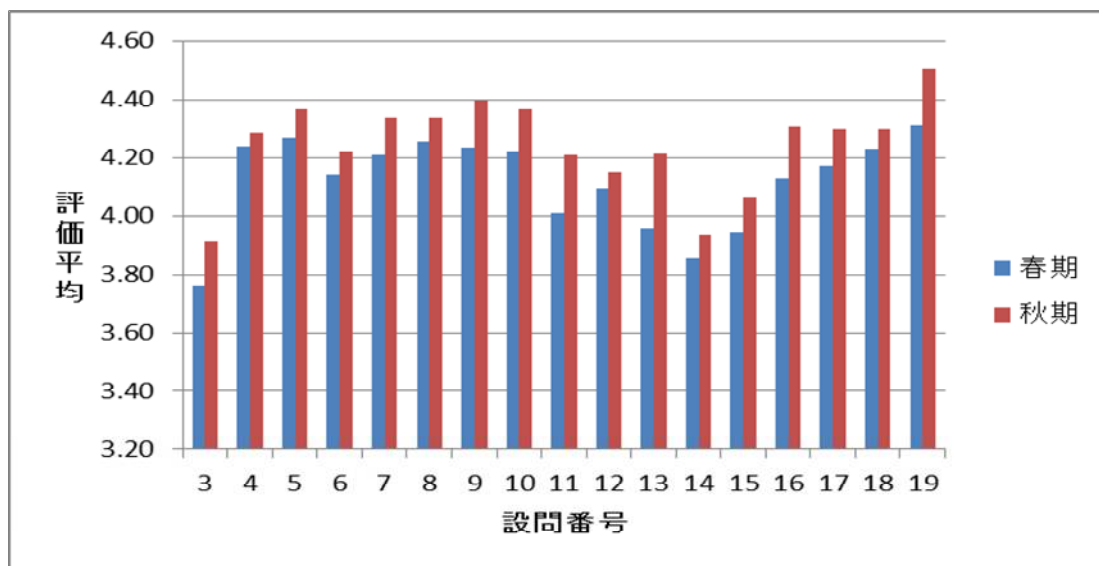


図4 各設題平均値の比較（春期と秋期）

一昨年度は、入学直後に開講される春期スクーリングの受講生に比べて、17設問中11設問で秋期スクーリングの評価平均が低いという結果だった。昨年度は、17設問中2設問で秋期スクーリングの評価が低く出たが、今年度はすべての設問において、秋期スクーリングで評価平均が高かった。これは春期スクーリングでの授業評価結果を10月の課程会議で共有し秋期スクーリング内容に生かす工夫をした事と、開講時期が合致していることから、授業の改善内容を具体的に意識したことが功を奏したのではないかとと思われる。

特に、昨年度の秋期スクーリングで評価が低かった「シラバスを読んで授業内容を確認して臨む」が、今年度は春期スクーリング 3.76 が、秋期スクーリングでは、3.91 と評価があがっていた。

4. 授業の改善策の検討

前期授業評価報告書をもとに11月の課程会議で「授業の改善策について」討議し次年度シラバスの内容の見直しに生かした。教員からは以下のような改善策が挙げられた。

1. 授業内容

- ・ 学生の能力差が年々大きくなっていることが感じられるため、授業スピードを上げずに進行するように内容を精選する
- ・ 説明したい内容と時間数などとの関係を考え、授業内容の整理が更に必要
- ・ 授業内容の再検討および資料の充実が必要
- ・ 現在学生が最も理解しにくい、または眠くなってしまう授業内容に関して、方法ではなく内容を見直す
- ・ 会場によって、意欲に差がみられる。学生の疲労や余裕のなさを言い訳にせず、さらに授業内容の精選・具体化に努めていく
- ・ 内容の精選：不必要と思われる内容は思い切って削除し、重要と思われる個所を中心に講義する

2. 授業方法（レジュメ・資料・パワーポイントなどの教材や使用について）

- ・ 機材の使用テクニックや、白板への板書などの工夫が必要
- ・ ポイントをついた教授内容と共に教材の工夫が必要と考える
- ・ 教科書に合わせた配布資料の準備
- ・ パワーポイント等の資料の作成を検討
- ・ 事例や映像資料などを用いると、学生の理解が深まっていると考えられるため、臨床現場の変遷に応じた事例や映像資料を提示していく
- ・ 学生がパワーポイントのスライドを沢山移さなくても良いように配布資料の中に提示する
- ・ イメージのつかない学生も少なくないのでDVDなどの視聴覚教材を活用する

（時間配分や教育手法について）

- ・ 学生の理解状況の反応を良く見てタイミングをはかる
- ・ その都度話すスピードや内容理解の確認
- ・ 限られた時間内で効率よく、要点を伝える

3. 学習環境

- ・ 教室の温度調整の全体確認

4. 学生自身

- ・ 学生自身に関して、特にシラバスを読んで臨むという項目で評価点が低くなっていたことから、授業への動機づけをいつ・どのようにするかが問題
- ・ 授業の動機づけに、入学式後のオリエンテーションや学修説明会などの機会をうまく活用することを考える
- ・ 授業開始時にシラバスで目標を核にして意識を高め、講義を継続するように働

きかけているが、入学時のオリエンテーションなどでもメッセージを伝えていくことも必要である

- ・ シラバスを読んで授業に臨むことを入学式の挨拶時や学修説明会、入学前授業時に学生に呼びかけたが、東京会場では、あまり効果がなかった。引き続き次授業後の意欲に関する結果から、今後の学習に関する学生の不安を軽減する取り組みを強化したい

以上の改善策に対して以下の内容について話し合いを行った。

1. パワーポイントの使い方について、全部を学生にプリントアウトして提供することの是非を話し合った。すべてを書き写そうとする学生の特性を理解して、資料の工夫やパワーポイントの使い方を考える必要がある。
2. 学生の理解力に幅があることに対して、どう授業を工夫するか。
3. 人数が少ないと目が行き届くのでペースを合わせやすいが、人数が多いと難しい。
4. 機材について、市ヶ谷会場は機材の切り替えがうまくいかないのが、不自由でパワーポイントの資料をOHCで映すなどの工夫が必要だった。

今年度も引き続き、授業方法の工夫に関して、具体的な意見交換がみられた。各教員のノウハウを互いに共有し、効果的な授業展開ができるよう学習成果の向上に向けて授業改善を継続していきたい。

第4部「卒業生・就職先へのアンケート調査結果」報告

はじめに

本学のディプロマポリシー達成状況を評価するため、自己点検・評価委員会では平成24年度から卒業生・就職先へのアンケート調査を実施しています。

卒業生に対するアンケート調査では卒後1年目を対象とし、医療検査学科、看護学科、口腔保健学科では平成24年度から毎年実施し今回が4回目となります。看護学科通信制課程では平成25年度から実施し今回が3回目です。こども教育学科は今春1期生が卒業しましたので、平成28年度が初回調査となる予定です。

就職先へのアンケート調査は3年に1回実施していますので、本年度が2回目の調査となります。

アンケート方法ですが、11月に事務局から卒後1年目の卒業生の就職施設へ郵送し、回答を無記名・郵送にて返送していただきます（口腔保健学科の卒業生には自宅へ送付しています）。アンケート調査の結果を自己点検・評価委員会事務局が集計し、各学科の自己点検・評価委員が学科毎に解析し、過去の結果との比較や学科間の比較検討を行い、学科のまとめとして報告書を作成しています。

卒業生および就職先からのアンケート調査結果は、本学のディプロマポリシーに対する第三者評価として大変貴重です。本学の各学科における専門教育が、ディプロマポリシー達成にどの程度成果をあげているのかを客観的に評価し、カリキュラムの見直し等へとフィードバックされ活用されることを期待しています。

このアンケートがより有意義なものとなりますよう、アンケート調査の方法や結果の解析方法、報告書の書き方等に対し、率直なご意見、ご要望をお寄せいただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

1. 医療検査学科

I. 卒業生へのアンケート調査結果

調査対象

平成 27 年 3 月卒業生 83 名

結果の概要

1. 回収率

卒業生	発送数	回答数	回収率
平成27年度	83	33	39.8%
平成26年度	86	11	12.8%
平成25年度	85	22	25.9%

回収率は調査開始以来最も高かった。

2. 調査結果

● 卒業後の進路

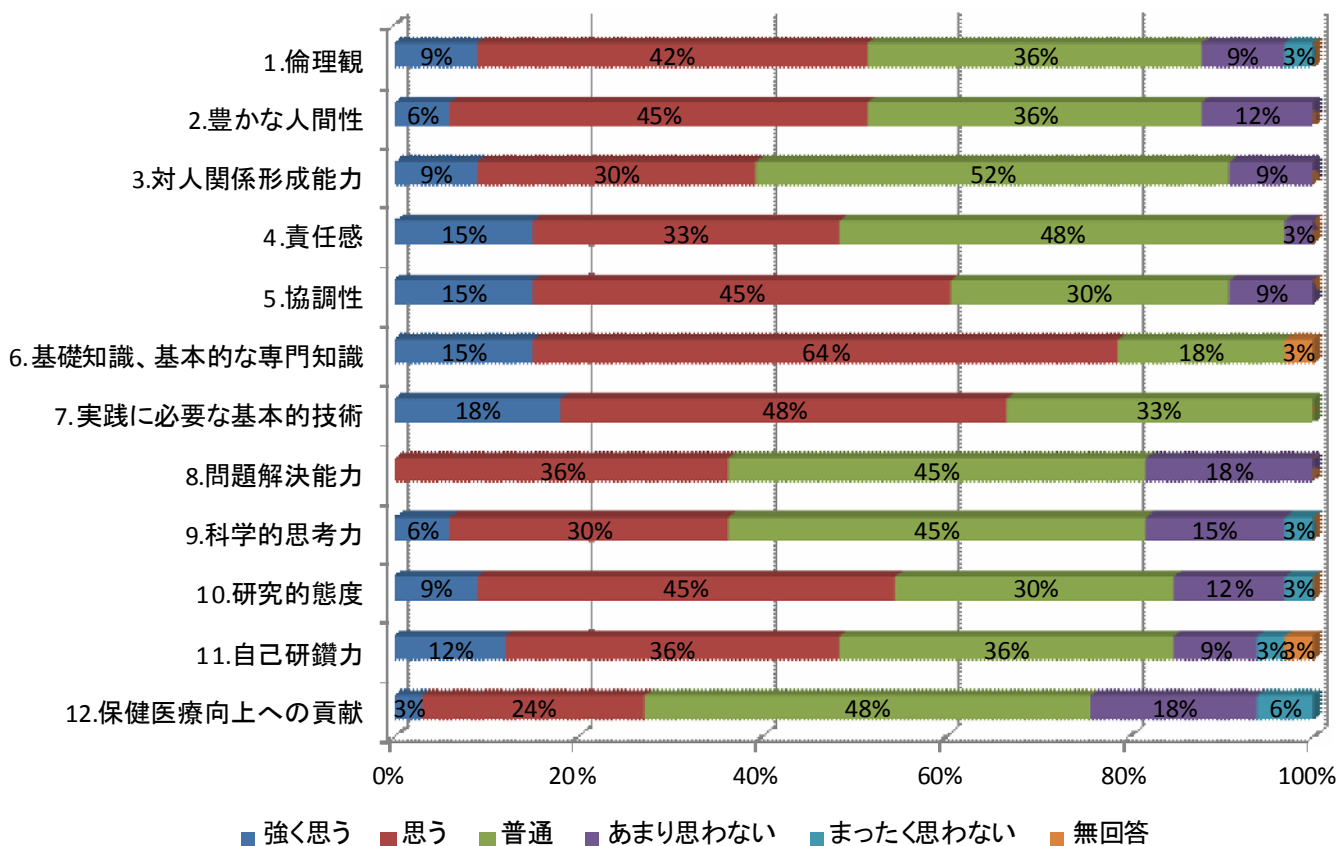
A) あなたの進路をお答えください

病院	25	76%
健診センター	3	9%
大学病院	2	6%
検査センター(ブランチ施設)	1	3%
その他	2	6%

● ディプロマポリシーに対する評価

B) あなたは大学での学修や学生生活を通じて以下のものを身につけることができましたか

1. 医療に携わるものとしての、**倫理観**を身につけることができました。
2. 医療に携わるものとしての、**豊かな人間性**を身につけることができました。
3. 医療に携わるものとしての、**対人関係形成能力**を身につけることができました。
4. チーム医療の一員として必要な、**責任感**を身につけることができました。
5. チーム医療の一員として必要な、**協調性**を身につけることができました。
6. 医療検査に必要な**基礎知識および基本的な専門知識**を修得することができた。
7. 医療検査の**実践に必要な基本的技術**を習得することができた。
8. **問題解決能力**を身につけることができました。
9. **科学的思考力**を身につけることができました。
10. **研究的態度**を身につけることができました。
11. **自己研鑽力**を身につけることができました。
12. 地域社会や国際社会で**保健医療の向上に貢献**できる能力を身につけることができました。



昨年度に比べて、肯定的な回答（強く思う・思う）の割合は平均 50.5%から 49.6%と低下しているものの、「強く思う」の割合は平均 8.3%から 9.8%と上昇している。

その一方、否定的な回答（あまり思わない・まったく思わない）も平均 5.3%から 8.0%に上昇している。

特に評価の高かったもの（肯定的な回答が 70%以上）は、「B6：医療検査に必要な基礎知識および基本的な専門知識を修得することができた。」の 1 項目のみであった。

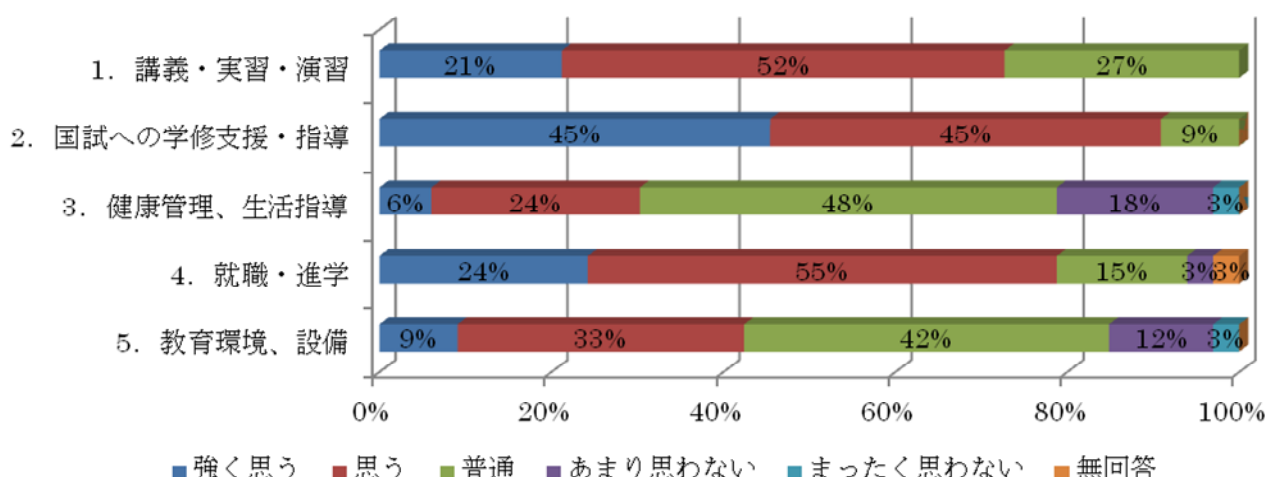
肯定的な回答が一昨年 82%、昨年 91%あった「B7：医療検査の実践に必要な基本的技術を習得することができた。」は、今年 66%と低下している。

特に評価の低かったもの（肯定的な回答が 30%以下）は、「B12：地域社会や国際社会で保健医療の向上に貢献できる能力を身につけることができた。」の 1 項目であり、一昨年 55%、昨年 45%が今年 27%と低下している。この設問での肯定的な回答はボランティア活動参加や「国際保健活動Ⅱ」等で海外に行った卒業生によるものが多いと思われる。今回の調査ではアンケートの回収率が高くなったため、肯定的な回答の割合が相対的に低くなったと考えられる。

● 本学の各種支援に対する評価

c) あなたが学生時代に大学から受けた支援等について教えてください

1. 講義・実習・演習に対する学修支援・指導がよかった。
2. 臨床検査技師国家試験に対する学修支援・指導がよかった。
3. 健康管理、生活指導に対する支援がよかった。
4. 就職・進学に対する支援がよかった。
5. 教育環境、設備（図書館、講義授業および実習設備、インターネットを含めたコンピューター設備、運動場、テニスコートなど）がよかった。



特に評価の高かったもの（肯定的な回答が70%以上）は、

「C1：講義・実習・演習に対する学修支援・指導がよかった。（以下、講義・実習・演習）」

「C2：臨床検査技師国家試験に対する学修支援・指導がよかった。（以下、国家試験）」

「C4：就職・進学に対する支援がよかった。（以下、就職・進学支援）」の3項目である。

「C1：（講義・実習・演習）」および「C2：（国家試験）」の設問については、今まで一度も否定的な回答がないものの、「C1：（講義・実習・演習）」の評価は一昨年 91%、昨年 82%、今年 73%と年々低下している。なお、「C4：（就職・進学支援）」では否定的な回答（あまり思わない・まったく思わない）もあった。

特に評価の低かったもの（肯定的な回答が30%以下）は

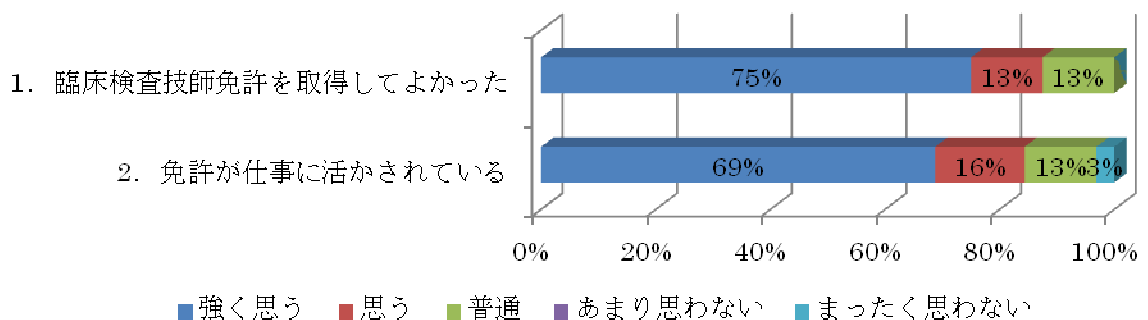
「C3：健康管理、生活指導に対する支援がよかった。」の1項目である。

昨年度に比べ肯定的な回答は9%から30%と上昇しているものの、否定的な回答も9%から21%に上昇している。

● 職業選択の満足度評価

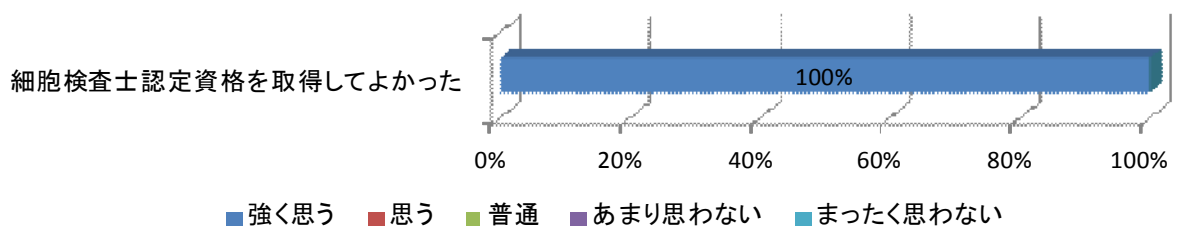
D) 臨床検査技師資格を取得された方にお尋ねします（免許取得者のみお答え下さい）

1. 臨床検査技師免許を取得してよかったと思う。
2. 臨床検査技師免許が仕事に活かされている



E) 細胞検査士資格を取得された方にお尋ねします（資格取得者のみお答え下さい）

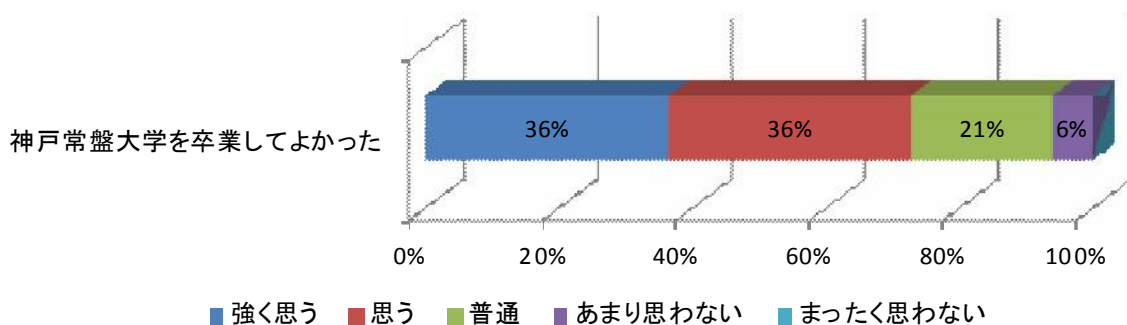
細胞検査士認定資格を取得してよかったと思う。



● 総合評価

F) 学生時代を振り返って総合的にお答えください

神戸常盤大学保健科学部医療検査学科を卒業してよかったと思う。



II. 就職先へのアンケート調査結果報告

調査対象

平成 27 年 3 月卒業生の就職先 53 施設

結果の概要

1. 回収率

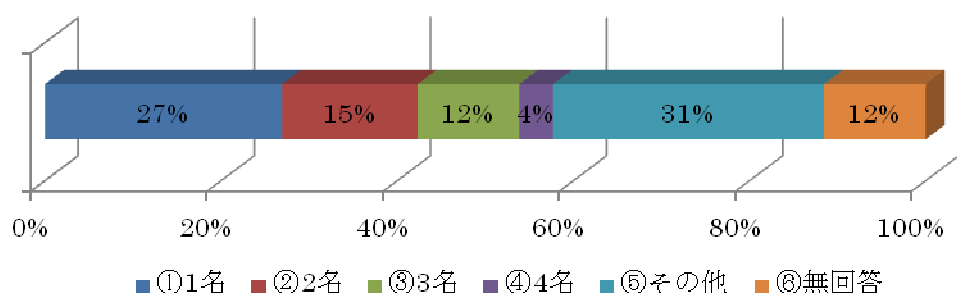
就職先	発送数	回答数	回収率
平成 27 年度	53	26	49.0%
平成 24 年度	54	34	63.0%

回収率は前回に比べ 14%低下した。

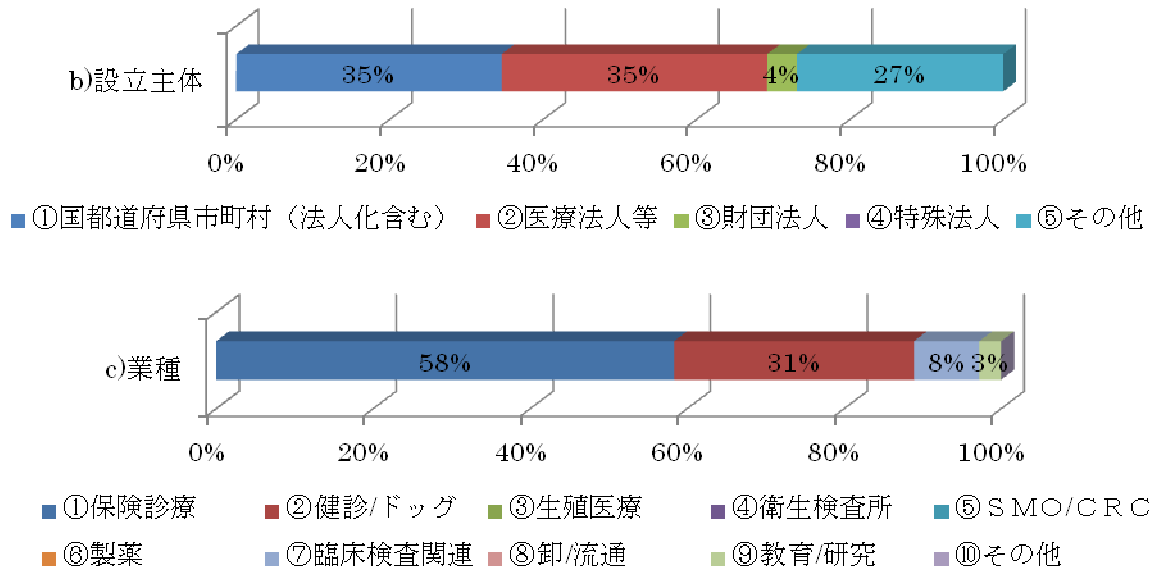
2. 調査結果

1) 貴院・貴施設についてお尋ねします

神戸常盤大学保健科学部医療検査学科（短期大学衛生技術科を含む）の卒業生は何人いますか。



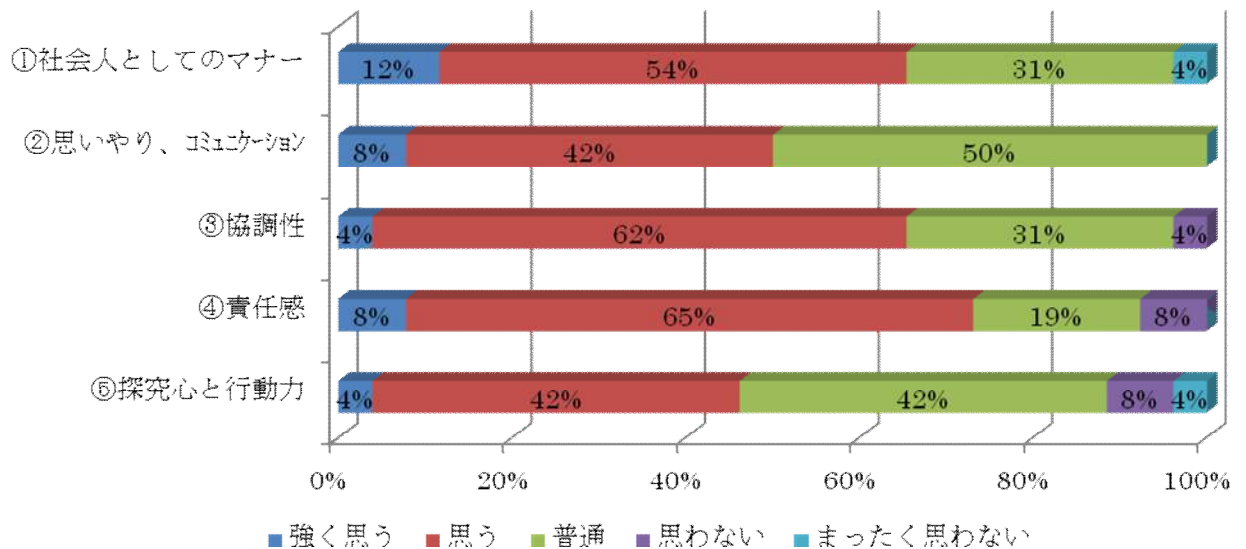
2) 貴施設のプロフィールについてお答え下さい



● 個人に対する評価

B) 卒業生個人に対する評価について、お答え下さい

- ① 社会人としてのマナーがある。
 ② 患者さんを思いやる、コミュニケーションがとれる。
 ③ 協調性がある。
 ④ 責任感がある。
 ⑤ 探究心があり、それに伴う行動ができる。



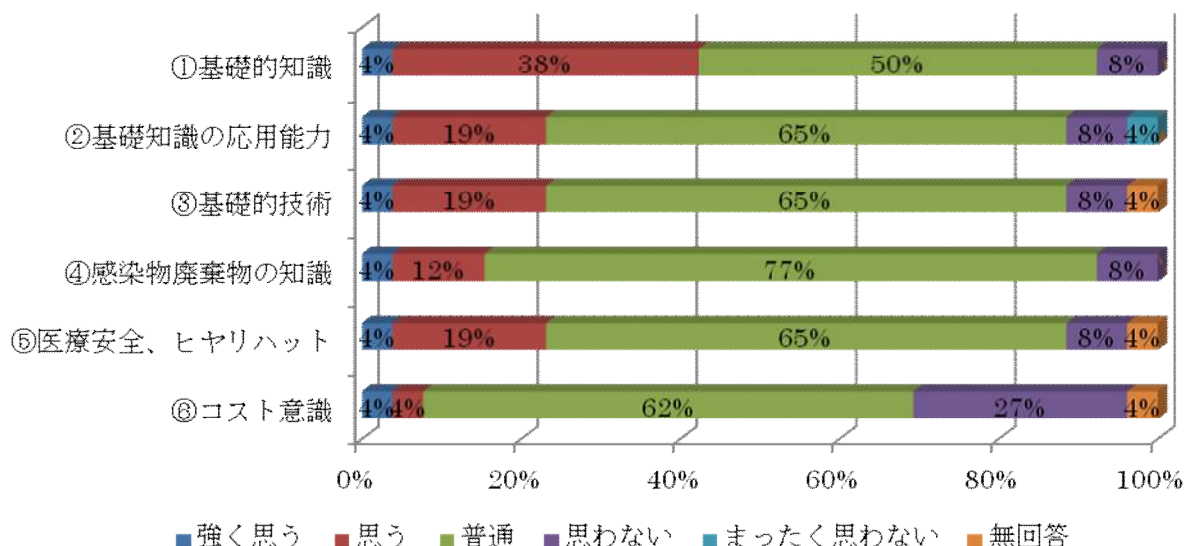
前回（平成 24 年度実施）と比較して各項目とも「強く思う」の割合が低下している。
 肯定的な回答（強く思う・思う）では「B5：探究心があり、それに伴う行動ができる。」

(以下、探究心と行動力)」以外は50%を超えていたが、「B2：患者さんを思いやる、コミュニケーションがとれる。」「B5：(探究心と行動力)」の2項目は前回と比較して10%以上低下している。

● **ディプロマポリシーに対する評価**

C) 卒業生を通して見えてくる大学教育に対する評価について、お答え下さい

- ① 臨床検査技師として、**基礎知識**を有している。
- ② 臨床検査技師として、**基礎知識を応用する能力**を有している。
- ③ 臨床検査技師として、**基礎的技術**を有している。
- ④ **感染性廃棄物の取扱いについての知識**を有している。
- ⑤ **医療安全を意識している、ヒヤリハットを報告する**。
- ⑥ **コスト意識**がある。



前回同様、すべての項目において肯定的な回答が50%以下である。

「C1：臨床検査技師として、基礎知識を有している。」以外は前回より肯定的な回答が減少しており、なかでも「C2：臨床検査技師として、基礎知識を応用する能力を有している。」は45%から23%とほぼ半分になっている。一方、否定的な回答は、「C6：コスト意識がある。」以外は前回より減少しており、なかでも「C4：感染性廃棄物の取扱いについての知識を有している。」は23%から8%となっている。

卒後評価を教育改善に活かすための取組みと考察

今年度は卒業生と就職先へのアンケート調査を行った。就職先へのアンケート調査は 3

年に1度の実施であるため、前回の平成24年度に続く2回目の調査である。回収率低下（前回63%から今回49%）の影響もあり、回答の割合だけに注目すると設問の多くは評価が低下したように見えるため、回答の平均値で比較した（表1）。

表1 就職先アンケート結果の比較

設問	回答の平均値	
	平成27年度	平成24年度
B1：社会人としてのマナーがある。	3.69	3.77
B2：患者さんを思いやる、コミュニケーションがとれる。	3.57	3.74
B3：協調性がある。	3.65	3.80
B4：責任感がある。	3.73	3.83
B5：探究心があり、それに伴う行動ができる。	3.34	3.61
C1：臨床検査技師として、基礎知識を有している。	3.38	3.33
C2：臨床検査技師として、基礎知識を応用する能力を有している。	3.11	3.32
C3：臨床検査技師として、基礎的技術を有している。	3.20	3.13
C4：感染性廃棄物の取扱についての知識を有している。	3.11	2.97
C5：医療安全を意識している、ヒヤリハットを報告する。	3.20	3.15
C6：コスト意識がある。	2.84	2.84

前回の調査時と比べて学生の質が落ちているとは思わないものの、卒業生個人に対する評価の設問（B1～B5）については、全て評価が下がっていた。これは調査結果で述べているように「強く思う」の割合の低下が影響しているのであろう。なかでも「B5：探究心があり、それに伴う行動ができる。（以下、探究心）」は3.61から3.34と設問中で一番評価が下がっている。一方、卒業生を通して見えてくる大学教育に対する評価の設問（C1～C6）については、「C2：臨床検査技師として、基礎知識を応用する能力を有している。（以下、応用能力）」が3.32から3.11に低下した以外、多少増加傾向にはあるが、ほぼ変わらないと言える。この「C2：（応用能力）」が「B5：探究心があり、それに伴う行動ができる。」に関係するのかもしれない。設問の中で一番否定的な回答の割合が多い「C6：コスト意識がある。」は、前回と同じく回答平均値が2.84と低く、自由記述にも「コスト意識」に関しての記載があった。各実習で試薬や消耗品の使用に多少なりとも「コスト意識」を持たせる何らかの工夫をする必要があると考える。

次に、卒業生アンケートと就職先アンケートのうち、対応する内容の設問に対して肯定的な回答（強く思う・思う）の平均値を比較した（表2）。

表2 卒業生と就職先アンケート 肯定的な回答の平均値の比較

卒業生		就職先	
設 問	平均値	平均値	設 問
B1：倫理観	3.45	3.69	B1：社会人としてのマナー
B3：対人関係形成能力	3.39	3.57	B2：コミュニケーション
B4：責任感	3.60	3.73	B4：責任感
B5：協調性	3.66	3.65	B3：協調性
B6：基礎知識・専門知識を修得	3.96	3.38	C1：基礎知識を有する
B7：基本的技術を習得	3.84	3.20	C3：基礎的技術を有する
B11：自己研鑽力	3.46	3.34	B5：探究心
		3.11	C2：基礎知識を応用する能力

卒業生の設問「B1：倫理観」「B3：対人関係形成能力」「B4：責任感」は、就職先の設問である「B1：社会人としてのマナー」「B2：コミュニケーション」「B4：責任感」と比較して低い評価であった。一方、「B6：基礎知識・専門知識を修得」「B7：基本的技術を習得」「B11：自己研鑽力」は「C1：基礎知識を有する」「C3：基礎的技術を有する」「B5：探究心」または「C2：基礎知識を応用する能力」と比較して高い評価であった。特に、「B6：基礎知識・専門知識を修得」と「C1：基礎知識を有する」、「B7：基本的技術を習得」と「C3：基礎的技術を有する」にはそれぞれ評価に大きな差がみられ、前回（平成24年度）の調査でも同様な結果であった。はたして社会（就職先）が本学卒業生に求める知識・技術レベルが高いために卒業生の自己評価との間に差ができるのか、もしくは知識・技術に関する卒業生の自己評価が高すぎるのかは判然としないが、大学での実習で学んだ様々な手技や方法を確実に身につけるため、臨地実習に行く前にOSCE（客観的臨床能力試験）を実施してはどうかとの意見がカリキュラム委員会で見出されている。

今年度は卒業研究の担当教員より、連絡可能な卒業生にアンケートへの回答を依頼してもらった。その結果、調査開始以来で最も高い回収率になったものの、未だ4割弱である。1期生から4期生までのアンケート結果をみると、大学に好意的な想いを持ってくれている卒業生からの回答が多いように思われる。また自由記述では、後輩のためを思っている意見も散見される。例えば、異常な事を異常と感じる能力を磨く、病態を読み取るための検査値の判読能力を高めることを目的とした「R-CPC（Reversed Clinico-Pathological Conference）」や「応急救護」などの必要性の記述があった。「R-CPC」に関しては就職先からも同様の記述があったが、平成26年度のカリキュラム改正により3年次の「臨床検査学演習」で行うことになっている。また「応急救護」は1年次の「キャリア基礎」で行っている。

このように、社会に出て、大学での学生生活を客観的に振り返った上で意見を述べてくれる卒業生は貴重であり、良くも悪くも多くの意見を聴くには多くの回答を得る必要がある。それは就職先からのアンケート回答も同様である。次回3年後に実施する就職先へのアンケート調査も見据えて、まずは卒業生からのアンケート回収率を上げるための方策を検討し、教育改善につながる評価・意見を一つでも多く回収したい。

2. 看護学科

I. 卒業生へのアンケート調査結果

1. 回収率

	発送数	回答数	回収率
H27 年度	85	26	30.5%
H26 年度	75	12	16.0%
H25 年度	74	19	25.6%

2. 調査結果

A) 卒業時の進路(人)

病院	23
学校	3

B) 現在の所属(人)

病院	23
学校	3

C) 現在の職種(人)

看護師	22
養護教諭	3
保健師	1

●ディプロマポリシーに対する評価

D) あなたは大学での学修や学生生活を通じて以下のものを身につけることができたと思いますか

1. “いのち”に対する温かいまなざしと高い倫理観を身につけることができた
2. 看護の対象の基本的な人権を擁護し、“苦痛”を受け止め、共感的に理解するヒューマンケアの視点を身につけることができた
3. 科学的思考力を基盤に、健康レベルに応じた的確な判断力の基礎と安全に看護実践を行う基本的技術を習得することができた
4. 患者・家族や保健・医療・福祉チームと良好なコミュニケーションをとり、連携を深めるための基本的態度を身につけることができた
5. 医療に対する国際感覚を持ち、看護の本質を迫及し、展望するための自己研鑽能力を身につけることができた

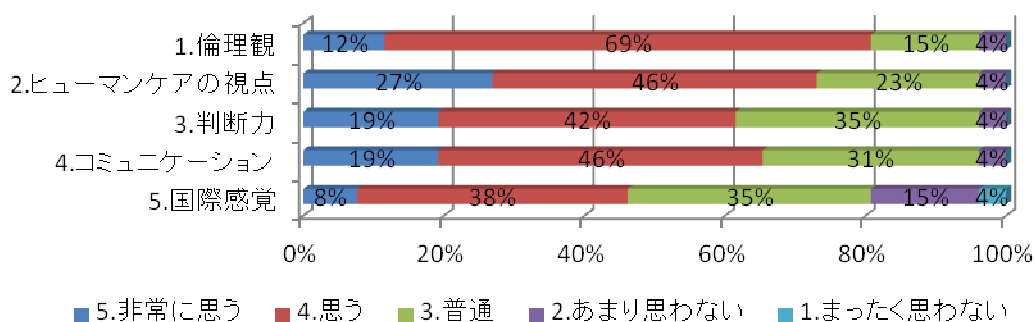


表 1

ディプロマポリシーに関する集計結果	回答の 平均値	回答 4, 5 の割合 (%)	回答 3~5 の割合 (%)	回答 1, 2 の割合 (%)
1 倫理観	3.9	81	100	0
2 ヒューマンケアの視点	4	73	96	4
3 判断力	3.8	61	96	4
4 コミュニケーション	3.8	65	96	4
5 国際感覚	3.3	46	91	19

肯定的な回答（選択肢 4 または 5）の割合が高い能力は、設問 1 は、21 名（81%）の卒業生が「“いのち”に対する温かいまなざしと、高い倫理観」、設問 2 は、19 名（73%）の卒業生が「基本的な人権を擁護し、“苦痛や苦悩”を受け止め、共感的に理解するヒューマン

ケアの視点」設問3は、16名（61%）の卒業生が「科学的思考力的確な判断力の基礎と、安全に看護実践を行う基本的技術」設問4は、17名（65%）の卒業生が「良好なコミュニケーションをとり、連携を深めるための基本的態度」を身につけることができたと回答していた。肯定的な回答がやや少なかった設問5は、12名（46%）の卒業生が「医療に対する国際感覚、看護の本質を追及、展望するための自己研鑽能力」を身につけることができたと回答し、5名（19%）が身につけていないと回答していた。

●教育総合に対する評価

E) 神戸常盤大学の建学の精神に基づいた教育を受けて良かった

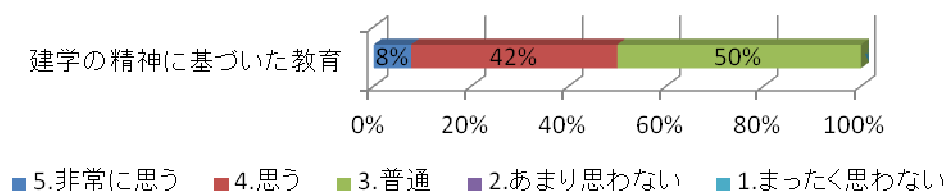


表2

集計結果	回答の 平均値	回答4,5の 割合 (%)	回答3~5の 割合 (%)	回答1,2の 割合 (%)
建学の精神に基づいた教育	3.5	50	100	0

神戸常盤大学の建学の精神に基づいた教育を受けて良かったかの質問に、非常に思うが2名（8%）思うが11名（42%）と卒業生の50%が良かったと回答していた。

●本学の各種支援に対する評価

F) 大学の支援に対してお答えください

1. 講義・演習・実習に対する修学支援・指導について満足している
2. 国家試験に対する支援について満足している
3. 就職、進学に対する支援について満足している
4. 健康管理生活指導に対する支援について満足している
5. 教育環境、設備（図書館、講義授業および演習設備、インターネットを含めたコンピューター設備、運動場、テニスコート）などについて満足している
6. 神戸常盤大学保健科学部看護学科教員との関わりについて満足している
7. チューターとの関わりについて満足している

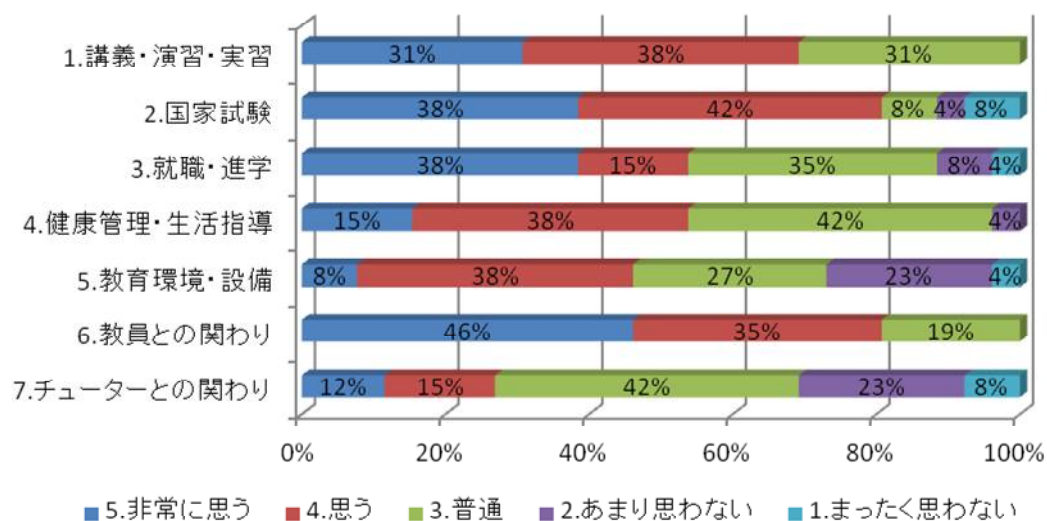


表 3

大学で受けた支援に関する集計結果	回答の 平均値	回答 4, 5 の割合 (%)	回答 3~5 の割合 (%)	回答 1, 2 の割合 (%)
1 講義・演習・実習	4.0	69	100	0
2 国家試験	4.0	80	88	12
3 就職、進学	3.8	53	90	10
4 健康管理、生活指導	3.4	53	96	4
5 教育環境、設備	3.2	46	73	27
6 教員との関わり	4.2	81	100	0
7 チューターとの関わりについて満足している	4.0	27	69	31

肯定的な回答（選択肢 4 または 5）の割合が高い支援には、設問 1 は、18 名（69%）の卒業生が「講義・演習・実習に対する修学支援・指導」、設問 2 は、21 名（80%）の卒業生が「国家試験」設問 3 は、14 名（61%）の卒業生が「就職、進学」設問 4 は、14 名（53%）の卒業生が「健康管理、生活指導」設問 6 は、21 名（81%）の卒業生が「教員との関わり」について満足していると回答していた。肯定的な回答がやや少なかった設問 5 は、12 名（46%）の卒業生が「教育環境、設備」に満足していると回答し、7 名（27%）が満足していないと回答していた。また設問 7 は、7 名（27%）の卒業生がチューターとの関わりに満足していると回答していた。8 名（31%）の卒業生は満足していないと回答していた。

●職業選択の満足度評価

G) 現在の職業を選択してよかったと思う

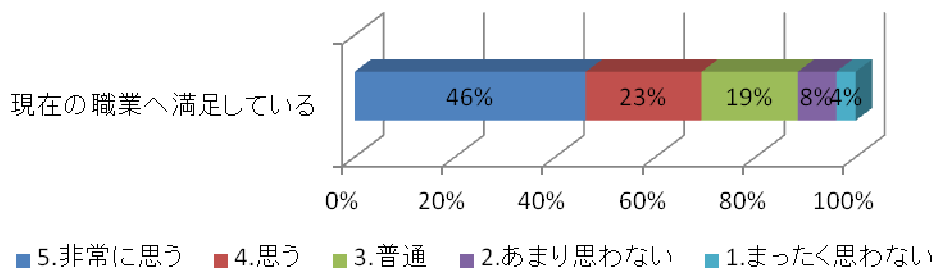


表 4

集計結果	回答の 平均値	回答 4, 5 の割合 (%)	回答 3~5 の割合 (%)	回答 1, 2 の割合 (%)
現在の職業を選択してよかったと思う	4.0	69	88	12

肯定的な回答（選択肢 4 または 5）にした養護教諭 3 と保健師 1 名を含む 12 名（46%）思うが 6 名（23%）が満足と回答していた。肯定的な回答がやや少なかった。看護師 3 名（12%）が満足していないと回答していた。

●総合評価

H) 神戸常盤大学保健科学部看護学科を卒業して良かったと思う

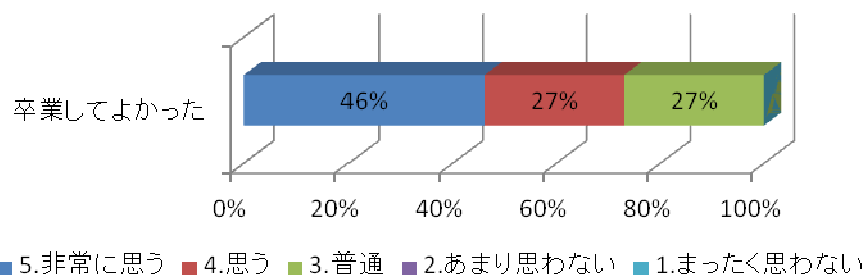


表 5

集計結果	回答の 平均値	回答 4, 5 の 割合 (%)	回答 3~5 の 割合 (%)	回答 1, 2 の割合 (%)
本学保健科学部看護学科を卒業して良かったと思う	41	73	100	0

肯定的な回答（選択肢4または5）したGは、19名（73%）の卒業生が神戸常盤大学保健科学部看護学科を卒業して良かったと回答していた。

その理由については教員への満足度が高い内容「学生個に応じた学習・就職指導」「優しく厳しい指導」「尊敬できる」「親身な対応」「教員からの言葉が励み」などが。卒業生の成果としては、「共感的に理解、ヒューマンケアの視点」が身についた。「人との関わりを通して自分の視野を広げる」ことができた。「同じ志をもつ仲間」が得られた。大学については「アットホームな大学」だったと回答していた(表5)。

設問) 大学への要望、アドバイス、感じた事などについての自由記載

- ・卒業後も母校の教員に相談ができ安心感がある。「大学に戻り少し話をしたいな」と気軽に思える環境であって欲しい。
- ・実習の記録の書き方、アセスメントの仕方をもっと学んで身につけておけば良かったと感じている。
文章を書く力を学生のうちに練習したかった。
- ・論文検索のシステム（ログイン制限）が改良されると良いと思う。
- ・養護教諭課程のなかで生徒の訴え（腹痛、捻挫や骨折）に対して休み時間を想定した数分以内に問診や触診などの仕方やアセスメント後の手当てについての演習があると良かったと思う。
- ・実習中は図書の貸し出し期間を延長できたら良かったと思う。
- ・テスト期間中になると学習スペースが少ないと感じた。空き教室をわかりやすくしてもらいたい。
- ・食堂が狭い。売店の商品も少ない。湯もすぐなくなるのでカップ麺もつukれない。

Ⅱ. 就職先へのアンケート調査結果報告書

1. 回収率

表 1

	発送数	回答数	回収率
H27 年度	40	25	62.5%
H24 年度	40	30	75.0%

2. 調査結果

A) 貴院、貴施設についてお尋ねします

A-1) 卒業生の人数(人)

卒業生	1 名	2 名	3 名	4 名	その他
施設	11	4	3	0	7

A-2) 就職先の種別(人)

国立・公立病院	公的病院	私立病院	その他
4	8	10	2

●個人に対する評価

B) ディプロマポリシーの視点で卒業生（個人）に対する評価についてご回答ください

1. “いのち”に対する温かいまなざしと高い倫理観を身につけることができた
2. 看護の対象の基本的な人権を擁護し、“苦痛”を受け止め、共感的に理解するヒューマンケアの視点を身につけることができた
3. 科学的思考力を基盤に、健康レベルに応じた的確な判断力の基礎と安全に看護実践を行う基本的技術を習得することができた
4. 患者・家族や保健・医療・福祉チームと良好なコミュニケーションをとり、連携を深めるための基本的態度を身につけることができた
5. 医療に対する国際感覚を持ち、看護の本質を迫及し、展望するための自己研鑽能力を身につけることができた

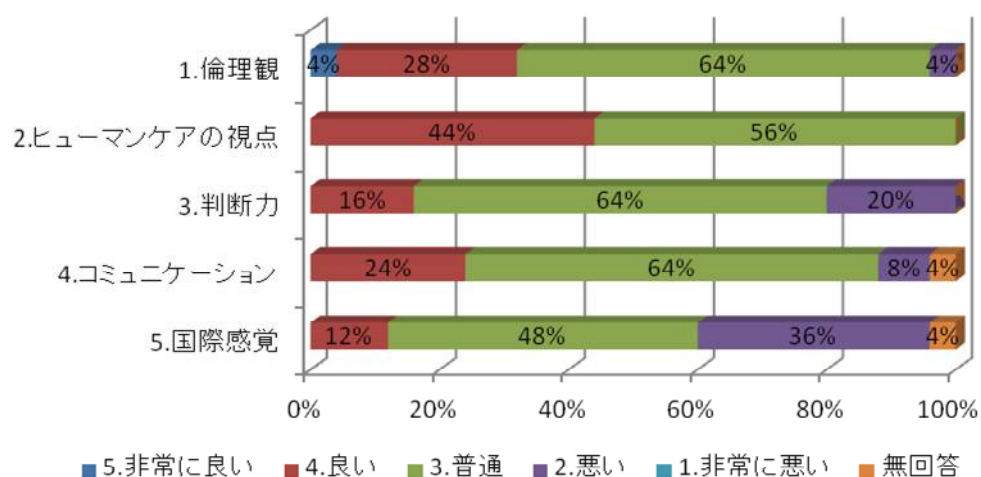


表 2

ディプロマポリシーの視点に対する集計結果	回答の平均値	回答 4, 5 の割合 (%)	回答 3~5 の割合 (%)	回答 1, 2 の割合 (%)	無回答の割合 (%)
1 倫理観	3.3	32	96	4	0
2 ヒューマンケアの視点	3.4	44	100	0	0
3 判断力	3.0	16	80	20	0
4 コミュニケーション	3.0	24	83	8	4
5 国際感覚	2.6	12	60	36	4

肯定的な回答（選択肢 4 または 5）の割合が高い能力は、設問 1 「“いのち” に対する温かいまなざしと、高い倫理観」が 8 名（32%）、設問 2 「基本的人権を擁護し、“苦痛や苦悩” を受け止め、共感的に理解するヒューマンケアの視点」が 11 名（44%）、設問 4 「良好なコミュニケーションをとり、連携を深めるための基本的態度」が 6 名（24%）の回答者が身についていると回答していた。肯定的な回答がやや少なかった能力は、設問 5 「医療に対する国際感覚、看護の本質を追及、展望するための自己研鑽能力」が 9 名（36%）、設問 3 「科学的思考力的確な判断力の基礎と、安全に看護実践を行う基本的技術」が 5 名（20%）の回答者が低いと回答していた。

●大学教育に対する評価

c) 大学教育に対する評価についてご回答ください

1. 本学卒業生は、看護師・保健師・養護教諭としての基礎知識を身につけている。
2. 本学卒業生は、看護師・保健師・養護教諭としての基本的技術を身につけている。
3. 本学卒業生は、社会人としてのマナーを身につけている
4. 本学卒業生は、看護師を選択したことをよかったと考えているようである。
5. 本学卒業生は、看護職を続けようと考えているようである。
6. 本学卒業生は、どんな看護師になりたいか、自分なりの考えを持っているようである。
7. 本学卒業生は、看護師として社会に貢献しようと思っているようである。
8. 本学卒業生は、医療チームの一員として貢献しようとしている。
9. 本学卒業生は、将来の展望（キャリアアップ）を持っているようである。

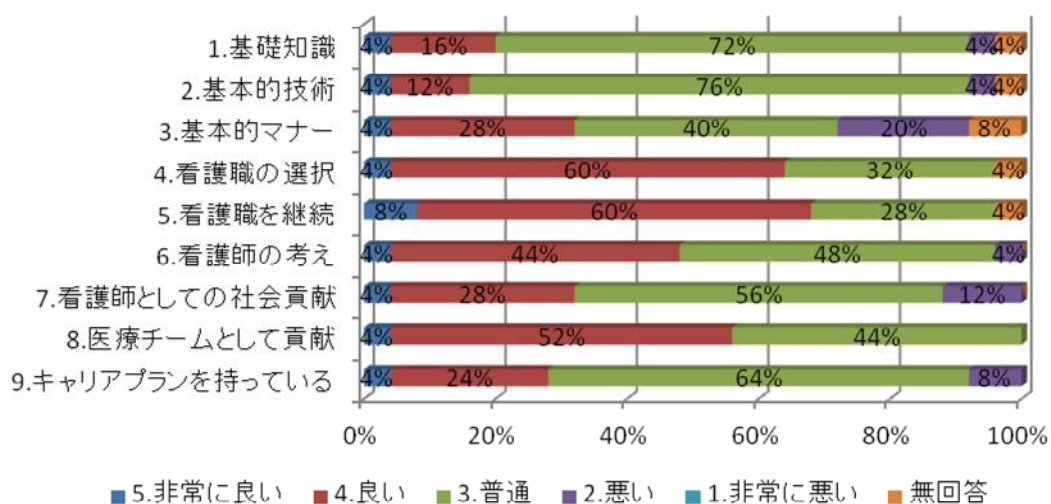


表 3

本学教育に関する集計結果	回答の 平均値	回答4, 5の 割合 (%)	回答3~5 の割合 (%)	回答1, 2の 割合 (%)	無回答の 割合 (%)
1基礎知識	3.2	20	92	4	4
2基本的技術	3.2	16	92	4	4
3基本的マナー	3.2	32	72	20	8
4看護職を選択	3.7	64	96	0	4
5看護職の継続	3.8	68	96	0	4
6看護師の考え	3.5	48	96	4	0
7看護師としての社会貢献	3.2	32	88	12	0
8医療チームとして貢献	3.6	56	100	0	0
9キャリアアップを待っている	3.2	28	92	8	0

肯定的な回答（選択肢 4 または 5）の割合が高い項目は、設問 4「看護職を選択」が 16 名（64%）、設問 5「看護職を継続」が 17 名（68%）、設問 8「医療チームの一員として貢献」が 14 名（56%）の回答者が考えを持っているようだと回答していた。肯定的な回答がやや少なかった回答（選択肢 1 または 2）の割合が低い項目は、設問 3「社会人として基本的マナー」が 5 名（20%）身についていないと回答していた。また設問 7「看護師としての社会貢献」が 3 名（12%）の回答者が低いと回答していた。

卒業評価を教育改善に活かすための取り組みと考察

今回の卒業生に対する調査は、卒業生の就職先へ配送したことで回収率が上がり、昨年と比べると 2 倍の回収率（30.5%）であった。卒業生の経年的な就職動向の把握、長期的な教育の成果に基づき卒業生にアンケート調査を行うことは意義があるので今後も卒業生にアンケート調査への協力を求めていくことが必要と考える。アンケート協力者（卒業生）の概要としては、卒業生の進路として病院勤務の看護師が 22 名、保健師が 1 名、養護教諭が学校に所属していた。

ディプロマポリシーについての評価

ディプロマポリシーについての評価は、概ね高い評価であった。教育総合に対する評価についても満足度が高かった。卒業生は建学の精神のもと本学の教育において知識、技術を修得してヒューマンケアのプロとしての看護実践能力を得ることができたと満足度が高かった。

就職先のアンケート協力者からのディプロマポリシーについての卒業生への評価からは「相手を尊重して関わっている」「丁寧である」「相手の立場に立って考えられる」という態度が養われていると評価を得ていた。しかしコメントのなかには「仕事を覚えることで精一杯」と表現される部分もあり、卒業生が仕事と生活の環境の変化に適応することや若者気質についてもやや肯定的ではない意見も寄せられた。学科内では公立・公的病院と私立病院の違いについての関心が寄せられた。卒業生の両施設の割合はほぼ同じであるが、アンケートの回答者は、直属の指導者、管理者と幅がある。関連性についても分析をしていく必要があった。社会人基礎力などの選択肢は今回の調査の項目には入れていない。回答者の自由記載にあげられていた内容に関連して社会生活に必要な能力については、調査の目的に応じて検討が必要であると考えられる。

大学で受けた支援についての評価

学生への支援としては、臨床力を学ぶために講義、演習、実習によって自信が得られるように修学支援を行っている。また国家試験対策として専門領域からの教員が集まり計画的に取り組みをしている。就職委員会は 3、4 年次より面接を行い、希望の進学就職についての支援を行っている。学生は看護師、保健師に加えて養護教諭の有資格を得る為にキャリア支援課、教養支援センターの利用、専門分野の教員への相談支援がある。また就職活動や国家試験を体験した先輩からメッセージが紹介されるなど、学生の支援の認知度も高い。以上のように卒業生の評価が高い背景であると考えられる。本学科では、「チューター制度」を取り入れている。クラス担任とは別に専任の教員が少人数を 1 年次から 4 年次まで

受け持ち、縦断的に支援するものである。学生の認知度を確認はしていないが、学生はその制度を知って必要な場面で学生が利用していくため、満足度としてはやや肯定的ではない結果となっている。しかし教員との関わりについては、大変高い評価を得て「学生個に応じた学習・就職指導」「優しく厳しい指導」「尊敬できる」「親身な対応」「教員からの言葉が励みになった」など日常的に教員との対話があり、満足度が高い。健康管理、生活指導については、特に感染症対策として実習前検査や実習中においても健康管理、生活指導について指導を徹底しているため認識が高く評価が高くなっているものと考ええる。

環境面については大学への要望として「食堂が狭く、売店の商品が少ない、湯も少なくてカップ麺が作れない」など不満足な状況が具体的にあげられた。改善策が必要である。他にも6件の要望が寄せられた。

職業選択の満足度

職業選択の満足度は、養護教諭3名と保健師1名を含む9割の卒業生が満足していると回答していた。また大学での就職活動に対する支援は、キャリア支援課を設置し、就職委員会活動支援、教職支援センターなどの支援がある。大学で受けた支援についての満足度も9割と高く評価できる。1割の肯定ではなかった卒業生については、就職先アンケート協力者が現在の卒業生の状況として表現している「まだ仕事に慣れることで精一杯」の心境で満足を得られずにいると考えられる。「若者の仕事生活実態調査」（2006）の報告書からは仕事をする上で卒業生が重視していることとのギャップについて報告されている。そのため卒業生の実態についても把握し、早期離職予防となるように支援していく必要があると考える。

3. 口腔保健学科

1. 卒業生へのアンケート調査結果

結果の概要

1. 回収率

卒業生	発送数	回答数	回収率
平成 27 年度	73	8	11.0%
平成 26 年度	61	12	19.7%
平成 25 年度	70	15	21.4%

回収率は調査開始以来、最低であった。

2. 調査結果

● 卒業後の進路

A) 現在の勤務先の状況

病院	1	12.5%
歯科診療所	7	87.5%

C) ディプロマポリシーに対する評価：本学で身に付けたことについてお答えください。

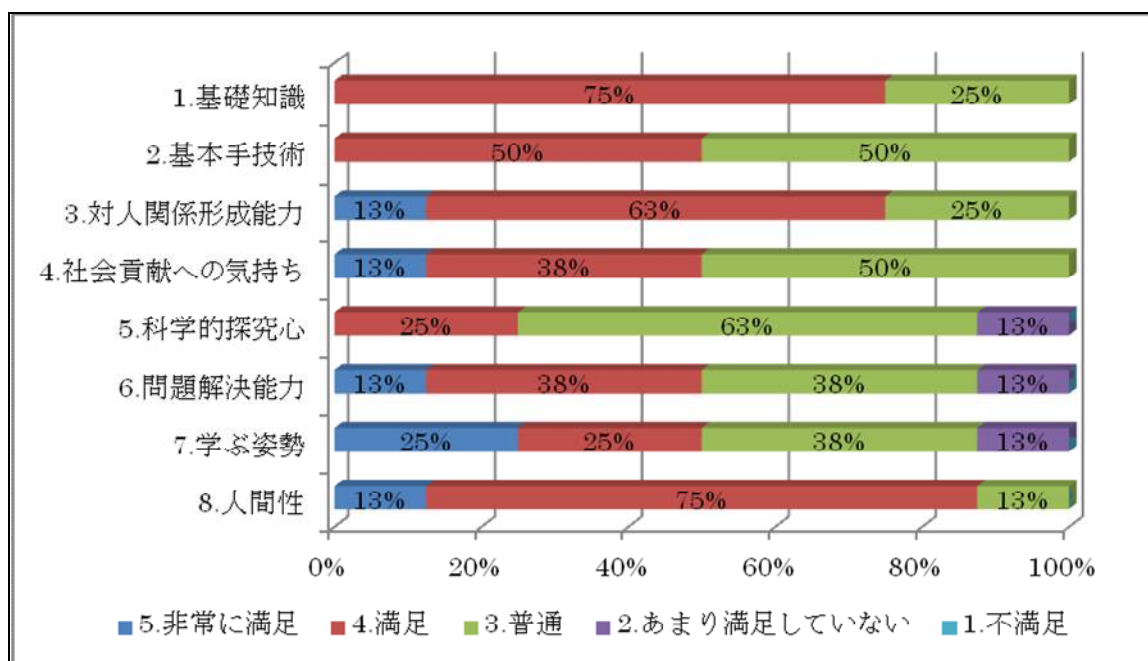
※回答は B・C 共通で 5 段階評価

- | |
|-----------------------------|
| 5 非常に満足 または 非常に当てはまる |
| 4 満足 または 当てはまる |
| 3 普通 どちらともいえない。あるいはわからない |
| 2 あまり満足していない または あまり当てはまらない |
| 1 不満足 または 全く当てはまらない |

<調査項目>

1. 神戸常盤大学短期大学部では現在の職場にとって必要な**基礎知識**を得ることはできましたか。
2. 神戸常盤大学短期大学部では現在の職場にとって必要な**基本的技術**を得ることはできましたか。
3. 神戸常盤大学短期大学部では**個々の命と人格を尊重した対人関係形成能力**を身につけることはできましたか。
4. 神戸常盤大学短期大学部では**地域社会に貢献する気持ち**を身につけることはできましたか。
5. 神戸常盤大学短期大学部では**科学的探究心**を身につけることはできましたか。

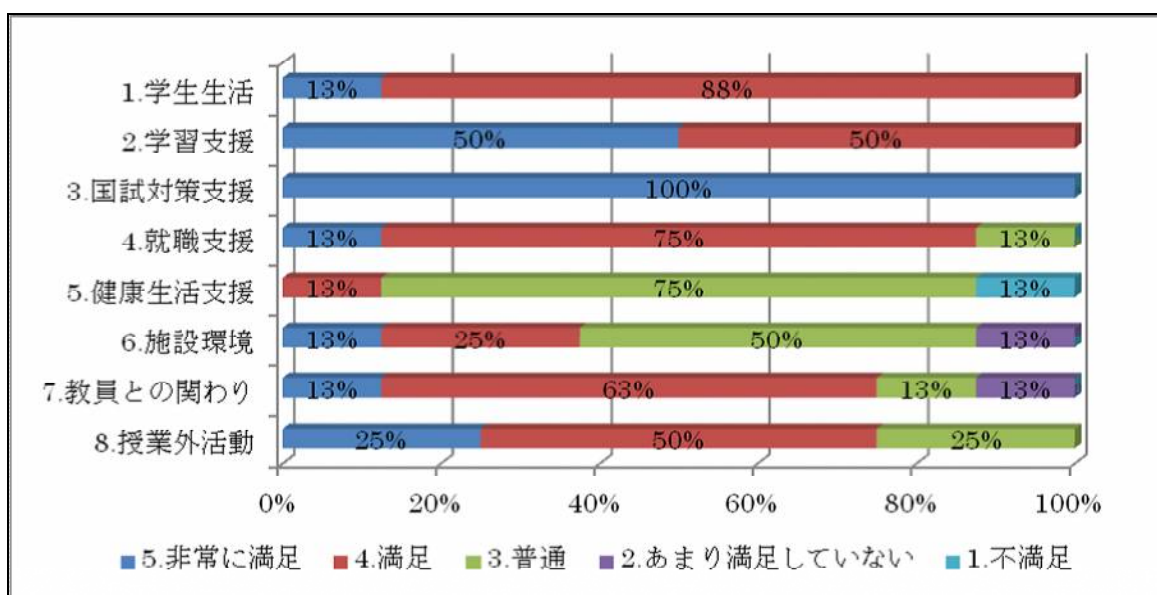
6. 神戸常盤大学短期大学部では**問題解決能力**を身につけることはできましたか。
7. 神戸常盤大学短期大学部では**生涯を通じて学ぶ姿勢**を身につけることができましたか。
8. 神戸常盤大学短期大学部では**心豊かな人間性**を養うことができましたか。



- B：各種支援に対する評価：本学の各種支援についてお答えください。

<調査項目>

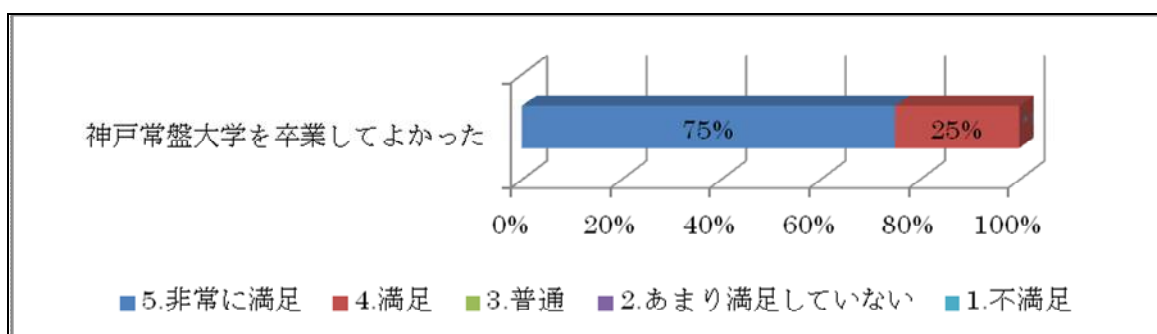
1. あなたにとって神戸常盤大学短期大学部での**学生生活**は**全体**としていかがでしたか。
2. あなたにとって神戸常盤大学短期大学部での**学習に対する支援**はいかがでしたか。
3. あなたにとって神戸常盤大学短期大学部での**国家試験に対する支援・対策・指導**はいかがでしたか。
4. あなたにとって神戸常盤大学短期大学部での**就職・進学に対する支援、対策、指導**はいかがでしたか。
5. あなたにとって神戸常盤大学短期大学部での**健康管理や生活指導に対する支援**はいかがでしたか。
6. あなたにとって神戸常盤大学短期大学部での**施設環境**（図書館、教室、演習・実習設備、インターネットを含めたコンピューター設備、食堂、運動場、テニスコートなど）はいかがでしたか。
7. あなたにとって神戸常盤大学短期大学部での**教員との関わり**はいかがでしたか。
8. あなたにとって神戸常盤大学短期大学部での**授業外の活動**（課外活動：部活、ボランティアなど）はいかがでしたか。



D) 総合評価：学生時代を振り返って総合的にお応えください。

<調査項目>

1. 神戸常盤大学短期大学部口腔保健学科を卒業してよかったと思う。



3. 考察

(1) 回収率

他学科の回収率は飛躍的に上昇したにもかかわらず、本学科は昨年度よりもさらに低下し過去最低となった。このことは、深く憂慮すべき問題である。本学の教員や後輩に対してより良い教育環境を作るための作業に協力するという、いわば「愛学心」ともいうべき気持ちが育てられなかったということである。本学で学んだことを誇りに感じ、大学の名前を耳にするだけで心躍る思いを抱く同窓の志が育まれるような仕掛けが必要である。

(2) 調査結果A：進路

病院歯科 1 名、歯科診療所 7 名

(3) 調査結果C：ディプロマポリシーに対する評価

本本学で身につけた能力などについて設問ごとの平均値を表 1 にまとめた。

平成 27 年度	4.0 未満
平成 26 年度	4.0 以上

基礎知識	基本的技術	対人関係形成能力	社会貢献への気持ち	科学的探究心	問題解決	学ぶ姿勢	人間性	平均
3.8	3.5	3.9	3.6	3.1	3.5	3.6	4.0	3.8
4.2	4.4	4.9	4.5	3.6	3.4	4.3	3.4	4.1

表 1

3.0 未満の項目はなかったが、8 項目中 6 項目で昨年よりも低い回答であり、4.0 以上の項目は「人間性」のみであった。おそらくは就職後に求められるいろいろな能力に対して無力感を持った表れだと思われる。

「基本的技術」、「対人関係形成能力」、「社会貢献への気持ち」は軒並み 1, 0 ポイント近く低下した。特に低かったのが「科学的探究心」である。初年次教育から卒業まで継続して、全ての授業の中に取り入れていくべきものであることは承知であるにもかかわらず、毎年のようにこの項目の自己評価が低いのは、教員が身を持って各領域の神秘的な部分や不思議さ、おもしろさといった興味を持たせる授業が展開できていないことに起因する。これは、アクティブラーニング導入への舵切りが全学科的（全学的）な方向性として必要であることを物語っている。正課内・外の学びを通じてテクニカルスキルよりもむしろノンテクニカルスキルの向上を第一義にすべきであると考ええる。

(4) 調査結果 B：各種支援

本学の各種支援について設問ごとの平均値を表 2 にまとめた

学生生活全体	学習支援	国試支援	就職支援	健康生活支援	施設環境	教員との関わり	授業外活動	平均
4.1	4.5	5.0	4.0	2.9	3.4	3.8	4.0	4.1
4.1	4.5	4.9	4.8	3.8	3.5	4.5	3.2	4.0

表 2

5 段階評価ではあるが、卒業生は教員に気を遣って低い評価はつけにくいと思われるため 3 は普通よりもやや悪い評価としてとらえる必要がある。4.0 を下まわっているのは、「健康生活支援」と「施設環境」、「教員との関わり」であった。毎年のことであるが、本年は特に「健康生活支援」が低い評価である。心のケアも含めた健康管理は学科による対応ではなく、大学全体の支援として健康管理センターが担うことになっている。次年度より専任者が配置されるため変化を期待したい。施設環境も毎年評価が低い項目である。とくに口腔保健学科においては、学生数に比較して教室が狭いという苦情が授業評価でも毎回指摘されている。広い教室を新たに作ることも考えられるが、むしろ少人数の授業を増やすといった授業内容の改善などの工夫で対応することも必要である。

(5) 調査結果 D：総合評価

総合評価の平均は 4.8 と昨年とほぼ同様の結果であった。

(6)まとめ

大学生生活が「おもしろい」と感じさせる教育の在り方を模索する必要がある。調査Dの総合評価が4.8と高いにもかかわらず、調査Bの「学生生活全体」の評価が4.1と低い。これは毎年の傾向である。この項目の評価を向上させていくには、大学を好きにさせることであり、特に本年の調査Cのように学習に対する自己評価が低いと生活全体の評価も低くなるであろう。多様性を持った学習支援の強化が必要である。調査Bからは授業内容の改善、調査Cからは学修カリキュラムの改革が必要であると思われた。テクニカルスキルのみならずノンテクニカルスキルの向上に向けて、学科内FDの充実が望まれる。

II. 就職先への調査結果報告

調査対象

平成27年3月卒業生の就職先48施設

結果の概要

1. 回収率

就職先	発送数	回答数	回収率
平成27年度	48	35	73%
平成24年度	95	52	54%

2. 調査結果

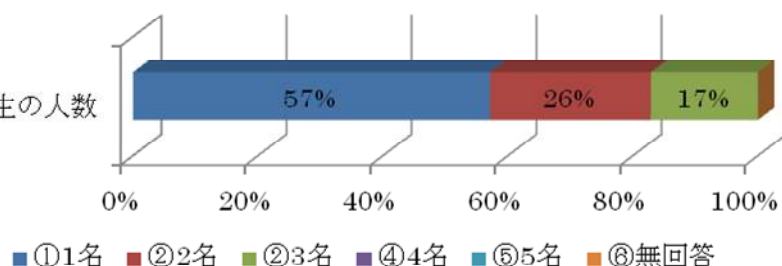
A) 施設概要

- 1) 貴院・貴施設についてお尋ねします。

神戸常盤大学短期大学部口腔保健学科の卒業生は何人いますか。

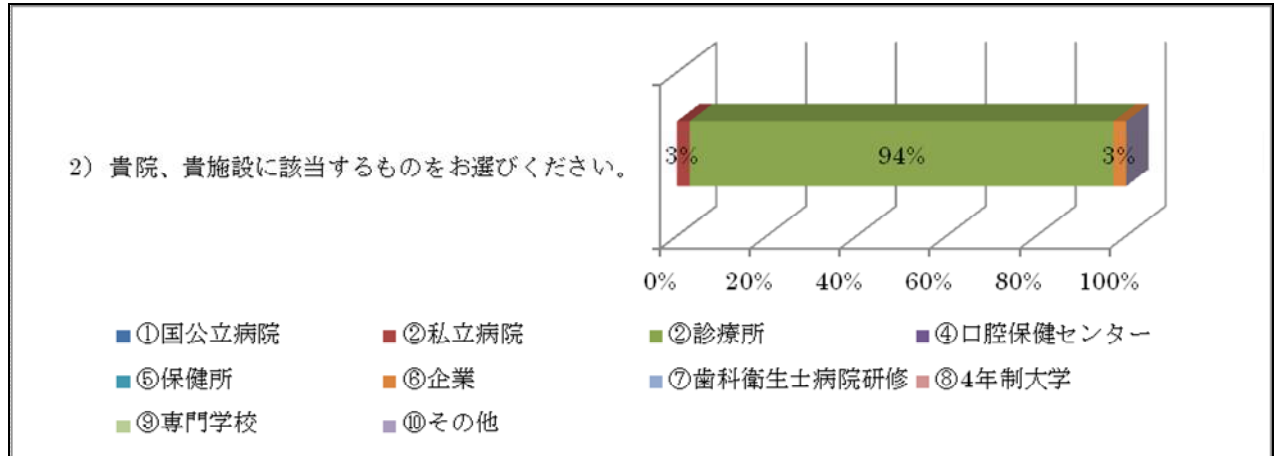
1名	2名	3名	4名	5名	無回答
20	9	6	0	0	0

1) 卒業生の人数



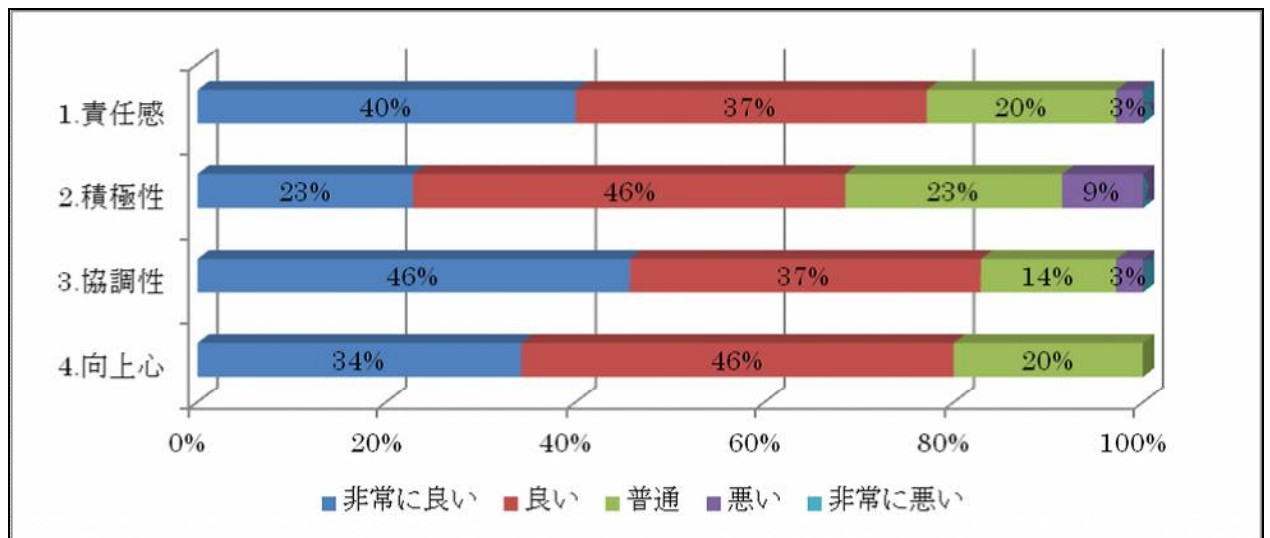
2) 貴院・貴施設について該当するものをお選び下さい。

国公立 病院	私立 病院	診療 所	口腔保健 センター	保健 所	企業	歯科衛生士病 院研修	4年生 大学	専門 学校	その 他
0	1	33	0	0	1	0	0	0	0



B) 個人に対する評価：神戸常盤大学短期大学部口腔保健学科卒業生に対する評価について
ご回答ください

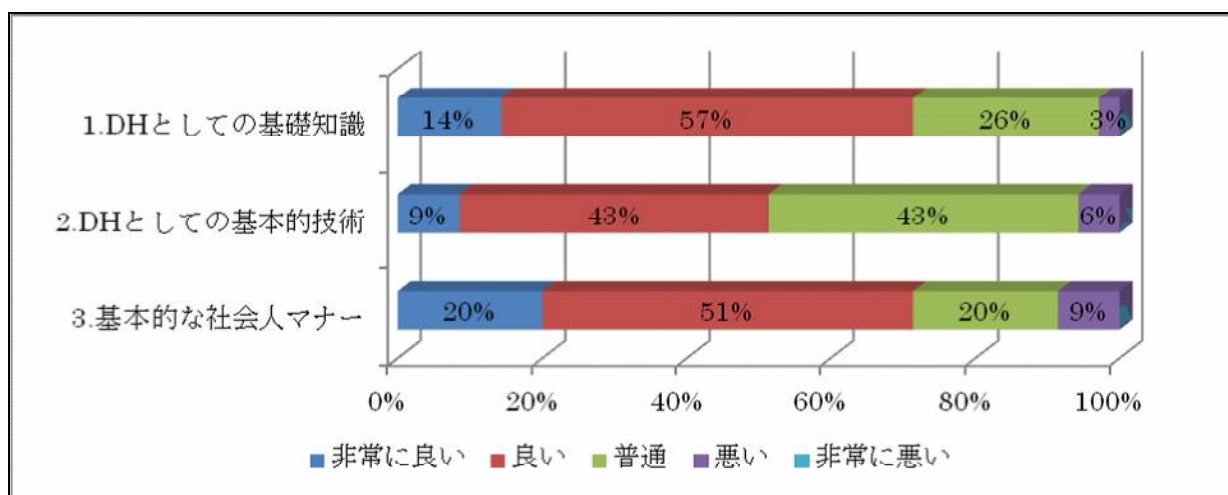
	非常に 良い	良い	普通	悪い	非常に 悪い
4. 仕事に対する向上心はいかがですか。	12	16	7	0	0
3. 患者さんを含めた周りの人に対する態度や協調性、コミュニケーションはいかがですか。	16	13	5	1	0
2. 積極性はいかがですか。	8	16	8	3	0
1. 責任感はいかがですか。	14	13	7	1	0



「非常に良い」のカテゴリが、協調性、責任感、向上心、積極性の順であることは、周りに合わせることはできるが、自律性を持って率先した行動がとれないという側面をあらわしている。前回（平成24年調査）のアンケートでも同様の指摘があり、口腔保健学科卒業生の特徴であると考えられる。

C) ディプロマポリシーに対する評価：神戸常盤大学短期大学部口腔保健学科卒業生を通して見えてくる大学に対する評価についてご回答ください。

	非常に良い	良い	普通	悪い	非常に悪い
3. 本学卒業生は社会人として基本的なマナーを身につけている。	7	18	7	3	0
2. 本学卒業生は歯科衛生士としての基本的技術を身につけている。	3	15	15	2	0
1. 本学卒業生は歯科衛生士としての基礎知識を身につけている。	5	20	9	1	0



「非常に良い」のカテゴリが、社会人マナー、基礎知識、基礎技術の順であるが、総体的に前回よりもポイントは低い。過去にも指摘されるように、本学科卒業生の技術的評価は低い。これを補って余りある知識のさがあればよしとされるかもしれないが、基礎知識も乏しいとなると、カリキュラムや授業内容を再度見直す必要があると思われる。

4. 看護学科通信制課程

1. 卒業生へのアンケート調査結果

結果の概要

1. 回収率

	発送数	回答数	回収率
H 2 7 年度	148	51	34.5%
H 2 6 年度	195	67	34.4%
H 2 5 年度	167	58	34.7%

回収率は昨年度とほぼ同じであった。

2. 調査結果

・ 回答者の背景

A) あなた自身についてお尋ねします。

○性別および年齢

	女性 (人)	男性 (人)	合計 (人)
30 歳代	11	1	12
40 歳代	21	1	22
50 歳以上	17	0	17
合計	49	2	51

○就業の状況

	合計 (人)
働いている	49
働いていない	2
無回答	0
合計	51

○勤務場所

	合計 (人)
病院	29
診療所または開業医	8
老人保健施設または 特別老人ホーム	10
その他	3
無回答	2
合計	52

※「1 と 3」と回答した者が 1 名

○卒業後の職場

	合計 (人)
勤務先が変わった	12
部署が変わった	8
役職に変化があった	3
看護職以外に転職した	0
変わっていない	28
無回答	2
合計	53

※「1 と 3」と回答した者が 1 名

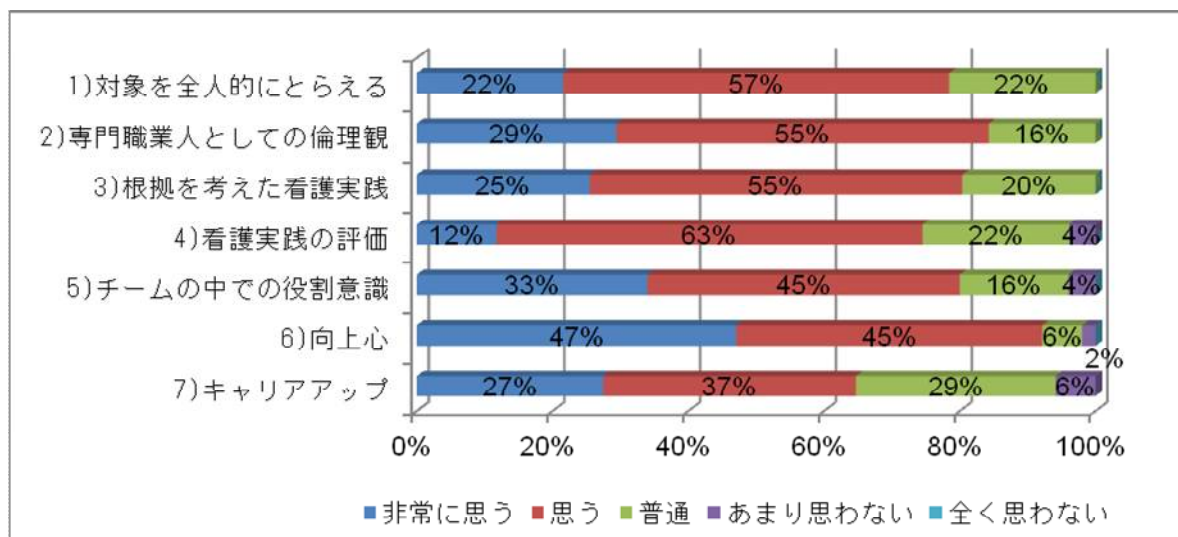
「2 と 3」と回答した者が 1 名

・ ディプロマポリシーに対する評価

C) ディプロマポリシーの視点からご自身についてお答えください。

質問内容：

- 1) 対象を全人的にとらえることができるようになった
- 2) 専門職業人としての倫理観を持って行動するようになった。
- 3) 根拠、エビデンスを考えながら看護の実践が行えるようになった。
- 4) 看護実践を評価するようになった。
- 5) 保健医療福祉チームの中で看護専門職の役割を意識するようになった。
- 6) 向上心を持ち看護の専門性を深めたいと思うようになった。
- 7) 今後キャリアアップを目指し、進学または専門分野に進みたいと思うようになった。



すべての項目において肯定的な回答（非常に思う・思う）が65%を超えていた。中でも最も肯定的な回答の比率が高かったのは、昨年同様「向上心を持ち看護の専門性を深めたいと思うようになった。」92.9%で昨年の88.1%を上回っている。ついで「専門職業人としての倫理観を持って行動するようになった。」「根拠・エビデンスを考えながら看護の実践が行えるようになった。」で、いずれも8割近い卒業生が肯定的にとらえていた。

肯定的な回答の比率が低かったのは「今後キャリアアップを目指し、進学または専門分野に進みたいと思うようになった。」の64.8%であったが、昨年の62.0%に比べ、約3%増加していた。

自由記述内容を以下に示す。

(向上心を持ち看護の専門性を高めたい)

- ・ 自身の意識の変化（向上心）が大きい。
- ・ 学ぶ事に対して積極的になった。院内外の研修に目が行くようになった。「山岳看護

師」を目指す。

(専門職者としての倫理観)

- ・ 倫理やRCAなど他人ごとのように考えていたが、今は接遇委員として職場で研修スタッフの一員です。
- ・ 専門職ということで自信をもって仕事が出来ていると感じている。

(根拠・エビデンスを考えた看護実践)

- ・ 根拠（エビデンス）を考える力が足りなかったが、学んでいく事、レポートで構成して自分の考えを改めて探究する事で考える力がついていった。

(キャリアアップを目指す)

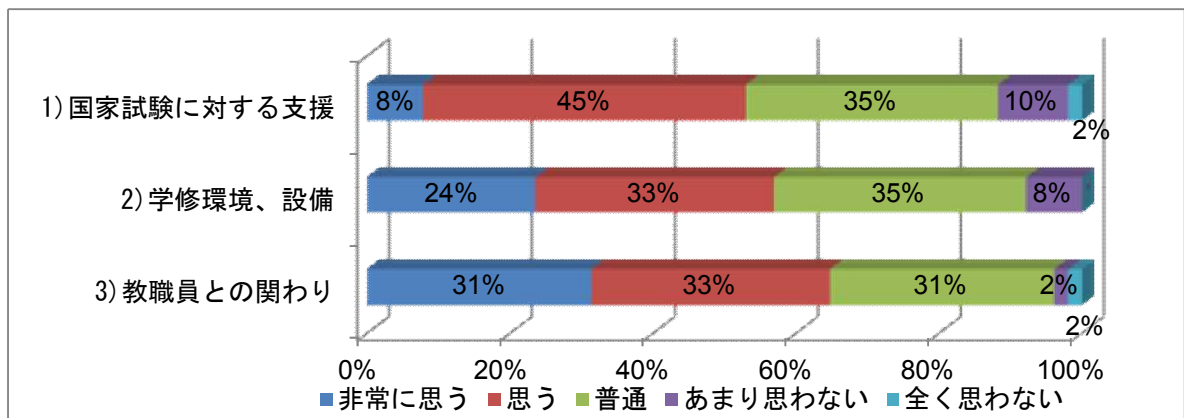
- ・ さまざまな研修にも参加し、県依頼の講師となることも予定している。
- ・ 患者や家族を支援するための心理学を学びたいと思う。
- ・ 年齢を考えると次のステップアップは難しいと思う反面、何かできる事はないかと探している自分もいる。
- ・ 専門性を深めると活動の場も広がる。自分に合った看護の専門性を深めたい。

・ 大学の各種支援に対する評価

D) 大学の支援に対してお答えください。

質問内容：

- 1) あなたにとって神戸常盤大学短期大学部看護学科通信制課程での国家試験に対する支援はいかがでしたか。
- 2) あなたにとって神戸常盤大学短期大学部看護学科通信制課程での学修環境、設備はいかがでしたか。(教室、図書館、ハローホール、地方会場など)
- 3) あなたにとって神戸常盤大学短期大学部看護学科通信制課程での教職員との関わりはいかがでしたか。(対面授業、レポート添削、学修相談、電話対応などを含む)



最も肯定的な回答の比率が高かったのは「教員とのかかわり」で 64.7%であった。肯定的な回答の比率が低かったのは「国家試験に対する支援」の 52.9%であるが、一昨年の 27.0%、昨年の 40.9%に続き肯定的にとらえる学生が年々増えている。

自由記述内容を以下に示す。

(国試に関して)

- ・スクーリングのように他会場でも対策をしてもらいたかった。
- ・国試対策にもっと時間を作って欲しかった。

(設備に関して)

- ・本人が積極的に関われば大学の支援は充実している。
- ・遠方からの通学でしたが、まったく不自由は感じなかった。
- ・図書館は清潔感もあり、いろいろな書籍があり、設備はとても良かった。
- ・地方会場でのスクーリング開設は行きやすかった。会場の設備も整っていたように思う。

(教職員とのかかわりについて)

指導面：

- ・添削の意味がわからない時は電話での対応をして頂き、先生からも気にかけて頂いたことが良かった。
- ・顔の見えない関係でもレポートを通しての指摘、励ましはとても暖かく優しさを感じ嬉しかった。
- ・常盤のレポートは確かに難しかった。でも繰り返して読むと見えてくるものがあり、これも勉強のひとつだと思った。これを乗り越え国試に合格した事で自信がついた。
- ・レポート添削や対面授業も理解しやすい内容で、合格した時の先生のコメントに感謝と達成感を持つことができた。
- ・丁寧に添削し、指導して頂いた言葉の数々は大切に、今後に活かして仕事をしていきたい。
- ・レポートの書き方さえわからなかった自分が卒業できたのは、厳しいながらもレポートに一生懸命コメントをして下さった先生方のおかげ。
- ・自分の看護観を深く引き出してもらった。看護師という職業は専門的かつ人となりが必要であると改めて考えさせられた。

関わり：

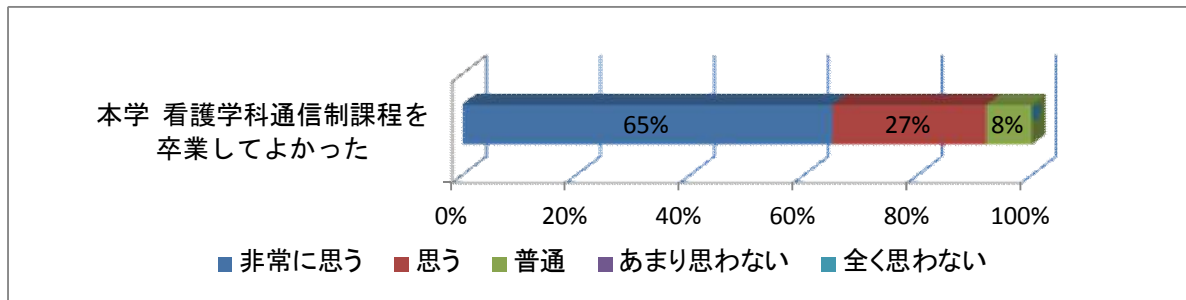
- ・先生方と出会えたことはとても感謝しています。尊敬できる先生方が多かった。教員の先生方に、人としての魅力を感じた。
- ・積極的に先生方との関わりを持てば良かったのではと反省しています。

要望：

- ・不在や多忙だったらと考え電話しかねた。メールでのコミュニケーションができれば良かった。スクーリングでは色々質問できて満足している。
- ・実習、卒業に関わるレポート提出の期限など個別の対応になるが、担任制だと生徒は心強いと思う。

・ 総合評価

B) 学生時代を振り返って総合的にお答えください。



肯定的にとらえている学生が90%以上で否定的にとらえている卒業生は見られなかった。

自由記述内容を以下に示す。

- ・ 厳しいレポートに悪戦苦闘し乗り越えたことで自分が成長できた。
- ・ 学んだことが役に立っている。
- ・ 質の良い教育が学生に与えるものを実感できた。
- ・ 学ぶ楽しさを身につけた。生涯学び続けたいと感じた。
- ・ 一生懸命で何が何だかわからずついていった。今、それが役に立っており、なるほどと思えるようになり、仕事をしていく中で実感している。

《卒業評価を教育改善に活かすための取組みと考察》

今回の卒業生からのアンケート調査結果を今後の教育に活かすために、H27年2月の課程会議において話し合いを行った。

昨年度の取り組みの評価

1. 国家試験対策委員との共有と活用

関東方面の学生に向けた国家試験対策と居住地域での国家試験対策講座などの情報提供を行った。また、「既卒生のための国家試験オリエンテーション」を実施した。対象学生が国家試験を受験する来年以降にその効果について評価する。各教員は科目の中で国家試験の対策も意識した内容で工夫した。

2. アンケート結果の課程会議での報告と検討

卒業生の動向について全卒業生に対して、その後の動向をアンケート調査した。結果の分析は、後日共有する予定。キャリアアップを目指す学生への支援として対面授業の際の交流や質問コーナー、学修相談が学生にとって利用しやすくなるよう工夫やアナウンスを行った。

今年度の取り組み

1. 国家試験支援の継続

「国家試験に対する支援」を肯定的にとらえる学生が年々増えている結果から、現在実施している支援内容を継続しつつ、地方会場の学生に関しても昨年から実施している内容の評価をして今後の支援策を検討していく。教員による講義を希望している声があったことから、対面授業の中で意識してかかわることを継続していく。

2. 学生へのかかわり方

教職員のかかわりに関しては高い評価を得ている。これまで通り学生に関わるとともに、学生からの肯定的な声を、各教員心に留め今後も継続して支援していく。また、自由記載にあった「積極的に先生方との関わりを持たなければ良かった」という声も大事にし、気兼ねなくアプローチできるように、各自が工夫する。

3. キャリアアップを目指す学生への支援

本課程卒業生は、年齢的に次のステップアップは難しい反面、進学した先輩の話聞く中で、高いキャリアアップへの意欲をもっているといえる。このことは、卒後様々な研修に参加したり、本学で行ったリカレントにも高い率で参加している事からもわかる。勤務先の状況によっては組織だったリカレント教育の機会が得られにくい中で、いかに学習が継続していけるかを考える必要がある。

キャリアアップに関しては昨年度からの懸案であるが、通信制課程では教育体制の限界から学生の要望にどこまでこたえられるかという問題がある。そのような状況の中、各種セミナーの紹介や卒後教育が可能かどうかについて意見交換をした。

今回のアンケート結果に関しては、今後も協議を継続して教育改善に努めていきたいと考えている。

謝 辞

おかげさまで平成 27 年度の年次報告書を刊行することができました。皆様方のご協力に心より感謝申し上げます。

年次報告書は、平成 25 年度分から大学ホームページ（HP）に掲載し情報公開していますが、教員個人の活動報告は、平成 26 年度までは学内掲示に限定していました。平成 27 年度分からは、教員個人の活動報告も「年次報告書 分冊」として大学 HP に掲載しますので、これにより年次報告書は全面公開となります。

年次報告書は毎年実施する本学の自主的な自己点検・評価活動の記録です。1 年間の活動を年間活動報告として記録していくことは、PDCA サイクルの第一歩です。

平成 27 年度は、既存組織の枠を超えて、大学全体の課題や目標に対する取り組みを点検・評価していく体制の構築を自己点検・評価委員会の年間活動方針に掲げました。1 年間で達成できる目標・方針ではなく、継続目標となります。

今後とも、自己点検・評価委員会の活動に対し、皆様のご協力をいただきますよう、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

平成 28 年 6 月
自己点検・評価委員会 委員一同